羣書一覧　六

地理　名所　道

雜書　群書類從

内閣文庫		
番號	和	8949
冊數	6	（6）
函號	261	14

国立公文書館
National Archives of Japan

地理類

日本風土記　写本　五十巻

續日本紀巻之六に曰元明天皇の和銅六年五月甲子畿内七道の諸國に制して郡郷の名好字を着其郡内に生ずるところの銀銅彩色草木禽獣魚蟲等の物具に色目を録し及び土地の沃塉山川原野の名號の由るところ又古老相傳の舊聞異事史籍に載く言上せしむとぞ○本朝書籍目録にも風土記のことあり扶桑略記にもしるしたりとぞ○今井似閑が万葉緯に今案するに元正天皇風土記の端をひらきたまふにや紀中に撰進の文をみず又或はいふ仁明帝これを採したまひ延喜の時全く備はりしといふ説は非り又元正帝より以後往々これを撰進する依て史籍に載ざるの出雲國の風土記に至て巻末に書して天平五年二月卅日これを勘造すといへども此間これを勘造すといへども

全からざりしは亡失せしなり。茲に依て延喜の賢主展轉反側して諸國
に探り求めたまひ官符を下し諸國風土記の文をたてまつらしめたまひしは則これ
なりしかども今に備はるはいくばくもなかりし。書目に事扶桑略記に見
えたる書なれども載するところの風土記の殘篇も亦失へり。
惜哉僅に存せるも仰て歎ずべし。今たゞ全く部するものは出雲一
國のみ流布のものなりといへども傳寫の誤多かれば今書寫す
るところのものは傳て出雲の國造の文庫にありしところと因く全きを
以て篇首とす。伊勢豊後これに次。餘は諸書に引證するところ
の遺文なり。その外好古の者の所持の篇あるよし云〻。○本居宣長
風土記はいにしへのものなるに今は唯出雲一國のみ全くて他は殘りなく
外はされたるものは一すぢもなくなりにたりとぞ。こは應仁よりこなたのみだれに
きこえし都のみだれよりなる書どもはみなうせたりしなれば今はちかごろひ
しせあるものなれども今の世のごとくにしても學問するものもなかりしかば
く書もえうしなひけるものとしりしかばむげにまたかたちもなくなりぬるなり

ほりしば今のみはいかにかおもひけん。學問するもがらもいとゞまれにして
京なりしではおほく書どももいかなりしが故なり。あはれにしかも國のうさ
かはしもこれをおもへばかなしきことなり。○しかれば好む世
のなかにこそあれ。今は風土記も今の世にあるものかは。わづかに
ちかごろのむかし時代のものはありしかども、やはりそのまゝにてはさはり
あるべき書どもあまたありしが、ぬけたるものなりけり。世中に豊後のはなきにあらず
なれどもたゞいさゝか殘りて全からずともかくあるべきはいとく
おほかるも殘りてはいかなる故ありしにや。あはれなる世の人のしるところ
にはあらじ。すべてのものはいにしへのことをしりたるものはなかりしは
かくもあるまじきことなりけり。近き世よりこなたに殘れるもいとまれなり。○同人の説に諸
國の風土記ども亡失りしを釋日本紀に仙覺が萬葉の抄に
引出てのこしおけるはこれこそ古學の助なれ。○壷井
義知が昔傳拾葉に曰我日本の國の名の由來を和氣の人の世に稀なりしこれ
いふにかれこれ風土記その書わけの縁起なりとされば風土記は六十六巻

もろ〳〵六十六箇國に配當ありしを元弘建武より已来騒乱うちつゞき
忽ち闕かりし就中は土御門応仁文明の大乱ハ洛陽より起りてしかば
東夷西戎こゝに入て其勢殆卅万騎に及べりとぞされバ此乱世に秘府の重
宝記録等大半滅亡しけり此に依て風土記も失て行しかば其後此
彼より搜出し〳〵纔十巻はかりなりしかども今ハ行方なし
あらずゆへ○雉嘉格云 朝野群載巻二十一諸國召風土記官符
を載てこゝ 大政官符 五畿七道諸國司
應早速勘進風土記事
右如聞諸國可有風土記文今被左大臣宣偁宜仰國宰令勘進之若
無底搜求部内尋問古老早速言上者諸國承知依宣行之不得
延遁符到奉行 参議左大辨従四位上兼行讃岐權守源朝臣恒外
従五位下行右大史阿部宿祢忠行
延長三年十二月十四日
されば諸國より勘進せし風土記の残篇の今に存するも有しとぞ

又好事の徒の偽作して残缺あらせしもあまたあり今井氏の説乃
ごとく古書どもより引用して風土記の説どもを拾ひあつめたるもあれ
おほしたかくあつめしなどもありていづれとしもしらずくは風
土記の残篇なりとも真偽わきまへがたきもあまたあれば
なりし今此ほか国〻など以て決定して世にひろまりて残篇とも
称へしものなし

日本惣國風土記巻第五 山城久世郡 一巻
奥書ニ云右山城國久世郡風土記總残十一程千百雖數之無念也漸以閑
院大臣之蔵本引合官本校合之畢 嘉慶二年六月中旬 左羽林郎藤原光隆

山城國風土記 殘篇 一巻
奥書ニ云山城國風土記三郡 葛野郡 紀伊郡 久世郡 八箇者以権少外記中原朝
臣師□之所持之本写之畢蠧文虫食篇簡之難無是非者也 永禄
元年十二月三日 熊野山滑良快書判

日本總國風土記巻第一 一巻

奥書云右之風土記者山城國宇治郡之餘巻也云々嘉慶二年乙丑四月下旬左中将藤原元隆

日本惣國風土記第二　大和國　一巻

奥書云右風土記残冊十七冊之内大和國令度以台命之故ニ訂ス誤字ヲ者也寛文十年庚戌二月望大納言源通村在印

日本總國風土記第十六　大和國宇陀郡残缺　一巻

奥書嘉慶二年藤原元隆

日本總國風土記第十七　大和國平群郡残缺　一巻

奥書同上

日本總國風土記第四　和泉國　一巻

奥書云右一巻脱落錯簡不少惟以写本ヲ不違一字ヲ書写スル者也　文和元年壬辰四月十五日朝散大夫中原師行在判　寛文十年　源通村

日本總國風土記第二十九　和泉國日根郡残缺　一巻

奥書云右風土記云々藤大納言高基卿家本校合畢又文和元年中原師行

日本總國風土記　攝津國有馬郡　一巻

奥書藤原元隆

風土記第十二　伊賀國　一巻

奥書云天正二年三月下旬權少外記中原忠胤在判

同異本　一巻

奥書中原師行

奥書　文和元年中原師行　寛永十年　源通村

伊勢國風土記　員辨郡残缺端四行虫喰　一巻

風土記　伊勢國桑名郡　員辨郡　度會郡残缺　一巻

奥書無名

風土記　尾張國　一巻

奥書云以伊勢長官蓮明院家本写之畢為袖珍可秘者也權少外記中原〔師〕〔職〕在判　文亀元年辛酉四五月十三日　又云尾張國風土記全部一巻〔以〕〔御〕〔府〕〔庫〕〔御〕〔本〕〔令〕〔写〕之畢雖然虫食脱簡火災等無是非事歟　十住心院心敬判　大永四年甲申三月廿七日　又云右之風土記二巻罹火災虫食缺為一冊而漸繕写郎為袖玉惜哉脱簡多而亦紕繆丹羽智多山田春日部愛智之四郡唯期後来同学而已　弘治三年丁巳五月廿四日權大宮司富成判

日本總國風土記第[illegible]十九 参河國宝飯郡 一巻 奥書闕

日本總國風土記第四十[illegible] 参河國八名郡 一巻 奥書藤原元隆

日本總國風土記第四十六 遠江國伊波多郡残缺 一巻 奥書仲原師行

日本總國風土記第五十二 駿河鳥渡郡残缺 一巻 奥書同上

日本總國風土記第五十四 駿河伊穂原郡残缺 一巻

奥書同上 又云右風土記以舟橋秀賢家本写之畢又明暦第二丙申

日本總國風土記第五十五 駿河安倍郡 一巻 奥書師行 通村

日本總國風土記第五十六 駿河冨士郡 一巻

奥書文和二年 仲原師行 又右風土記以舟橋秀賢家本写之畢又明暦第二丙申被聴之書写之畢右當家之制書也 中原職忠 又云右風土記駿河郡部以野村宗竹子本與中原職忠入道萃菴翁家本校合畢又万治元年戊戌五月下旬 交野内匠頭 後水尾院御書庫奉行也 在判

日本總國風土記第五十六下 駿河國駿河郡残缺 一巻 奥書中原師行

日本總國風土記第五十七 駿河國益頭郡残缺 一巻 奥書同上

日本總國風土記第五十八 駿河國止駄郡残缺 一巻

奥書文和元年 中原師行 明暦二年中原職忠 万治元年 交野内匠頭

日本總國風土記第六十一 甲斐國八代郡残缺 一巻 奥書中原師行

日本總國風土記第六十三 甲斐國巨麻郡 一巻 奥書左中将元隆

日本總國風土記第六十四 甲斐國都留郡 一巻 奥書闕

日本總國風土記第七十 相模國高坐郡残缺 一巻 奥原藤原元隆

日本總國風土記第七十四巻 相模國足柄郡残缺 一巻

奥書中原師行 中原職忠 交野内匠頭

日本總國風土記第七十九 武蔵國多磨郡残缺 一巻 奥書師行 職忠

日本總國風土記第七十九 武蔵國足立郡 一巻

奥書云右武蔵國風土記足立郡之分以菅黄門家本與官本校合了又惜哉脱誤漏紙多而失素書専備出口翔之業而已 文明八年丙申三月下旬 一條 藤原兼久 又云武蔵國足立郡之風土記一巻以庭田羽林之家本写之畢又元亀二年辛未二月下旬 清二位宗利 又云右之風

土記之く以舟橋吏部之本與中家之本并合官本校合了所借脱簡耳
而錯誤多焉寛永八年仲夏初二　文野兵部侍郎書之　　奥書藤原元隆
日本總國風土記第七十七　牟差國荏原郡残缺　一巻
日本總國風土記第八十三　武藏國荏原郡残缺　一巻
奥書　文和元年壬辰八月　又寛永七年五月上旬　出納豐後守中原職忠
日本總國風土記八十四　武藏國豐名郡残缺　一巻　　奥書師行　内匠頭
日本總國風土記第九十五　安房國平群郡残缺　一巻　　奥書藤原元隆
日本總國風土記第九十二　上總國長柄郡　一巻　　奥書同上
日本總國風土記第百一　下總國相子郡　一巻　　奥書同上
日本總國風土記第百二　下總國揖取郡残缺　一巻　　奥書同上
日本總國風土記第百六　常陸國筑波郡　一巻　　奥書同上
日本總國風土記第十八　知加都阿波宇美國淺井郡残缺　一巻　　奥書同上
日本總國風土記第五十七　信濃國水内郡　高井郡　埴科郡　小縣郡　諏訪郡等　一巻
奥書之右一巻脱丁多錯簡又不少雖然以写本不違一字書写者也

天正二癸酉三月二十日　權少外記中原忠胤在判　又寛文十年庚戌六月
十八日　大納言源通村在判
日本總國風土記第百四　陸奥國名取郡　一巻　　奥書藤原元隆
日本總國風土記第百六　陸奥國宮城郡　一巻　　奥書同上
日本總國風土記第八十三　加賀國加賀郡　一巻　　奥書同上
日本總國風土記第八十四　加賀國石川郡　一巻　　奥書同上
日本總國風土記第三十　但馬國出石郡　下郡　養父郡　美含郡等　一巻
奥書　中原師行　源通村

出雲國風土記　　二巻

巻末ニ書してゝ云天平五年二月廿日勘造之云く○按ずるに此両巻のこ
風土記の中の今く残れるものなり　天平五年ハ元明天皇の諸國の風土
記を撰せしめし和銅六年よりハ二十年後なれバ　醍醐天皇の官符を
以て諸國の風土記を召出されし延長三年よりハ百九十二年前なりされバ
和銅より延長まで二百年余りの間ニ早く亡失するもの多かりしなれ

日本總國風土記第四十七 備中國 小田郡 後月郡 殘缺 一巻

奥書云右一巻罹火災兵乱虫食之患絶殘簡如件惜哉唯期後来博覧之是正耳 弘治二年丙辰五月十一日 權大宮司富田成在判

風土記 豊後國 球珠郡 大野郡 海部郡 大分郡 速見郡 國埼郡 一巻

奥書云写本云永仁五年十二月十四日書写畢同十九日一校了 文禄四乙未年臘月三日書写校合了 埜舜 ○按するに此豊後風土記異本ありて前後相違す黒川道祐の雍州府志の凡例に云本朝古有六十六州之風土記今纔有出雲豊後之残簡存すとし

肥前風土記 一巻

此肥前風土記ハ近ごろ長崎人大家惟年のもとより出たるにして寛政十二年荒木田久老校正し訓点を加へて上木す上層に異本誤字等の考按附す

出雲風土記考 写本 一巻 荷田春満

出雲風土記の誤字闕文等の考なり延喜式等に引證す○奥書云右一巻養父春満往年奉命校正官本出雲風土記之内所手録以贈下田師古也師古死後其父泉翁返之了以故在予家 寛保二年十月 荷田在満

國名風土記 八巻

巻首に日本紀之内國名風土記と題せり國々の名の由来をしるしたれども詳ならず作者もしられず

第一畿内五箇國 第二東海道十五箇國 第三東山道八箇國
第四北陸道七箇國 第五南海道六箇國 第六山陽道八箇國
第七山陰道八箇國 第八西海道九箇國附二島

筑前國續風土記 写本 二十八巻 貝原篤信

本居宣長が玉勝間に云筑前國續風土記といふものは貝原篤信がかけるにてはなはだくはしくよろしき書なり…

これ貝原乃翁ハ名たかき儒者なりしかバ此書もおほやけにしられ世に
ひろまりぬ此風土記ハ其中にえらびたる事ハいかにぞや世にまれなる書なれバ
しておのづからちりうせんことをおそれて書写しておかまほしく思ふ者もおほく
ありき○雅嘉按ずるに此書坊間に流布せざりしに其ころしもたまたま
人のもとめたるに友人木世肅子の家に一故家の蔵本を転借せしかバ江
て幸に全部を熟覧しかば抄録することをえたりしかバまたこのころ書の
序目等をあらはしぬ○巻首題号の下に貝原篤信選定 貝原好古編
録とあらせり仮字真字ハ自序をかなにのせて両序其趣を用ゐ採集
の例のごとし次に目録をあぐ

提要 一巻　福岡 二巻　博多 三巻
那珂郡 四巻上下　席田郡 五巻　御笠郡 自六巻至八巻
夜須郡 九巻　上座郡下座郡 十巻　嘉麻郡穂波郡 十一巻
鞍手郡 十二巻　遠賀 十三巻十四巻　宗像郡 十五巻十六巻
裏粕屋郡 十七巻　表粕屋郡 十八巻　早良郡 十九巻

怡土郡 二十巻　志摩郡 二十一巻　古城古戦場 二十二巻至二十六巻
土産考 二十七巻二十八巻
○毎巻小目録ありまた一巻提要にハ総論 國中田畠高 戸数 人数 町数 神
社数 寺数 馬牛数 船数 郷名 河内名 廣野 高山 深谷 松原 廣村
大塘 廃寺 十三塚 石窟説 海邊石塁説 筑紫探題 河水記 瀑布
飯盛山等の事を記す○仮字序に云 上略 微臣をさなかりしころほひ君命を
けくるしく都にまかりし時より目のあたりみしも多くあつめしは 先公の
時いまだ世をしらせ給ひし此国のことをしるし又聞たりし折々記しおきて別巻とせし
ゆゑさるしことしなつしく巻ハおほやけにまさりしぬるに
しかしれまつらく吾 邦君の仰せしによりて此なしひ
をうけて 國君に報じまつらんとする事ハ いにしへより
べきなりしず仰ぶらんやさだかならぬ事しるしたるもあらん
てせざるべきやされども世におろそかなるもいやしけれど世にお何事もなし
まざなしたびしやまとの文字にいさゝかふるまひのしるしあるぬ

まへられけるに先の君のさぜうおほきに侍りしとしてけふのよ物かたりし
かばおほいなる悦びにたへずいちはやく報じ奉りてけりべきよすがもな
かりあんとく前に十年ばかり八巻はかりしはことくすれば黒田家譜につ
くつまねてかりてあへ又此書は清らかにおなじうつせしあまりぬれば君の御
かりし此人よりいまし今はなけく國の中はいふもさらなりめぐりて此書
まめやかにさることかなふ事はなし我家姪(カ)好古(コ)もまた今やはけて
それよりあとつぎ日のちは里ごとにあつかれば高き山にのぼりつゝ
谷に入けるしきなきあやうき道にも行たちてよろつの事も委しく実に
風あつき日ないつとはずしてめぐりみるに凡八百邑にあまりつゝ邑毎
に土民等ににいひかたらひておほよそくだりてそのしるしをとめて
かゝるふるき紙に書とゞめ侍りしに病にかゝりてそのまゝすぐしけり
すら九なりしは老の後なりしくまゝしたなるしけりてもあつめ上りて
うらおさなきもあつめしふるきをもずくと物をつゝみやめでたし
くしよのまゝてきたるにはのかなしきたまへしうちに好古にえりけるおほよ

いつしかこの時此國のものがたりを記(キ)せし事を伝へしくはしくのせたりとかゝり
けるにはかるのかりの書をよみとゝめし好古は此書の草稿(ジャカウ)を作
らせ侍り好古元禄(ゲンロク)書をよみてすてきてあることふかくかへりみておもひてかけり
ていしく作りあへることを御前にしかも此書ども其のかたはしへ奉ることひあ
つめたてまつりし事なりけりとあつまりて十四郡のものの八千にあまるほどにしく
はかりてかなせる其かたちもれなきを八郡にわたりてもれなくすなはちその所ごとにいゝしたる
此ごとくいはゞ其功おほいなりずしてうちつゞきなひ世にさかりしあたりし
より才はかりをさきめくらしがたしず此時すでにいりて年月はかりあれ
むなしく千巻のよりのかたちをひらけはぬことなきその功もなかりしくもなく
おほえしるところをたもつにもあらねばことにいふべくもあらずまゝこそよ
纂(サン)記しくうるるにはもとの書のまゝをとりしかば今もれたるもちかくせらるる
人くしもかはりてしかもいつはりなきをあつむるよしのちは日なる
かくしてたのしとなかんまくあひたらぬをもとのうちなき身なれどもこの書
てらかしつき作り給ひしは今のうつくしいにしへのうたかひなく見るべし

うつれるかしくみる〇く擬らるゝ物もなりしをへんをほめられど嘉加
つきぬくいまだしらず郡記宗像郡二巻をれがあひかれが但をとじ
巻しれちをとゞろかしめ物もしきありうつ文民俗のいつゝてあつくし
ハひかしやりんけゝりやすらんうゝはうしるひ近きせのてがまう
せしうゝ物にもゆゑにてりかれ今うが〇其あやまり物ゝでしかつゞ
物助けりハうくつしけ一すじかあしがすが所く城ゝしでくしそのうび
其里〳〵よりくうく名跡し其事實物きことめありもそろうまうのくだちう
ずりきのたくなハそうゝへし又くりしゝあしなめ中へよけつかゝうしび
草稿物にてやゝやゝ切物なし物なりかりく筑前續風土記にいひ一部
うちく二十巻ありハまろしすいゝかしのちの觔は勅あつてく
すでく日のりの風土記とゑゝしのへさせせよめでゝせらせたりあれ
む彼書よなんずしへかゝしゝりゝてもし其名物えしりくゑらけりり
類物あり四りて提要録一巻福岡博多及十五郡の記二十巻古城古戰場
の記五巻土産考二巻あり提要は八國の中乃る大概にしてしく一部の

めさまよりしむ諸郡の記にもろ〳〵村里をしるしやまいちしるき所を
ずすひ川のながれ廣き家の事をくはしくあらはしまた古歌を附じ
傳記をのせて名所古跡をしるし今代よりしるされる神社佛堂のるそ
うたゞろ物も残らずしるし其たゝずまひをよくしるしけるゝり目物
おどろかすもすれゝすゞしかるき殺物ハかれぬめたくまうし
めたしうして人の目を佳境をのせ傳古城古戰記ハうちく
の城主の名合戰のありさま物もくはしく今の世語をもくハしくのせ傳
すべて此書よめしし凡九百十六丁にして土産考ハ國のものよおひあ
草木禽獸魚鼈のおいくハしくちらし物以て作るものなりものの名けその
そもあらし作りぬこゝ君命物をうけてうつしのこ今のうつしくひまり物の
ありしじめえぬ事すでよ十八ちう六年物すがぬかれ大馬のごとしもろの
なる事作りりく七十にまり四年作りぬことく〇漢文の序の作ゝよ元禄十
六年歳在癸未十二月朔日　貝原篤信謹上しまつらす

民部省圖帳　尾張國　写本　二巻

巻首に大日本國東海濱道尾張國民部省圖帳とあらせり葉栗郡
の行程假粟等ありて川村神佛等のかのせて元亨二年十月　史生源忠
勝秦行宗等の名あり　今一巻ハ海部郡の圖帳なり○按ずるに御室
書籍目録に民部省圖帳に載て巻ねはもらさず又舟橋環翠軒
の貞永式目の注にも民部省の圖帳とて数百巻ありて國郡の膀示を
明白にのせたり今ハ世にありしかな晴夜に燭をかかす盲目の杖をうしなふ
かしつかなし　諸國の堺相論當時紛紜しかたきもしるく○又按ずるに
日本春秋巻之五にいふ孝徳天皇丙午大化二年春三月　新定國郡
境造圖牒　僧顕日今民間秘田積簿日永帳蓋御圖牒之訛也

日本國分記　写本　十巻

六十餘州の土産人物穀物等のけちあらし毎國図所かしたかせり天正の
頃の書としるかり

日本國圖　一鋪

これハあまねく日本の圖を造りしハ行基大僧正にしてそれより図拾券

おほく載たり又足利時代の圖其餘古圖往々写なりてあはせり唐本の日本
の圖をのせたるハ圖書編武備志海防纂要全浙兵制海東諸國記等
なりいづれも國名の差訛方隅の倒置等あり

大日本六十八州圖　写本　七十鋪

國ごとに四方の里数郡村山川城主の名などをくはしくしるし別に
蝦夷朝鮮の二圖を附す

雍州府志　十巻　黒川道祐

山城一國の事を漢字にて記せり漢土の雍州ハ長安ある所なるをもて山州
を雍州に比してかくハいへるなるべし此書の編集も則大
明一統志の體にならふといふべし門類をたつ
建置門　形勝門　郡名門　風俗門　山川門　神社門　寺院門
土産門　古蹟門　陵墓門
巻首に賀茂川以西の圖同以東の圖あり○貞享元年孟夏林整宇
主人序　同年鶴山野節序　自序等あり

山州名跡志　二十二巻　二十五本　沙門白恵

全編片假字にて記せり○元禄十五年三月自序に云予酉邦に生れて
盛年より洛下に来りて棲遅すること久しといへども本邦の史録ゟ図
記の類しらず當州の名境荒廢すしかりしばすたれしもの
慨然としてこれをうれふ故に傳記を考へ和歌を閲しあるひは巡歴して芳
蹟に到り其旧跡を尋ね其名をしるし往古の人の視聴に残す
もしこれあるかぎり輯録す周覧の間覚えず二十餘霜を經たり

巻之一　凡例　平安城興基　山城八郡方位図　八郡封境
巻之二　愛宕郡　祇園より清水坂に至る　巻之三上下　同郡　清水寺より泉涌寺に至る
巻之四上下　同郡建仁寺より百万遍に至る　巻之五　同郡　河合より静原に至る
巻之六　同郡葛野郡　松崎より杉坂小野郷　巻之七　愛宕郡大宮森より雄に至る
巻之八上下　葛野郡小野より水尾に至る　巻之九　同郡　小倉山より大江坂に至る
巻之十　乙訓郡　西丘より山崎に至る　巻之十一　葛野郡乙訓郡紀伊郡西院より古河
巻之十二　紀伊郡　一橋より木幡に至る　巻之十三　同郡久世郡綴喜郡墨染より橋本に至る
巻之十四　宇治郡日岡より笠取に至る　巻之十五　同郡久世郡小栗栖より宇治田原に至る
巻之十六　久世郡綴喜郡相楽郡巨椋より笠置に至る　巻之十七　洛陽部
巻之十八　殿舎部　巻之十九　大内裏部　巻之二十二十一　洛陽寺院
巻之二十二　洛陽神社

巻首に宝永辛卯春國子祭酒林鳳の序あり○此書無名巻瑜伽林隠士如是相白恵撰とあり巻末に宝永初元丹水奇峯の
隠士碩星の跋あり山州名跡志は僧白恵の撰する所なり恵字は雪庭
又如是相山雲子と号す姓は坂内代々武藝を以て家を立
るが箕裘の業を継ぎ壮歳にして洛下に来り寓棲すること数十年にして篤
仏乗に帰依し母が為に遂に僧となる

山城名勝志　二十一巻　三十本　図十二舗　大島武好　正徳元辛卯七月刻

山城一國の事蹟をしるす古書を引てこれを識す其引ところの書の原文
は漢字あるひは片假字或はひらかなにしてくはしく書のまゝにこれをしるす
參其引書七百十三部にも及べり考索蒐輯すること凡三十年かゝれり
序中にみへたり○全巻散位正六位源朝臣武好輯録とあり

巻之一 宮城部 同巻より巻之五まで 洛陽部 巻之六 乙訓郡
巻之七より巻之十まで 葛野郡 巻之十一より巻之十五まで 愛宕郡
巻之十六 紀伊郡 巻之十七 宇治郡 巻之十八 久世郡
巻之十九 綴喜郡 巻之二十 相良郡 巻之二十一 郡未勘部

附図十二鋪

総図 一鋪 東西両京図 一鋪 八郡図 八鋪 大内図 一鋪
八省院豊楽院図 一鋪

○巻首に宝永乙酉年筑前貝原篤信の序あり次に同人の平安城記の漢文あり巻尾に武好假字の自跋あり正徳元年初秋上木す

京城勝覧 二巻 一本 貝原篤信

一名は京都めぐりと称す洛中洛外毎日見物の案内京町小路の由来洛中の名所古跡寺社をしるす事甚つまびらかなり○拾遺ハ八瀬 大悲山 岩屋 田原 松が崎 津國島上郡の名所旧跡をしるす宝永三年篤信の自序あり凡そ此都の内外の名區勝地のこらず是にしるす陳列碁の如くよ

しとよぶ京なる人たまさかにも名所のこらずたずねみんやうなるもなくあまねく人のいまだ名勝の所をしらずしてむなしく月日をすごすこととなりぬ此書をもちて四方の名所をくまなく其名をしらしめんとて日ごとにみるべきところをしるしつくせりのこらずしるしたればおのづからあそびのついでにも其名所をしるべしとぞいへり

山城志 十巻 九本 並河永

日本輿地通志畿内部六十一巻の中第一巻より第十巻に至る書の體は漢土の地志にならひてことごとく漢字にて記し和歌なども引く事なし万葉假名なとを以てこれを挙て國ごとに一國の畧図を巻首にあらはし郡界の所在を明す書中名目は左のごとし

城池 壇廟 山陵 苑囿 百官 山川 関梁 土産 神廟 陵墓
佛刹 古蹟 氏族 建置沿革 府治 彊域 形勝 風俗 祥異
租税 郷名 村里 公署 藩封

○此日本輿地通志ハ並河永俗称五一郎友人越前の関祖衡群書を蒐訪しくられを野老ニ訪ひ竊ニ一書を作く地志ニ擬せんとす
うえの書成ニ臨みく疾革かりし时五一郎ニ託しくこれを遂しむ
行ニ公乃恩命を蒙りく五畿内を巡視し五年を歴くちぢめく
業を卒ふりく巻首ニ名を付しとする越州関祖衡纂輯 丹州
並河永校と志るしく行りし此仍を亡友ニゆづりてこのかり○
巻首ニ上書ありく奥ニ享保十九年甲寅二月丹州書生並河永謹上書
としるせり

大和志 十六巻七本 同上

日本輿地通志畿内部巻十二より巻二十六ニ至る享保丙辰の年春上
木す

河内志 十七巻三本 同上

輿地通志巻二十七より巻四十二ニ至る享保乙卯春刻

和泉志 五巻二本 同上

輿地通志巻四十四より巻四十八ニ至る享保丙辰春上木す

摂津志 十三巻四本 同上

輿地通志巻四十九より巻六十一ニ至る享保乙卯冬上木す○已上廿五
本を五畿内志と称す○多田義俊がちゞや草ニ云並河五一郎といふ人
五畿内志といふ書を行ひしく板行したり彼書謬多し大和志
吉野乃条ニ鮨を腹赤奏の故事とす腹赤ハ肥後より献じく吉野
より献せず通説鱒なりといへども師遠の年中行事にも鱒よ
とハ大異しく贄よりいふなりんと壷井公羽ぶ論じしとかり
いかんや鮎と鮨の説ハうりたらず摂津志ニ僧の日羅の墓ハ天満ニ
在りと云く日羅ハ将軍めきたる職ニく僧にハあらず日本書紀敏明
の巻より元亨釈書ニ僧とせしより道春も僧のやうに神社
考ニ書れしハ誤りて太子傳十巻ニよすじくされたる太子傳も二
巻の平氏傳ニハ僧とハみえず又同国名鑑の教行寺といふ条下に
蓮如此寺にく教行信證を書しゆへにあて此寺ハ親鸞聖人

て蓮如なりしが其は蓮如書写の教行信證にてありし故教行寺より
はじめてしるゝはやすきのへだゝりしくしるく

諸州めぐり　七巻　貝原篤信

巻之一二　西北紀行上下　山城西郡　丹波　丹後　若狭　西近江等の路
程を記す

巻之三四五　南遊紀行上中下　山城　河内　和泉　紀伊　大和

巻之六七　拾遺続諸州めぐり　美濃　関東より越前　敦賀まで

摂州島上郡高砂より室まで路程を記す

大和名所記　二十巻　十五本　林宗甫

和州の事蹟を詳しく記す此書旧名は和州旧跡幽考といふ〇
延宝九年辛酉四月宗甫漢字の自序あり古記二百余部を撮揚し
裁括して二十巻となすとぞ

第一添上郡　第二同上　第三同上　第四同上
第五添下郡　第六平群郡　第七廣瀬郡　第八葛下郡
第九忍海郡　第十宇智郡　第十一芳野郡　第十二葛上郡
第十三城上郡　第十四山邊郡　第十五高市郡　第十六同上
第十七宇太郡　第十八城下郡　第十九十市郡　第二十郡未考
古詠未考　延宝九年辛酉四月懶斎亀蔵漢字の跋あり

和州巡覧記　一巻　貝原篤信

一名大和めぐりの記と称す〇此書京より吉野へ往来の路次にある
ところをしるしつくし大和一国の名所古跡をしるし此路程の中にある
ところは和州めぐりの此書を袖にして行ば霊地遺跡行程里数郷
導を假ずしてしるゝより元禄九年刊行

摂陽群談　十七巻　岡田徯志

摂州の事跡を詳しく記す元禄戊寅の年菊池新之郎漢文の序あり
巻一二　摂津國緒歴　巻三より巻九まで　山　海　江　河　市　里
陵墓にいたりて歌名所と俗名所とを分ちてあげ
巻十　古宮　古地　旧屋　巻十一　神社　巻十二より十五まで　寺院

巻十六 名物 土産 巻十七 雑類 名木 名石等

元禄十四年上木す

浪速上古圖説 一巻 附圖 中村直躬

神武天皇の御宇より應神帝の御宇に至るまでの地形仁徳帝の御宇より安閑帝の御宇にいたるまでの地形を二圖にあらはし且神武帝御宇より以来の地形のかはりしさまを古事古歌を引て考へ訳しあらはし

○寛政七年武庫泰・海序あり同十二年三月上木す

難波舊地考 一巻 荒木田久老

巻首に擬乃落葉 高津宮 長柄宮 長柄橋 舊地考と記せりこれらは乃木しのまを日本紀古事記日本後紀文徳實録萬葉集等を引て考へて記しどもをあらせり寛政十二年刻

有馬事蹟考 写本 二巻

津國有馬の事跡を志し往古より温湯に浴せし人これ詩歌連歌和漢の文章等をあつめ載下巻には有馬より近國にいたる路程を記す

作者つまびらかならず

有馬山温泉記 一巻 貝原篤信

京都より津國有馬郡湯山へ行道すがらを志す宝永八年正月刻

士峰録 六巻 三本 菅徳菴

駿州冨士山のことに係りて詩歌和文漢文等を採録す歌は万葉集二十一代集拾遺愚草堀川百首より惺窩道春等の作まで載のせ和文は古今集の序竹取物語等の全文を録し詩文は和人漢人ともにのせたり

菅氏二男由益洞雲の跋あり

新編鎌倉志 八巻 十二本

西山公常陽より江都に至りたまふ次に鎌倉の名勝を歴覧したまひ古常なしく見聞すところを記さしめたまひ丙辰の秋特に河井友水に追して鎌倉に如しめ古祠舊寺より以下里巷荒村に至るまで蒭蕘の言をも質問しこれを載られし書中に見えたり○此書編纂にあづかりしの名 河井恒久友水父纂述

松村清之伯父考訂　力石忠一叔貫参補とあり
首巻　鎌倉事蹟の大意をあげ次に鶴岡の来由を記し東北の方
蛇が谷のあたりに至る　已下毎巻一日の行程を量て録し〻一冊す
○巻首に鎌倉總目　引書百十九部の目録　鎌倉の図等をのす○貞
享乙丑雀山野節の序　甲子小春　明の東皐心越の序　甲子姑洗力
石忠一の序等あり○巻末に貞享二年乙丑洛下書林柳枝軒茨木方
淑の跋あり

淡海志　附録一巻　写本　共七巻

近江一国のことをつまびらかにしるす作者つまびらかならず
第一巻より第六巻まで　國号　灘の称号　諸浦舟数　土産　舊都
古戦場　和歌名所　名木　古塚　神社　佛閣等のことをのす故を
いにしへよりの諸書を引てこれを證す
附録　近江國謠目録
白鬚　蝉丸　志賀　兼平　竹生島　大會　源氏供養　三井寺　関寺

小町　鸚鵡小町　已上百番　望月　鐘引　巴　烏帽子折　已上百番
今生巴　悪源太　已上三百番　伊吹　留狂　神楢　トンサダ　木戸巴
義平　三井水　多賀　伊吹弥三郎　法性坊　唐崎　雪月花
鶴次郎　泣不動　野寺　ツカフシ　八景　粟津原　現在熊坂
相坂雞　相坂盲　佐々木判官　醍井　草紙源氏　サチ　三井寺禅師
御輿振　島廻　浄名　慈覚　比良　秀郷　三尾　水尾山　志
賀忠度　已上十番

信濃地名考　三巻　吉澤好謙

此書一名科野名寄といふ信濃国の名所をよみし古歌四十餘首をあつ
めさ或は方俗の説をとりて其方角を考へあらはし餘多く古書を
引て徴とす編中すべて就て地名事實産物等の考を載するなか
舊記を援く事證を其下にあげて又土地の古名今世の俗名に変じ
たるをも考へあらはす信濃の全図及び郡々の図久米路橋の
図古牧地の図等あり編者吉澤好謙信州の人なし○明和辛卯信濃

源通魏の漢字の序　同庚寅安原貞平漢字の序　同八年藤原守万佐の假字序等あり

岐蘇路記　一巻　貝原篤信

貞享乙丑のとし篤信武城より西帰の時の紀行なり江戸より武蔵上野信濃美濃近江五箇國の路程を記す宝永六年の自跋あり

あづま路の記　一巻

上層はかりすなはの記　貝原篤信　下層　東遊草　土佐谷重遠

右の両書を合巻にして享保辛丑年正月刻

若耶群談　写本　二巻

若狭一國の事をあつめたる目録に小濱城より遠松原まで凡十一箇所とのす又遠敷大飯三方の地名あり其外若狭出産の名物八幡宮佛寺等の事をのせ別巻に若狭國税所今富領主代々次第文治より貞享に至る城主の次第又神社佛寺什物等の事を記す○宝永二年五月廿日明空書写の奥書あり○按ずるに若狭を若耶と称するは漢土乃地名に擬して假に称せし漢土の若耶渓は越州にありといへり

但馬温泉記　一巻　貝原篤信

但馬城崎郡湯島の記なり享保十二年九月篤信入湯の時の著作なり同十八年十二月上木す

懐橘談　写本　二巻

出雲一國の事を記す甚つまびらかにして名所古蹟より俗談の事実に至るまでこれを挙ぐ承應二年出雲乃國司よりまづひらくりし時の記にして彼地の食邑にある人のなりとす○此書直すららのをもとくありしく母の家にある人のもとよりかへし自序ありて又跋にある人陸績が橘を懐にせし如くなれりとて懐橘談と名づけたりとありけり○初に出雲十郡の図ありて次に海陸眺望の文ありこれは武蔵を出て路程は至りて兵庫より須磨明石を経て備前美作を経て出雲に至るまでの景望事実を寄せり次に出雲大概国十郡の事其外郷里の故事を記す不と自作の詩あり作者不詳

筑前名寄　二巻　貝原篤信

元禄辛未九月篤信真字の自跋あり右筑前國の名區古人の歌詠にもれたるもの凡六十餘境諸歌集及び古記のしるすところをあつめ考索すといへども又云此年各郡の郷邑を巡察して周く爰に咨詢しつくせり仍蒐輯して編となすなり元禄六年より來す

名所類

名所方角抄　一巻　宗祇法師

國々の東西南北をわかちて名所の方角をしるし此歌の引連歌の付合にたよりす寛文六年に本す○按ずるに此書宗祇法師の所望のいにしへは志らしく其方角をさだむるに親切なり今は人迂遠なるしく同じ郷にあり志のいとしるし似たり其都の名所をよみ入ることゞ有川五畿七道をわけて一道の中も國々を東西等をさしてまた一國の中にも郡々の方隅をわかちてのべしとく

勅撰名所和歌抄出　写本　二巻　宗碩法師

山嶺嶌等より次第して類をわかち名所いろはの次第にあらずこれをわかちて勅撰集の歌を引けり○奥書に云此勅撰名所和歌抄出為連歌用意宗碩法師抄出之分而為上下二冊云々凡連歌付合事至續後撰集可用本歌之由去年重而伺天氣令治定畢於作例者

至新續古今集可引用之間今取此抄也云々　槐陰散人御判 二条前内府

凡歌数九百二十七首抜之

歌枕名寄　二十五巻 三十九本　澄月

此書或ハ澄月歌枕或ハ澄月名寄と称す名所を代々歌の國分けして広くあつめより撰集の詞書なとを書のまゝに載て示されし

畿内部 二巻　東海部 五巻　東山部 七巻　北陸部 一巻
山陰部 一巻　山陽部 二巻　南海部 二巻　西海部 二巻
未勘部 二巻　惣目録 一巻　総計二十五巻すべて三十九本なり

○引書目録勅撰集ハ古今より新後拾遺まで目録の外より引用ひしものゝ書ども考ふるに　萬葉集　古今六帖　新撰六帖　現存六帖　六百番歌合　千五百番歌合　仙洞歌合　建保歌合　宝治百首　弘安百首　正治百首　堀川百首　野宮十首　懐中抄　明玉集　万代集　羽俗抄　良玉集等なり　總目の首に乞食活計客澄月撰とあらはせり　又同巻の終に真字の跋ありて世に澄月歌枕と呼ぶものゝ類一様ならず

或ハ歌数并二十四なりしものゝ有りあるひハ名所雑乱なるものありて信用とするにたらず頃日古本類聚一篋を得てみれハ人々の手にて挍合すれば衆ありに澄月歌枕名寄なり漸く僅に略つけたりしもので歴視することろに較正して則清書して正つたなき件の旧本に因てこれを模写し数月にして其功なりぬ又總目録一巻を製してこれを卯に附すとす時万治二己亥暦夷則中旬城北乞食沙弥消蓬子

名所類字和歌　四巻　細川幽斎

代々の勅撰集より名所のよみ侍る歌を撰びいろは国を分ちてあつめられたり○此書一に小名寄と称し又ハ類字小名寄と称す

類字名所和歌集　八巻　里村昌琢

二十一代集より名所の歌を採摘しいろはを以て名所を分ちて又の次第によりこれを列す○巻首に名所国分目録あり一名大名寄といふ寛文八年法橋昌琢の奥書あり此書元和三年の編輯し

類字名所和歌集抜書　五巻

本書の中より連歌の付合に便(タヨリ)あることどもを抜出し、よきものを撰ぶ。撰者つまびらかならず

類字名所補翼(ヨク)抄 写本 七巻 沙門契沖

昌琢の類字名所の歌ハ二十一代集の外に出す此書ハ萬葉夫木其餘古物語諸家の集等より彼類字名所の補翼となしたるものにして毎巻代々のはじめに契沖のおもひよりをも書入られて名所のその考どもあつまりて甚有益の書也○此書舊名(キウメイ)勝地一覧といふ

類字名所外集 写本 九巻 同上

右の補翼抄の外に考へ得られたる歌どもをひろく諸書より引て考へせり此書も毎巻のはじめに名所のことを論(ロン)せられたるもの多くあつせり或ハ古来伝へ来たる所の国の相違(サウイ)せるを逢月名寄松葉集等なども考へ合せてこれを論じあるいは名所ならずして名所のごとくきこゆる名の類どもあげ 恋の山 早川 涙川 秋山 みなみ川のたぐひ あるいは海辺とぞ國々にて名所によむ歌のたぐひのあるをもあげなどもせり

松葉名所和歌集 十六巻 宗恵

宗碩が類字名所集にのせたる歌どもをなほひろくあつめて二十一代集の外より類字名所集に載られざる代遺(ダイユ)の歌を拾ひもれたるを其他の諸書より採摘(サイテキ)せり引用の書ハ

萬葉集 二十一代集 古今六帖 現存六帖 新撰六帖 堀川百首 建保百首 藤川百首 神道百首 六百番歌合 千五百番歌合 御裳濯川歌合 宮川歌合 正治歌合 勅撰名所集 新葉集 歌仙家集 散木集 後鳥羽院御集 六家集 草菴集 方与集 玉計集 類聚名所集 類字名所集 後醍醐天皇千首 為尹千首 能因歌枕 大和物語 住吉物語 源氏物語 梁塵抄 八雲御抄 袖中抄 一字抄 撰集抄 懐中抄 夫木抄 七帖抄 春雨抄 題林抄 藻塩草 長明道記 等なり ○續松葉集巻之四にのす

この松葉集真書の文に云名所なき歌よりはじめて國をわけてならびたるさへ八雲御抄にいはゆる藻塩草夫木などは代々の歌を拾ひ出し粗(ホヾ)國の名をたてゝ集せしなど

入侍る秋を色そへりくさのはなのしづかなるハなりけり。古きもみハ古人も
とれる所にふかくさけりしあつめらひそへしゆゑハ同名なる或ハ名ま
國乃讃ぜつたる又かゝるあやまりくらぬ名所にまかしる歌をあげ人し
よろしきりげなんうたを歌をあげて簡にも及されぞちりしめくものを
手写し侍るはことに人あやまりなくしあやしひろはなくそされんを
なれむのしろもく此集あつきはつもりなりし元明暦甲の年夏はじめ
ほひつゝみすひとりくそしられたるもひとつてことを引るとあつきやむど
よみきこえる歌せぐしいづれそはげしいさもなし事うるのよ
いもやしせず都名代身なりてしるちも山をよみしくもとの年す
らんれ侯もなしきくとこしずかもなりやまに五うつ春秋なつくよ
ろいおさまる山のしやこうぬまく○此奧書に流るに万治三年庚
子八月上旬六字堂宗恵しるす

續松葉集 四巻 同上

松葉集編輯のつゞくに名所どもにもれし歌一首なりとも後集

くし頭書にうちゆへ名所の讀合の景物などあげて己上第一巻より第三
にいたる　第四巻ハ自作の和文七篇を載く

増補松葉名所和歌集 八巻　尾崎雅嘉

宗恵の松葉集に引あやまれる歌などをたゞし改め正し其餘日本紀古事
記萬葉集勅撰外の集どもなるハいふに及ず竹取伊勢大和物語をはじめ
源氏狭衣栄花平家曽我之鑑等の物語草子のたぐひより歌合の
類のあまた千首の類中古の家集近世名家の集など凡そ方々に栄葉等八
集諸家の紀行の類まで類ひく数百部の書ども引證しもらさずひろく名所
の歌をあつめいろはの次第にならべ又其の世歌どもの四季のよし合せ景物等
をも上段にあげし一覧に擒出しやすくし又よく合の證據等を
も八吉野山のごとき百五十餘首に及べるも餘ハ准知すべし○巻尾に漢土の
勝地などの歌ことを諸書より考へ出しくはしく載けり

新松葉名所和歌集 二巻　同上

類字名所澄月名寄松葉集等にもれし名所をあつめしびよ近世の新

名所 牛瀧山 信貴山 飛鳥山、品川 入間川 等をよめる歌ども近代諸家の集々考へこゝかしこ引書ども挙まゝに後の世のためにしてこれをのす

名所小鑑　一巻

名所のことばいろはの次第にしたがひて景物などあらはし　連歌付合のたよりを袖珍となしす撰者つまびらかならず

歌林名所考　五巻　西順

奥書にいふ連歌の付合に採用ゆべき名所の分今こゝに書出すところ凡六百所代々の撰集并に家々の集夫木歌枕等より二千六百餘首種々の景物等え及びつまびらかに書のすることのしるく

歌林名所追考　十二巻　高野直重

西順が名所考の増補なり

袖珍歌枕　四巻

名所の歌をいろはにわかちてしめしたり今世に行はるゝものなり

名所題林　五巻　岡西惟中

机右抄　十三巻

和歌の題によみあはすべき名所の歌ども類をわかちてしるしつむ撰集の中より名所の歌どもを撰びつゝ見侍るにいとたのしみのいろはにわけて上層よりよく今世に行はるゝもの也

歌枕秋の寝覚　二巻　有賀長伯

耳にふれぬ名所の歌どもをいろはにわかちあらはし一つ類を集めしくまゝにまかせ景物等をあらはしそのほか名所に附す

増補歌枕秋の寝覚　八巻　同上

前の書をおひおひ増補し名所の根元などを収めてゆくに京などをあらはしまうけしも便なし

名所法いま河　一巻　加藤景範

秋のねざめの中より近き名所どもえらみてしるし和歌会席の携帯によしとす象花自序あり

世々乃志をり　十二巻　有賀長伯

四季恋雑の題を部類して其題によりて古き集どもの名歌どもを
あげおく歌林なりしかせり

世々乃志をり追加　一巻　同上

一首ゝ両名所あるを合せて歌どもを抜出す

歌林草分衣　一巻

此書も四季神祇釈教山類水辺植物生類雑の題にて名所の歌をよみ
合すべき名所のうちかしこあつめて袖珍なりとす作者はまじりあり
ず宝永五年上木す

和歌名苑録　写本　三十巻　瀧本伊秦

國々郡次第して名所の歌をひろく諸書より考へ出しておさめ
のす紀行の文なども多くあげ引て地理の考へつまびらかなり
多し〇此書の撰者肥後熊本の人なり

和歌名所指南　一巻　二本

四季神祇釈教山類水辺植物生類天象人倫器財居所雑等乃

類わかちとりのく景物をも合せの名所歌をあげて但し名所のことを
挙て歌なきもあり元禄六年八月刻

名所和歌探本求源抄　二巻

名所を國わけにしてとりのくまゝに古今世代をしめ著しさるども
歌書二十部として注をつけ附す〇此書寛政中標題をかへてあらたに和歌
名勝志と号し梅月堂より版をかへて世に行はる

知事抄　三巻

名所によりて故事をあつめさらにいにしへの古今の世の歌委細に記すと
ぞよく注釈を加へて出せし

勝地吐懐編　二巻　沙門契沖

類字名所集の歌どもの國々の相違のすくなからむは漏脱の名所のすく
なからむは中古より近年の書に至る地名の誤りをもたゞし論じしるしあらため
正せり、それをとりての坂田の構は小墾田の坂田の誤りなる
〇元禄五年契沖の真字序あり又寛政四年伴蒿蹊これを版

くはしく梓ニ授くる跋と序あり

勝地吐懐編異本 写本 四巻 同上

刊本よりハ頗考證多くして首巻ハ勝地通考目録として二十一代集
所詠之名所和歌國分目録あり名所ニ似て名所ならぬ
を除くよしこれら千代の古道より刈生原ハまで廿九箇所の名を
挙次ニ名所と名所ならぬハ同名の分悪山より鵜川ハまで
三十六箇所の名を挙次ニ無海國ハ十四箇國を挙たり 已上首巻
第一巻 以行 巻首ニ國史の文を引次ニ鳩嶺 活道岡等の名所
を挙せり
第二巻 知行 與行 羅行ハ巻首ニ國史の文を引次ニ華堂玉水
等の名所を挙す 此巻乃奥ニ元禄九年八月廿八日 契沖しるすとあり
第三巻 也行 安行 恵行 巻首ニ安伎湊 布留川等の名所を挙
をし巻尾ニ國史の文を引て〇奥書ニ元禄九年九月六日二巻抄
出畢先有二巻合四巻草稿成訖 神通乗沙門契沖〇此本ハ

すなはち契沖乃自筆なり

今案名蹟考 写本 七巻 岩橋秀栄

書體吐懐編ニ似て類字名所集の國ノ相違のをあらためつまびらかに
論す〇按するに本居宣長も此書の事をくはしく論ぜり
〇巻末ニ日野資枝卿の跋あり

大和名所和歌集 写本 一巻 長景福

大和一州の名所をわかちて地理の考をあらはし古る古歌を挙たり
未勘の名所ハ奥ニあつめたり 巻末ニ歴代諸陵の所在を考へ
しるし又附す近きころの和州八景の歌をのす〇巻首ニ斑鳩隠
士長景福輯せり

伊勢名所拾遺集 写本 二巻

勢州の名所ならびに〇くはしく古歌を引てあらはしたれども
よりて〇此名所よりはじめて滞つる集家集又は漢千首などのうたを
引て近江中外ニ祠廟説負の指し 龍尚舎 漢字の

紀路歌枕抄 写本 七巻 之本

序に云 一巻より二郡の名所をあけて これより下は今世の人のよみしかれ名をとる あつめたりといふの書は二十一代集 諸家集 歌合 名寄 六帖等より夫木 百首類をのせたり○按するに此書 詳略の二本あり 一巻のはしには真字の跋あり 七巻のおはりは跋なし 毎條の中に注加の二本ありこれは源顕昭を補しものなりといへり

最勝四天王院障子和歌 写本 一巻

土御門院の承元三年十月最勝四天王院の障子に書れたる四十六首の名所の歌なり 春日野より詫間浦に至るまでをしるせり

建保名所百首和歌 写本 一巻

順徳院の建保三年十月廿四日内裏御会の名所百首なり 春二十首青羽川より末松山に至 夏十首大井川より松浦に至 秋二十首初瀬山より阿武隈川に至 冬十首清滝より鏡山に至 恋二十首伏見より名取川に至 雑二十首吉野より三津浜に至る すべてこれをしるせり

内裏名所四百首 一巻

右建保百首の人数の中 順徳院 定家卿 家隆卿 俊成卿女 以上四人の歌を抜萃して一巻とす

建保名所三百首抄 四巻

右百首人数の中 順徳院 定家卿 家隆卿 三人の歌を毛利元就の求めに応じて 紹巴 昌叱 二人これを注釈す

新内裏色紙形和歌 写本 一巻

寛政 新内裏清涼殿御障子大和絵色紙形の名所の和歌なり 色紙形筆者 青蓮院宮 大炊御門前内大臣 花山院大納言 石山前大納言○色紙目録 弘徽殿上御壷祢 亀尾山 閑院帥宮 桂川 冷泉中納言 常盤杜 有栖川宮 二間 春日野 冷泉民部卿 初瀬里 閑院尹宮 廿方野山 日野前新大納言 台盤所 宇津山 中務卿宮 田籠浦 飛鳥井右衛門督 浮島原 芝山前宰相 富士山 冷泉中納言 布障子 三保浦 帥宮 鬼間 信夫里 以上

安積沼 民部卿　布障子　松島 芝山前宰相　朝餉　遠里小野 尹宮
須磨浦 日野前新大納言　布引瀧 帥宮　御手水間布障子　三津泊 民部卿
御湯殿上　吹上濱 同上　布障子　藤代御坂 日野藤大納言　藤壺上御
壷祢　滋賀樂山 尹宮　志賀浦 日野前新大納言　真野入江 芝山前宰相　逢
坂関 民部卿　荻戸　清瀧川 中務卿宮　伏見里 日野前新大納言　廣澤池
冷泉為則朝臣　神山 帥宮　昆明池障子　嵯峨野 右衛門督　荒海障子　宇
治川 日野藤大納言

隨筆類

東齋隨筆　一卷　一條兼良公
後成恩寺兼良公の随筆にして和漢の雑談をあつめたる也本朝
にて随筆と号することの此書をはじめとす

榻鴫暁筆　写本　二十卷
此書ハ皇國の故事雑話を以外漢土天竺の事をも書てしるす
随筆なり全部はかりなるあしハにちられてけるを
第一　戯實　此巻にハ生死佛法前後　國土起　字源　詩初メ
歌ノ起等のことをのせたり
第二　一切施王　修楼婆王　五帝　烏鳥王　神功皇后　延喜帝
等の事也
第三　相論上　草花　春秋　月花　大宋元朝　大元日本等の事
第四　相論下　天台　馬鳴　麹多　善吉等の事

第五 論宗上 月氏
第六 論宗中 震旦
第七 論宗下 日域
第八 似類
第九 因果初善
第十 怨念
第十一 轉変
第十二 食事
第十三 霊鈎
第十四 珠玉
第十五 鏡
第十六 詞分
第十七 同名
第十八 居所
第十九 草
第二十 雑

○按ずるに此書一名暁筆抄と称す一條禅閤兼良公の作なりといひ伝ふるは大なる誤なり何人の作なりといふ事をしらず第十巻よりいひしせ和泉堺にて一夏むすびし事見えしこれをもてかれを兼良公の作とせしものなりかくありしかれど書中のすこしき所を以て考ふるにいふところもと明の比の作の著作なるべくとおぼゆれどもなほ見えず○此書の題号の事は此書の自序の中に見えたり

もしいまおりひたる明けて後のよまゐりし又此書第二十巻嵐物語の所に老のねざめの明やらぬ夜半の寝覚の床にもいひたるありしくあはれなきいふことを書おりし給ひけるもいとおもしろくかゝ記しこれは志ちのあしぎ事の名のごときこえしかれば作者の名はしられぬ○按ずるに揚野の何某は八幡の袖中抄にみえて賛せずの歌あり
あはれの事の外のこゝろときこえ、このかたよりは哭乃ねてきとりしまきかきつめても夜るとの歌よ廿二首よりくゑやすことのし

耳塵　写本　一巻

東山慈照寺の名にも知ける所でつかりかなり書院浴室船舎橋亭竹亭等の額の文字なしひて筆者の名かしくくはしくあらわす此書八りけるは二十四葉の冊子にしく作者不知の随筆

なりといへども當時慈照寺に存する所の舊記なりといへりさきに
友人江田世恭明和九年の比相國寺光源院の現住維明和尚より
借覧せしにつきて一本を寫せしを轉借してしるし置くもの也

老人雜話 寫本 二巻

巻首にいふ老人ハ江村專齋なり諱ハ宗具醫を業として初め加藤肥
後に事へ後森作州に仕ふ正親町院永祿八年に生る三好松永光源
院殿を弑せし乱の年生れ也寛文四年の六月没す壽百歳に満て
り○坂口法眼の漢字に抜する我外祖父專齋翁嘗て聞見すると
ころの事實の雜話父の執坦菴先生聴くにまかせてこれを記
深く篋笥に藏して老人雜話と目す先生姓ハ伊藤諱ハ宗恕坦菴
ハ其號なり寛永戊子八月卒す年八十六今家君手自これを繕寫す
時に八十五以て喜び以て懼る寛永庚寅孟秋坂口郁謹書○正徳
三年癸巳暮春武陽滄洲の假字序に我曽祖父侍松菴先生ハ
永祿八年乙丑に生れ寛文四年甲辰季夏下旬六日に没すといへども
既に百歳に満てり醫術を以て京師に居せりまことに希代の長壽
なりとて後水尾上皇勅して御杖を給はるとなり其時の和哥并に緋
世の寄子孫につたふされば雜話を伊藤宗恕記しはじめられし一冊あつむ
まで抜られたれど老人のお詞すこぶる周舟のなりかすかに追
慕するのもし宗恕ま八旬餘老人の孫婿坂口は眼立とこれ繕寫
するのとし米歳なりまた是世ては悦すなはちずいぶん○奥書に
云右雜話一冊者自法眼兼郁恩借之云々享保十四年閏九月四日
禮部侍郎藤孝在書○又奥書すこの書校訂のため諸家の傳
本を乞集むるに十数本其中しかれども片かなかなるは全冊な
るは乾坤二冊なるいはひとつて是なるべきなりしなりこれ
を乾坤二冊なるもの半ば超ゆ○按ずるに伊藤長胤の盍簪
録には水尾院仙洞にめして修養のことを勅問ありしに奏すらく
生平唯一の些の字を持す食を喫するも些食飲も節にす
るも又些養生も又些この外に術なしと帝大に感じおはしき

めしく鳩杖銀茶酒なとを賜りしとや

にぎはひ草　二巻　佐野紹益

紹益俗称灰屋紹益といへり本阿弥光悦の聟なり茶香鞠を名とす○ことに和歌をよくせり○此書はにぎはひ草と号する事ハ兼好のつれづれ草の趣意とハ裏表のちがひにて其茶香鞠をしひいハ和歌のみちをつくして貴人の寵遇ありしとそ其餘持しける物の意のどもおほくあらはせり随筆なれども下巻には光悦の鷹が峯の大虚菴の風致なとをくはしく書れたり

醍醐随筆　二巻　四本　中山三柳

三柳ハ京師の医者なり其の随筆の中にもつはら漢文和歌等をものせり土州の長澤道寿の門人なり儒教ハ三宅道乙にまなびし也此書寛文十年上木す○按するに三川随筆に云中山三柳ハ土佐の道寿の弟子にて濃州大垣戸田左門氏に仕官してありしが病氣になりて仕へをやめひさしく浪人してありけれバ匙かゝやうとして京都へ蟄居せしれバよき良医の名あれバ人これをとひて脉とりて是非なくして門オに云付薬をあたへしかとつゐにしたしく療治せず北水尾院の御脳ともきこえさせぬ醍醐へ隠居せし時何かとうけたまはりける身のおもひけるハ今程のねざめに人皆えあらしふせぐ北水尾院之御醍醐に山居せしときゝしあまたちかく入しところなりぬへき今ぞおもひしとの御事なり一首の御製ありしとされし

東見記　二巻　人見卜幽

昔呂与叔張横渠にまなびしが横渠卒して後東しく二程にまなびしがまなびし呂与叔ろ程にてところのこと編して東見録と号せり今卜幽も洛にありし日より道春のもとにありしが遂に東武にて賛執し謁見してより道春の風格を語らしものを記し彼呂与叔を摸擬して東見記と号

ゆるし貞享三年懋齋野傳序ありて上木す

年山打聞 写本 二巻 安藤為章

水府安藤氏の随筆なり 百人一首の事 万葉ハ勅撰なりとの事
童形の懐紙の事 女名の事 八事根源作者の事 十二ひとへの事
月代の事 よみくせの事 人麿の事 平家物語誤の事 隠士長流
の事 いろはの事 易然集の事 本朝世記の事 其餘ありける
ともなほあまた 巻末に元禄壬午の年のよしあらはし作あまたの圓珠菴契
沖阿闍梨行実の漢文あり 年山ハ別号也

年山打聞拾遺 写本 一巻 同上

世上流布のかき漏脱したるものに十條ばかりしるし拾遺とす 何人
のなすところなりしかしれず 打聞の始に八けれども十條おもちれ中
ようりけり

新安手簡 写本 二巻 立原伯時

新井白石より水府の安澹泊へ贈答の書簡の中 和漢の書籍の事

其餘種々あれども水府の立原氏記せしものなれば省略し

駿臺雑話 五巻 室直清

享保壬子九月よりの自序あり 駿臺問答の話をしるせるところハ
正道を明し 邪説を弁じ 学問の大綱に係りて 又ハ世俗の諺浅近
の語といへども平生のことに通じて観者の益ともなりぬべきものを
採りつゞくものなり ○寛延庚午十一月友糸明表漢字の序あり
駿臺室直清の別号なり

逸話 二巻

一名可観小説といふて駿臺白石の談話の事ども記せり

折たく柴の記 三巻 新井君美

自序あれども[illegible] ○奥書に筑後守従五位下源君美正徳六年丙申八月
[illegible] ○按ずるに此記の[illegible]
[illegible]

しつゝ古歌のよろしくくをうつしれたるものなりかし

たそかれぐさ　三巻　雨森東

雨森芳洲先生の随筆なり序もなくたゞあつめおかれしものゝごとくなれど
ことさへことふる一ツ々ちにしるしおかれしをも
おさなきをつけくせさしまいらせ給ひつれどもことはりがたく
人のためにしもおもひしたりておほやけにもすゝめし給
なりき○室鳩巣先生の跋あり寛政元年上本す

一時軒随筆　三巻　岡西惟中

和歌連歌の事其餘種々の事をのせてしるし給へるなりしより四巻となし
て仮名の紙に名を易へり

続魚名抄　三巻

此書も惟中の作なり長明の魚名抄にならひてしるしくはへたる
ものなり○延宝庚申八月自序あり同八年八月上本す

一枝軒随筆　写本　五巻　野村尚房

尚房平生閲する所の書の抄出にして歌学よりしてはしめて其外の
又元禄の中より寛延のころまで世に見聞する所のをしるし或は其比の
公武及び地下人の話をもあつめのせたり○尚房ハ備前岡山の人俗称
権六一枝軒と号す梅月堂宣阿の門人にして宣阿の歌抄に
きこのせたり三玉挑事抄の作者也

春臺獨語　写本　二巻　太宰純

和歌道の事を論じ次に茶道俳諧及び謡浄瑠璃猿楽衣
服等の事を論じて古今の変易をいへり

輶軒小録　写本　一巻　伊藤長胤

東涯の仮名の随筆なり仮名の自序に昔揚子雲四方言語の異
同をあつめて輶軒絶代語といふ輶軒とは使の車なり皇華の使四
方へ出る時其國々の詞をあつむ依て其書に名づくなり予幼にして
先子に侍し四方の士の来て集ふ其國々の山林丘陵草木鳥獣の
奇異珍怪なる事を作すをも聞て覚書記してがせに残くはするなり

云自在王院入道先祖を抄出して書集めて輶軒小録といふとな
世子孫乃尺牘まで写したる書にて志うちに〇此書ハ其すゝめたる凡四
十四則巻首に奥州壷碑の事を記せり

河社　五巻　沙門契沖
此書ハ河社の事を始として多くの名所を並べて井に
詞の由緒を三十六人集後撰催馬楽二十一代集等の事其外様々の
事を古書を引て論せり

雑記　写本　一巻　同上
此書ハ種々の事ともを書集めて古来の書を引て考ふる事を載せて十巻
末に惺窩の事跡を載たるもの也

雑々記　写本　一巻　同上
此書ハ何くれとなく見聞せし事ともを記せしものなり

反故擾　写本　八巻　隆徳
春夏秋冬花鳥雑上下を以て巻の次第とす和漢の諸書のお
出所聞等を記し享保の頃葛園宣一房朝臣の門人中齊隆徳より
人の随筆なり隆徳著述せしところ百人一首函底記一巻ありて
とそすぐれて

一巻　中井誠之
中井甃庵みつからの序文なり序に云人乃ことばのひとつもし
火のもとよりあらはしこゝにとゞまるはけしからぬしきこともあり
するよしありてもてなしておのづから紙をおりてしるしつくべく
なりとしれおのれがおもふ事をしるしもいはん享保のころ
その事をつゞりてしるす〇略傳に云先生諱ハ誠之字ハ叔貴
称ハ忠蔵といひし甃庵と号す姓ハ中井氏播の龍野の人なり先生
幼くして大坂に遊び業を石菴三宅先生に受て植村氏が娶て
二男を生ス曰積善曰積徳宝暦八年六月十七日終享年六十有六
私に謚して貞範先生といふ〇寛政辛亥年中井積善漢
字の跋ありて同年上木す

二川随筆　写本　二巻

此書ハ京師の医師山川素石細川宗春二人乃同著なりしゆへ二川
随筆と号す素石信意と号し宗春季昵と号す○洛下の医師
青山玄黛後現の序あり○此書ハ享保七年乙巳三月にあらはせし
書中に載るところ織田信長公の時代より已来の事多なり

鹽尻　百巻　天野信景

写本

此書ハ千巻に近かりしを散逸して今わづかに今存するハ百巻なり
合巻七十冊のものなりけれバ後八十八冊のものになりぬ巻のはじめにいへるものが
よりて塩尻の名をなしけるよしをつらぬるも伊勢物語に
冨士乃山をなづらへしるして歌人のよめるさまなれバ秘に干
方海濱におどろく塩竈の煙なれバ海民塩をやく屋辺に
砂をあつめて雄頭なし畦を作す潮水をもつて砂畦をひたす
乃ちかく砂畦を寸々日々にかはかしめ山様を作りて
らすこれを志保之利といふ実に富士の形に似たり海邊の俗語にて
秘とするうちをいふれども歌客京にありて海邉の事をしらで時に
てしくまつもなくなたるもの事をやうしての秘とせしこれを作れるよし
こる○考訂塩尻の題辞に尾張藩天野信景者藤内遠景七代の末
裔下野守景隆の曾孫民部少輔藤原遠幹より十七代の孫天野孫
作信幹の男なりこ享保八年病によつて職を辞し同十五年致仕
剃髪信阿弥陀仏と号す又白華翁と称す同十八年丑九月八日卒
す行年七十二とし此叟文武を兼備しけるより経学ハ堂に升り切に
積く博聞強記古今の載籍に渉りまたこれ淵源を探りト部の家に
たよりてハ我國の神世の道をさとり釋氏の教ハ顕密の蘊を敲き
て其蘊奥を會し老ての後浄土の念仏三昧の門に入りまた
奇才の俊傑なり生涯風流洒落詩歌もつらねもせ其性質温
厚和平致仕の後ハひたすら帯剣を投じ麻衣草食日々藜杖の
あゆみをもつはら任せ身を風雲に伴ひて遊行す一生著述の奇書幾に
先千を許すしもいまだ一珠に此塩尻の一部ハ座右消閑の随筆にして
凡千巻に近しされども其書全部して世に伝らず其故ハ叟

乃ち得物を抄しむかしくりし人あそびハらかしこゝろちやうく重て
らかるれし因て三痴の怠りに原本も多く散失せり誰とてそれを數ふ
らんや就中書林指峰堂主人そのるを深く患ひて只草稿數本を
輯め闕たるを補ひ繁きを芟りて考訂し凡百巻を自撰
且弱冠の頭白革翁の丞丈下に酒を載く字を向花の朝月
の夕戯談笑傲せしを傳へすく後世その書を看ん人翁の適
筆かゝる疑なりしめん方に其筆曽とし行状を巻首に記
せんとを需むるもまた舊師の芳名不朽に傳へんとしき意志き
まかれど是を拒むりけとせず漫に禿筆を染て僅に此九牛
が一毛をとり附すも故人の作しの微意なりとの　天明二年壬寅
暮秋重陽前一夕操毫於護花関西窓下　七十二翁紀方舊書

○考訂鹽尻凡例

一此書ハ編輯せし書なりしかれど品く重りたるものあり且ち
かれこの文辞の廣略なりしく数本校合をとげされハ逸書も
すくなからず似たり幸かな僕が家ハ書をひそて抄もて卅巻とし
めれど自ら陳篇堆中に探り置しかば其草稿をもてうく
くされをこしたりて摭て百巻とす猶差謬の多からんハ後の
君子の訂補を俟のみ

一此書雅俗に亘りて其益すれしかれど騰写たびく魚
魯多かりしのみならず錯簡脱落なりあまく趣意のよう
ちりくさとのまゝにされしのたぐひ古書に憑據なくあるの
ハつくしく此書にて衍闕を訂すといへども又なきざるのハ
やむことを得ずしく舊文を存す

一此書巻としれつりて甚だおほく定むるありしかど所々に干
支を記しをされたりなれぞ多く便となり古暦に考へあはせぬ
ハで一二を係せきるもすくやれしは雕干支のことをも
年号を附しく又やすくされたりとす

一此書りしより草稿のときハいつものなれど書毎に目次ある

こゝかしこ今考訂しなきすることく目次にしるしおきぬ冊出を除く
ことなりくさゝるわけなれとも便利ならバ以てしとのく巻首に目
録を附す

一此書かく考訂をなしぬることなれバ又冊写せバ誤も生ぜんも必然なり
是ハ梓に上さまく欲することなり なるべくバ其まゝくして世に
ひろまりきはしくやはた後写せん人唯よく校合あらしめたまへと
ひとへにねがふのみ　天明二壬寅歳秋八月　張州呉府書林西村常
榮誌ス

南嶺子　四巻　多田義俊

義俊後に桂秋齋と号す南嶺ハ其別号なり此書神道のこと
國学のことり其餘種〻の事を書しるしたるなり○寛延己巳九月
人中山海龍序　陶山尚善序　良芸之伯耕の序あり同年上木

南嶺遺稿　四巻　同上

書體上に同し宝暦丁丑年九月良芸之の序あり同年上木

秋齋閑語　四巻　同上

これも同じ体裁なり宝暦癸酉年七月華洲北貞卿の序あり
同年上木す

ちぐや草　写本　一巻　同上

これも同じたぐひの随筆なりくさしのよちぐやハ茅草なれど今
俗にはちがやと書きつぐなり八ちぐさの轉じたりけりといふを
ふまへられたるなり以てかくなづけられたり諸くの故實雑談装束のこと
和書のことり享禄二年熱田社参詣の女乃圖なし給ふなり○奥書
ニ右一巻延享乙卯の五月尾張へ帰る人何ぞものにしるしくれさせよと
ありければ今ハ引用ゆべきかぎりなけれど少しる録するものゝ方が
一きはしく写のそれむけしハなしぬ　桂左衛門源武起○従四
位上行中務権大輔藤原光香跋あり

ぬなハ草紙　写本　三巻　同上

これも随筆ふくるしじそれに蓴菜のことなどあればいぬなハ草紙

かゝく
上巻　近世神道家のうちにも称挙ある出口延佳　垂加翁の事　名法
要集のことを評論せり
中巻　玉木翁　増穂大和　白井宗因　吉川惟足等の事　其外近代
故実者の事　鳴弦相伝の事をかたく評論せり
下巻　橘家神軍流の事　春臺弁道書の事　職原の事　壺井翁
と不和の事　舊事紀の事　大成経神道の事をかたく評論せり
○按するに此書の中すこしうたがはしき事実既に南嶺遺稿にもしるしおけるもの
あるにしたがひ○巻末に尾張名古屋にて疱瘡をいのりしことなと
ものさし入序あるなく寛保三年六月多田兵部義寛とあり

宮川日記　写本　二巻　同上

此書ハ延享三年二月六日より三月十二日まで伊勢に逗留の間の
ことをしるせり　両宮の故実　神庫秘書の事　倭姫世記等不審の事
きり火の錐の図　浄衣のきれの図　猪鹿をいむ論かたしあさ○此の
に燧袋の図　しめの柏の図あり○延享丙寅年三月多田左衛門源満
泰識しるす

遊和草　写本　二巻　同上

享保十九年の秋大和郡山にいたりし旅泊にしるしおける
名づけし書なり今世仏教宋儒の説を混じて神道を曲説する
ものゝ臆見の事を歎じ　又舊事紀の事　十種神宝の事　神書
正偽の事　かつまたかしはでの事　ことはりの事　肉食の事をかたく評論
じたり序も多田源義僑とあり○此書によりて神別記にも
引證す

続遊和草　写本　二巻　同上

享保十九年寧楽に遊びし或人に書く贈りしよしいへり○序は
垂加翁の事　荒魂和魂の事　いこの事　やまとたけるのことの事
勅方神明九等の事あり自跋あり

蜻蛉乃道草　五巻　・丹羽桃九

此書ハ多田義俊の口授せし門人東武の丹羽桃丸が作せしなり 日本紀私記の事 舊事紀の事 類聚國史の事 故実百箇條の事 薬方の事 いろは聲母傳の説 其餘種々の事を記し わし〻桃丸がいはしの俳諧の發句文章等をもまじへたり

春湊浪話 写本 三巻 土肥経平

此書種々のことを記しくさ〴〵のことの考證を附したり中にも徒然草の作者兼好が代をしめ除なりし時ハ左兵衛佐にてありし又保の時には醍醐天皇の御ご協にて二条中万里小路の御わたりに住ませし時は御わたり事の御後見をも仕へなりしが其時の春宮大夫ハ按河大納言師信にてありしが代御わ御曹子として仕へけるをもえて姫君に君るんなに仕へて仕へまつりけるが成めるはまぞんなに変せらへて君とくけまゐて巻付帝のとしの御ありしせなりしねし八先帝として當代よりもまゐて南朝へ奉公ありしとの事なれど参詣せし園大暦と吉野へ御加持まゐりしるかゞもみえしかれしそ兼好がんなが推量らむきに其まま帝の吉野の遷へ御ありしせなしひより間もなく都とさけて伊賀國まりて御ようとまで身まかりしも南朝へんなよりてれくまかりけるかなりまさ御かりひしゆへなりしや又さる御遺入の艶書なり兼好草するなり論しさくる塩冶判官が妻入りしへ師直よりの艶書を兼好書かしよし太平記にみへしと本朝遯史扶桑隠逸傳よ兼好一生の過錯なりとらし不拘そかるれども論じ玉ふもられハ讀耕子も保まの元政も兼好のんなが深く察せずるや今按ずるに兼好の南朝へんなによせしりあれりとかりし師直がかる初発の事きとりし足利家の内其あ見ゆさまえとかりし内んなよるらしくの師直が私みしかなす是もの旧挑しかまるにげもの師直が所行うる不実るありしよりる起足足利氏方へまゐるにまでく仕よの師直又其外高の氏族皆殺されけるえそ増りつゞ兼好が析く伊賀よりかまのほり内間せしもなりしなりしもれけんちも

うかれありきせしか其世の内間に更て察するものなく一生志
かく飢餓え元二月十八日に伊賀の国丸山のふもと奈保村の庵に
寂す今に至て四百三十年に近しといへども其好のものゝ名を察す
るものなし遠き世の今に至るまで伝はらずといへどもえやかれたるを
ぶんとて○此書を伝ずるものゝ僅にのたまひ今に一二にとゞまる
挙のし○巻首よりかの自序をみるに代末にて安永四のとし如月中
の十日吉備のふもとちゝのよ宇治郷の散人土肥経平誌

撈海一得　二巻　鈴木煥卿

上巻　五十九條　人名は吉山より都へ平丈我に至る
下巻　六十三條　永楽銭よりはじめ唐詩句解に至る
○明和四年の漢文の自序にて瀛莫に島ゆて漫画と名づく終日水上
に奔走し小魚を撈捕して其を食とし猶飽ずして又島に
至信天翁と名づく水上にまで默々し漣に動ず嵌突前に至れ
八国くして之れをかうまさしも餓死す○余性弈琴棋書画
百技藝に於ても能するところなし只飲啄を解せず困く人に欵曲せず
越俯仰し巴にたくしもの語るべきこのなし唯書を讀てなぐさめとす
ふれしものかと章句を求ず終日沈吟して唯多くを貪るいとゆ
へに漫画の如くなりたりしく佃にて藝海の撈得するところ何
ぞ飽しらんや當に信天翁のあたへ嘔りて一常に一冊にはし几案の
間に實して得たるにしたがひて其をたちまち録す以て遺志に備ふこと十年
其の事致仕して家居のなし念飴弄孫徒に日月を消すすれば
麓中の書を取て捐しに整頓して十数巻をなしまぢ置
に吾志を備ふのみにしずなかるところは児孫に傳へんと困て國字
を以てこれを録しこれを名づけて撈海一得といふ○明和辛卯年七月
松窓醉翁　漢字の序にて○按ずるに天野信景謁叢巻之五に云
漫画　鷺に似て終日食を求めて貪るゆゑなし　信天翁　海辺の
ものにして丹なくあざやかに長身にて沖の沈に住み筑紫にて
らいふ白くして鷗に似て首より尾に至る食を食としてあるし　二

行餘隨筆　二巻　板屋壹助

烏貪廉なることし潜確類書群談採餘瑯琊代酔等よりとりて
和漢の正史野史の中より考へ出しぬる事のいとも多く記し
あつめたるものにて安永五年八月の序ありて名は鸚鵡坊画龍と
いへり若狭の人なり

寒〻話　写本　一巻　草賀親賢

草賀輿に斬られの徒然なるまゝ冬夜客と談ずることどもを記しおきたる
を寒話とはなづく

久保之取蛇尾　一巻　入江昌喜

此書俗諺の出所を古書より考へて記したり其餘和歌の詞日本紀
のうちの語の考などをもくはへたり昌喜幽遠窟といへりと
号す天明四年上木す

國學忘貝　三巻四本　森長見

皇国のまなび諸書を抄してしるせし徒然なるまゝ天明七年八月
讃岐森助左衛門長見かの自序に谷景信漢字の跋あり

玉勝間　初編　三巻　本居宣長

書體全く随筆にして古書のうちより引出し記録の考へなど
いふもの皇国のいにしへを引ていにしへのさまを記しおくべし
きり○此書巻々のはしめに歌をよみていかなるを以て名付
られたり巻ごとの名はかく

巻之一　初若菜　巻之二　櫻の落葉　巻之三　たちばな

玉かつま　二編　三巻　同上

巻之四　わすれ草　巻之五　枯野の薄　巻之六　しゝあり

玉かつま　三編　三巻　同上

巻之七　ふぢなみ　巻之八　萩の下葉　巻之九　花の雪

○此書十巻已下四編五編嗣出しえしかりし已上三編九巻寛政十年
まてに刊行す

桂林漫録　二巻　中良

東都中良甕臣父著しるされたのはじまなり
巻之上 石敢當 金澤文庫 扶桑木 韓人詠歌 清人詠歌
○琉人詠歌 倭繪師 頼朝卿殘墨 鐵塔婆 蔦澤碑 五輩
和尚 節用集 新撰字鏡 平他字類抄 萬多親王 淺草寺
繪馬 古印等の事
巻之下 古甲冑 風偶人 古刀 八徳 古鈴 東鏡跋 足利学
校 丑一法眼の事其餘漢土のことも古物の図等数のせたり
○寛政年中源忠道漢字の序同年法眼甫周序 因是道人葛
質 氷齋錢等の跋あり寛政十二年六月刻

閑田耕筆 四巻 伴蒿蹊

蒿蹊ハいしく住める所の号を以て閑田廬と号す此書の巻首に如杜
多か詩を載其詩に云 老来幾部著書成 祇道屏居遂懶情 最
是紙田甫不得 長遺筆耒四時耕 此ニ卜居間田廬之初林泉院
六如尊者見寄之作 真知予平生者也及著此書遂取之以名焉故掲之

巻首に蒿蹊識
巻一 天地部 巻二 人部 巻三 物部
巻四 事部
○自序にいはくしごろ人のかたりあへるかたくしきとひもかはすことの
くさぐさ又古のしけれがしき書つけたる抄あつめたる抄出れ
んも惜むべし書つめて見せしとそのすくしのいつよりか書給さると
かしいつきとはなくもそしりくるのハ五雑組のつゞりかしひくしく人
のしく人のものきしくちくりの及古の中よりえらみてまちゐみすぐし
のしそくおきものの日記ひかれくわりひるをこともいつくそこのと
さすことのしく人のかめくかりしハまえ、ここる者しめ○寛政のよ
年春月男伴資規しるの後にかく

雑書類

江談　写本　三巻

大江家の人々の詩文のうわさ論ぜし談話なりけるを江談と号す
漢字にてかきたり○按ずるに安倍の仲麿漢土にて卒して鬼形となり
それを吉備大臣にあひしことハ俗説につたへしるしたるをのせ
のせたり○巻之三に云仲麿詠歌霊亀二年為遣唐使之時也仲
麿渡唐後不帰於漢家楼上餓死吉備大臣後渡唐之時見鬼形
与吉備大臣言談相教唐土事件仲麿ハ不帰朝人也

古事談　写本　六巻

第一　王道　后宮　第二　臣節　第三　僧行
第四　勇士　第五　神社　仏寺　第六　亭宅　諸道
かくれたる部をわかちてしるしたる物なりしもの事を真字にて
あらせる第一巻のはじめに孝謙天皇道鏡を寵し玉ふことをあらはし

すきものは業平が二条后を盗めり 御堂殿遊女小観音が許へ
ゆき 済時が為にとりこめらるゝをとしけり 小野小町が末は遊女香炉を竃
せしこと 清少納言零落のね駿馬の骨を買ずやといひし
こと 実方奥州にて命をはりしこと 行基菩薩の歌のこと 恵信僧
都金峯山にて巫女に歌をうたはせしこと 道命阿闍梨和泉式部に
通ずること 将門逆乱のこと 鳥羽法皇行幸のこと 其餘数百箇
條のするかのせたり ○御室書目に兼顕卿抄とあり

續古事談 写本 三巻

第一 王道 后宮 第二 臣節 第三 雑事

書體上に同じ

古今著聞集 二十巻 橘成季

此書撰述の趣意は詩歌管絃の道にはけしくすぐれたるを
しるさむとて宇治大納言の物がたりに遺風江家の談の
餘波をもとて序にも奥書にもみえたり

巻一 神祇 巻二 釋教 巻三 政道 忠臣 公事
巻四 文学 巻五 和歌 巻六 管絃 舞
巻七 能書 術道 巻八 孝行恩愛好色 巻九 武勇 弓矢
巻十 馬藝 相撲 強力 巻十一 畫圖 蹴鞠 巻十二 博奕 偸盗
巻十三 祝言 哀傷 巻十四 遊覧 巻十五 宿執 闘争
巻十六 興言 利口 巻十七 怪異 変化 巻十八 飲食
巻十九 草木 巻二十 魚虫 禽獣

建長六年應鐘中旬散木士橘南袁漢字の自序あり 同年十月十六日竟
宴ありしがいずれも詩歌管絃の興あり催す 同十七日宴後朝右筆記之 曆應
二年十月十八日満六十之老筆終二十帖之写功畢云々 老葉門在判
○元禄三年上木す

新著聞集 十八巻 六本

近代見聞の心にしきことゞもを地名人名をあらはしてしるし勧戒と
なすべきこと九冬あり ○寛延二年三月刻

第一 忠孝篇　第二 慈愛篇　第三 酬恩篇
第四 報仇篇　第五 崇行篇　第六 勝蹟篇
第七 勇烈篇　第八 侫奸篇　第九 主厲篇
第十 奇操篇　第十一 執心篇　第十二 寃魂篇
第十三 徃生篇　第十四 殃禍篇　第十五 才智篇
第十六 清直篇　第十七 俗談篇　第十八 雜事篇

壒嚢鈔　七巻十五本　行誉

僧俗の故事和漢の事実五百三十六箇條國字を以てしるす○壒ハ塵よ音愛塵也とあり○奥書ニ云時文安二年五月觀勝寺金剛佛子行誉

塵添壒嚢鈔　二十巻十五本

序ニ云世ニ壒嚢鈔七巻あり是觀勝寺行誉師の撰する所なり又塵袋十巻といふ作者しれずなりしが言辭の本説を集解節用の古事を摭撮すさ今予同類の塵を拾ひすて〻残れるものゝ塵のうちよりわく二百一箇の至要の塵を簡ひ取り以て壒嚢五百三十六箇の中に添加す都て七百三十七箇となすなれバ二十巻とし〻ぬ天文元壬辰年二月釋氏某比丘○此書世俗のことゞもの出所五節句等の俗向のうたの起りを考へしるせり

世諺問答　三巻　一條兼良公

本朝節序の故事どもを書あらはし後成恩寺殿の作として其の孫兼冬公の遺筆といへり○兼冬公の跋あり云諷誦の史記及び班固がかきけむ紫式部が源氏を借りて大貳三位が宇治十帖かきそへたりしたくひのものにもよそへつ〻此跋扶桑拾葉集に見えたり

齊東俗談　七巻

此書ハ俗間通用の言詞を門を分けてほゞ注釋せり○弘文院林氏の門人松浦某の著すところなりといへり

本朝俚諺　十巻　井澤長秀

俗間のことわざなどを俗間にいひ傳へたるものどもをあつめ諸

書なりしかれども其数千五百七十箇條にいたれり或ハ
九字なるのも此書にみえしとそ

諺草　七巻　貝原好古

好古自序にいはく文字なるにより其下に諺の出所を出し
もしは俗語なるもしは字のやすきにかなつけのすゑぞ
鄙しき俗語もあらはすつるにまた吾國の詞にも文佛ちるも
ものもあしこれらは前輩の伝ふる説をも捨ひようふて考へ
わかちなきつくる前なれつつあへるせずをのしろいは伝つ
りそ○門人遯齋上野惠廻の跋に元禄庚申七月とありせう

日本歳時記　五巻　同上

此書ハ正月より十二月まで毎月の故實雑事を漢土の書にもとづ
このいは我邦の文字にやさしげに邦のなにもいひかへてくわしく
その月々の條下にのせたり時に應じて食物酒漿の製造の法養
生の法とをもあらせり巻末の附録に都鄙祭事記あり○此書好古
の編録を篤信の刪補せしものなり貞享丁卯年九月篤信
の序あり同年三月刊行す

和事始　六巻　同上

漢事始　六巻

天地　人倫　歳時　居所　衣服　官位　器用　寶貨
飲食　人事　文教　武備　神事　禮樂　典制　伎術
動植　佛家　かくのごとく類をわかち和漢事物の由て起るところ
を和漢の書に考へてあらはせりそのいは書の名を附す
大和事始の附録ハ國朝年號譜なり大化より元禄まで年號の
字をのせ出所の考證をあらはす○元禄十年四月松下見林序　同
丙子冬篤信序　同年好古の自跋あり

廣益俗説辨　五十一巻　井澤長秀

前編　二十一巻　後編　五巻　遺編　五巻
附編　七巻　殘編　八巻
贅辨　二巻
贅辨續編　三巻

篇次ハ天子 皇子后妃 公卿 士庶 婦女 僧道 近世
雜類等なりこれハ居所 地理 人物 官職 藝術
文籍 器用 音樂 畫圖 歳時 佛家 草木 畜獸
魚虫等まで篇をわかつ○此書すべて世俗よりやうやう作りて
ところの俗説を挙とりて和漢の書をひいて其あやまりを弁ぜり
○正徳五年五月自序 同乙未八月竹堂熊谷維序あり○長秀
名ハ節 幡龍子と号し又亨齋と号す肥後隈本の人なり

新俗説辨　五巻　同上

此書ハ世におこなはるゝ宝永庚寅の自序ある今廣益俗説辨の
中にことごとく此説を収む

臆、説辨　字本　二巻　小山儀

俗諺を和漢の書に考へあはして臆説を以てその義を釈せり
引ところの書は明清の作者をおほく挙たり小山儀吾浪華の人
なり著すところ竹取物語抄世に行はる

和漢三才圖會　百五巻　八十一本　寺島良安

顧愚謙が三才圖會になぞらへて和漢庶物の圖をあらはし俗間のた
よりとなるべきことどもをのせてしるし
第一巻より第六巻まで天部 時候暦占の類此部に収む
第七巻より第五十四巻まで人部 器財禽獸魚蟲の類此部に
小兼ねさしむ
第五十五巻より第百五巻まで地部 居宅草木造釀類此部に
兼収む
巻外一冊の小目録は附すいろはの文字を以てその部類をわかち
一覧して捜索しやすからしむ○正徳三年三月朝散大夫大學頭
藤原信篤序 同癸巳孟夏前大醫令和氣伯雄甫序ならびに良安
の自序あり巻末に正徳癸巳陽月正三位大藏卿清原宣通の
跋ありて

大東世語　五巻　服部元喬

皇國の諸書よりとりて故事名言どもを漢文に譯して其體を
劉義慶が世説に擬して作れり
巻之一　徳行　言語　政事　巻之二　文學　方正　雅量　識鑒
巻之三　賞譽　品藻　規箴　捷悟　夙惠　豪爽　容止
巻之四　企羨　傷逝　棲逸　賢媛　術解　巧藝　寵禮　任誕
巻之五　簡傲　排調　輕詆　假譎　黜免　忿狷　尤悔　紕漏
仇隙
寛延改元十月鵜孟序、南郭自序あり　同三年正月上木す

皇朝事苑　四巻　竺常

此書皇朝の事實を古書に考へ漢字のまゝに類を分ちて
あつめたり○凡例に云舎人親王の筆字ハ義をとりしかれば句ハ付ざ
りしかども すべて言は載事を叙する運暢観るごとしまゝ○日本紀續日
本紀日本後紀蕐西事紀文粋等の文ハまゝく收む又宋史日本
傳唐書日本傳揚文公談苑玉烟堂戯鴻堂法帖などより〜

巻一　聖徳　政令　官職　儀服　時事　宴會
巻二　地理　神祇　佛法　人物　女流
巻三　孝義　學術　典籍　詞藻　書画　工技　音樂　金玉　器用
巻四　草木　穀物　鳥獸　蟲魚　貢獻　祥瑞　壽算　衣食
○天明丙午臘月正二位菅原胤長序　同乙巳八月淡海竺常自序　同
七年正月上木す

善隣國寶記　三巻　鳳渓和尚

此書ハ皇國と漢土及び朝鮮と往復の書簡をあつめ記して和
漢通信の由来をもしるせり
上巻　はじめに神代のことよりおこれり北畠親房の神皇正統記
のすゝめに漢字に譯せしものし次に垂仁天皇八十八年にはじめ
て漢土と通ずることしるして代々通信のことをのす　此巻の末
より漢土ならびに朝鮮と往復の書簡をのす五山の僧の代作の
文ハことごとくのせたり

中巻は上巻に未しるさゞる漢土朝鮮往復の書簡をのす
下巻は彼往復の書簡の別幅にのせし饋遺の品物を記す
○文正丙戌八月十日泉南臥雲山人周鳳瑞渓自序　丁卯春西山塞馬
閑人跋あり此跋の印文中慶とあり○此書の撰者相國寺鳳渓
和尚諱は周鳳と云日野准大臣兼宣の子にて無求和尚乃弟子
なり無求諱は周伸夢窓國師の弟子也瑞渓一切経七千餘巻
の抄出七巻あり又諸書の抄出二百巻あり明教大師と号す
此書天龍寺慈済院虎林より板行す跋は虎林也

異称日本伝　十五巻　松下見林

異邦の書に本邦の事を載るところのものすくなからずといへども中に伝写
のあやまり多くして是非混淆するを以て松下西峰ひろく漢土
朝鮮の諸書の本邦の事をのするものをあげ本邦の書をもて考
へあきらかにこれを正せり○此書はじめ上中下三巻なりて上巻は三
巻よりなり中巻は八巻下巻は四巻よりなりて上巻には漢魏晋宋斉
梁隋唐五季宋元　中巻には明　下巻には斯盧の書をのせたり

巻上之一
山海経巻十二海内北経　南倭北倭燕に属すといへり
史記巻之六秦始皇本紀　徐芾海に入て神薬を求むる
同書巻之一百十八淮南王伝　徐福のこと
後漢書一百十五東夷列伝　邪馬臺國のこと
論衡巻之八儒増篇　倭人鬯艸を貢すること
同書巻之十九恢國篇　同巻之五異虚篇
同書巻之十三超奇篇　暢草倭より献ずといへり
魏志巻三十倭人伝　伊都國　邪馬臺國　斯馬國　為吾國　鬼
奴國　巴利國など見えたり
呉志巻之二　秦始皇帝方士徐福をして童男童女数千人
を将て海に入て蓬萊神山及び仙薬を求めしむといへり
晋書巻九十七四夷列伝　倭人みづから太伯の後といへり

續博物志巻之五　倭辰といふ　西峰の今案に倭ハ日本辰ハ辰韓にて
辰韓ハすなはち新羅なりといへり
宋書巻九十七列傳蠻夷　倭國ハ高驪東南大海中に在といへり
南齊書巻五十八列傳東南夷　倭王武としるす　西峰の今按に清寧
天皇の諱白髪武廣國押稚日本根子といふ故に略して倭王
武といへるなり
南史巻七十九列傳　倭　後漢書魏志宋書と同じ
北史巻九十四列傳　倭國　一支國　伊都國などあり又倭王姓ハ阿
毎字ハ多利思比孤阿輩雞彌と号すといへり
梁書巻五十四列傳四十八東夷　倭ハみづから太伯の後といへり
文選巻第十四　魏鮑明遠が舞鶴賦に日域を窮て以て廻に鶩す
述異記巻上　日本國に金桃あり其實重さ一斤といへり
大廣益會玉篇巻之三　倭ハ烏禾切國名といへり
隋書巻八十一列傳東夷　西峰按ずるに隋書の説多く前史によれり

唐書巻二百二十東夷列傳　仲満姓名を易く朝衡といへり
同書巻二百二文藝列傳　蕭穎士字茂挺といふ倭國使を遣して入
朝す自陳す國人願くハ蕭夫子を得て師とせんと中書舍人張漸ホ
諫て不可而止といへり

巻上之二

舊唐書列傳巻一百四十九上　日本國ハ倭國の別種なりといふ仲満中國
の風を慕ふといふ　留學生橘免勢学問僧空海といふ
同書本紀巻四　倭國琥珀碼碯を献ず
同書列傳巻一百四十下　蕭穎士の事
唐丞相曲江張先生文集巻之七　日本王に勅する書の事
通典巻一百八十五　倭後漢より通ずといへり
同書巻一百八十六　流求といふ倭國の使来朝しこれを見て曰
此夷邪久國の人の用ゆる所なりといへり
周禮註疏巻二十五　大祝辨九𢷋といふ四に振動といふ　釋文に今倭人

拜するに兩手を以て相撃す　西蕃の按に俀當に倭に作る下倭兩
手を以て拍手とし　かしこまる
唐詩鼓吹巻一　劉禹錫日本僧智藏に贈る詩あり
同書巻五　皮日休圓載上人の日本國へ帰るを送る詩あり
酉陽雜俎前集巻之三　倭國の僧金剛三昧といふ
李太白詩巻十六　身に著る日本裘の句あり　楊斉賢が註に裘は則
朝卿が贈るところの日本布これが為とすといへり
同書巻二十五　晁卿衡を哭する詩あり　日本晁卿辞帝都といふ
杜子美詩分類集註巻六　集註に云日本國麒麟錦を献ず人の眼
目を眩すといふ
白氏長慶集　後序　日本暹羅諸國及両京人家に傳写する者といふ
法苑珠林巻五十一　倭國は此洲外大海中に在といふ
禪月集巻十二　僧の日本に帰るを送る詩あり
義楚六帖巻二十一　本國都城の南五百餘里に金峰山あり頂上に金剛

藏王菩薩ありといふ　又東北千餘里に山あり富士と名づけ亦蓬萊
と名づくといふ　徐福此に止り蓬萊といひ今に至て子孫皆秦氏といふ
宋史巻四百九十一列傳　雍熙元年日本國の僧奝然其徒五六人と
海に浮て至るといへり
文献通考巻一百四十八　日本唐より以来毎貢使を遣す三月三日桃
花曲水宴八月十五日放生會あり百戲を呈すといふ
同書巻三百四十二四裔考　倭即日本といへり
雲笈七籤巻一百　軒轅本紀に云騰黄神獣あり日本國に出づ
巻上之三
太平御覽巻七百八十二　日本國　外國記に曰周詳海に泛で綜嶼に落
上に紵多し三千餘家あり是徐福童男の後と風俗呉人に似たり
太平廣記巻七十五　韓志和は倭國の人なり
同書巻二百二十七　又韓志和のことを載
同書巻二百二十八　大中に日本國王子来朝す王子圍碁を善す

同書巻四百八十一　新羅国東南日本と鄰すると
文苑英華巻二百十九　銭起僧の日本に帰るを送る詩あり
同書二百二十三巻より二百三十二巻に至るまで日本人に贈る詩并に
日本國王に勅する書等数十首を載
皇朝類苑巻四十三巻五十九　日本僧の事を載
同書巻六十　日本扇の事　巻六十三　日本國稱貢の事
同書巻七十八　天台智者教五百餘巻を日本に求る事
歐陽文忠公全集巻十五　日本刀歌あり
玉海巻一百八　大中七年四月日本王子を遣しく来朝せしめ宝
器音樂を献ずる事ありけり
同書巻一百五十四　奝然の事　元豊元年日本僧仲廻方物を貢
する事ありけり
書言故事大全巻之四　日本王子善棋を圍とありけり
米元章書史　陳賢草書奇逸として辨じがたし日本書の如しと

中華古今注巻中　墮馬髻　倭の墮髻といへり
鼠璞　倭といへるは日出處の天子といひしより
菊譜　新羅一名玉梅一名倭菊と
鶴林玉露巻十六　日本國の僧安覺の事
大宋僧史略巻下　倭國剡僧に傳法して師の号を賜ることあり
歴朝釋氏資鑑巻五　其國書に日出處の天子といふと
教行録巻四　日本國師の二十七問に答并序と
同書巻六　四明尊者僧を日本國に遣しく仁王経疏を求る事
釋門正統巻一　教行録に記して仁王経疏の事を詳にあり
同書巻二　日本國師源信二十七問の事　巻三　密教と空海の事
同書巻七　宗印字元實と嗣法俊芿先に密教を日本に傳ふと
西峯の按に俊芿は泉涌寺の僧元亨釋書にくはしと
宋高僧傳巻十四　唐揚州大雲寺鑒真傳　西峯の按に元亨釋書
小鑑真の傳あり　巻二十九　沙門最澄の事　巻三十　日本國僧圓

載のす
景徳傳燈録巻二十　覚阿上人ハ日本國滕氏子也とあり
佛祖統記　巻十より巻五十一にいたるまでの間日本僧のことをのする
十四巻にあり
元史巻二百八　至元十八年十萬人を率て日本を征す云々十萬の衆
還ことを得るもの三人耳云々
同書巻六より巻二百八に至るまでの間日本のことを載るもの二十五巻
居家必用事類巻十　水晶倭國のもの上品云々
新芳薩天錫雑詩妙選稿全集　天満宮の詩あり
書史會要巻之八　日本國云々國中多く王右軍の書をならふ云々今
其字母を以てこれに附するもの云々此ほかいろは四十七字をあげり　同
巻に　釋永仁字ハ斗南日本の人云々　釋中巽字ハ權中日本人云々
圖繪寶鑑巻五　日本國云々畫あり姓名を志るさず其國の風物山
水を傳寫す云々然珠方異域にして能意を繪事に留むる亦尚ふべき也

瀛奎律髓巻三十八　日本人に贈る詩六首あり云々
韻府群玉巻二　日本國に凝露臺あり云々
事文類聚前集巻四十二　日本國王子奕を善すること
巻中之一
皇明資治通紀巻二　洪武二年倭寇のこと
同書巻三　洪武四年八月日本國王良懐使を遣して朝貢す云々
西峯の今案に太宰都督良懐親王也　巻五巻八日本入貢　巻十一倭寇のこと
明政統宗巻二より以下三四六の巻倭寇のこと　巻七入貢のこと　八十一
二十五二十六七八の巻皆倭寇のこと
皇明寶紀巻三　巻九　巻十七　共に倭寇のことを載
同書巻二十　壬辰萬暦二十年四月日本酋平秀吉朝鮮を破る云々
巨酋行長清正義智云々萬暦二十一年云々沈惟敬釜山より帰て倭
酋小西飛彈守と同じく来て欵を請云々
同書巻二十一　中路副将石曼子泗川に拠る云々

同書巻二十二　萬暦三十七年十一月倭并琉球其王を虜すといふ
同書巻二十五　天啓四年七月紅夷廈門中左に擾す近すこし日本倭人
と勾引すといふ
巻中之二
両朝平攘録巻四　倭刀の事　清盛　頼朝　信長　阿奇支等の事
巻中之三
高皇帝御製文集巻二　日本國王に諭す詔　巻十六　設禮部日本國
王に問ふの文ともに載　西峯といふ日本國王とは良懐親王の
事征夷大将軍とは源義満なり　巻十九　倭扇行の詩あり
宋景濂蘿山集巻四　賦日東曲十首あり
大明一統志巻八十九　日本國沿革風俗山川土産の事
大明會典巻一百二十二　安南日本等の國の使臣驛傳の事
同書巻一百六十　備倭船の事　巻一百七十二三の両巻とも日本の事をいふ
紀効新書巻八　巻十八ともに倭寇の事をのす

續説郛弓十　日本寄語　定州薛俊著
唐詩訓解　秘書晁監か日本に還るを贈る詩あり
月令廣義巻之一　日本教譯　年紀を一故都といひ一を去多好といふ
同書巻二　冷暖茶子の事　巻六　日本國人藤木吉の事
同書巻二十二　日本國阿穢山石火起て天に接すといへり
劉氏鴻書巻之一　海防倭寇の事　巻八　日本の學徐福に始るといへり
日本諸蕃有く甘草芎藭なりとあり　巻六十九　倭國求通表文あり
萬姓統譜巻一百四十　諸方復姓　朝臣日本國使人　巻二十五　本朝潘
賜再日本に使すといふ
氏族博攷巻之七　氏目　諸方復姓　朝臣
瑯琊代醉編巻之九　尚書全文日本國に尚これありといへり
三才圖會地理九巻　補陀落山といふ往時高麗日本新羅諸國皆此
に由て路を取く以て風信を候ふといふ　地理十三巻　日本國圖説
人物十三巻　日本國　珍宝二巻　錢圖外國品　和銅錢　神功錢

〻〻倭國銭 文日延喜之至下
五燈會元續略巻之二上 道成禅師傳 使於日本國に奉ずと云
同書巻之三下 夢窓國師のこと
釋鑑稽古略續集二 日本禅師諱ハ印原字ハ古先相州藤氏と云
同書二 太初禅師日本國の人と云
夢觀集巻之一 勤無逸が日本に使するを送る詩 白河関高玉縄下
天上霊梅移北野の句あり
適情録 日本の僧虚中来朝のこと
玉煙堂唐法書 日本 日本皇子書二枚 西峯云此は皇子としれ上
是の八兼明親王なりと云
医学綱目巻之十九 日本ノ三藏方霽方
文房器具箋 潘鐵切りしく浙人より學せしかし倭に入性最
巧滑倭の使を習ふ彼より得ること十年と云
本草綱目巻之八 倭國水精多し 十一巻 倭硫黄赤色なり

同書巻之三十七 琥珀 高麗倭國に出るもの色深紅と云
五雜組巻之四五七十十二十五已上六巻をのし日本のことを載
潜確居類書巻十三 日本の譯語を載 巻九十三 日本麒麟錦
を貢すること
巻中之四
閩書巻之三より巻之百四十六巻に至るまでの間往々日本のことを記
すなるべくハ防倭のことし
巻中之五
圖書編巻五十 日本國圖 海寇圖説 日本國考あり 巻五十七 日
本島夷入寇の圖をのす
巻中之六
武備志巻八十六 影流の目録をのす辛酉の陣上に戚南塘その習法
を得ることしるせり 巻八十七 鎗飽のことあり 巻二百二十三 日本
の圖あり 巻二百三十 日本考 巻二百三十一 備前刀のことあり刀

上に龍を鑿りし八八幡大菩薩春日大明神天照皇大神宮を鑿こ
しものす　巻二百四十六　巻二百三十九等に海外諸國朝鮮考あ

巻中之七

續文章正宗巻五　論倭の文あり
續資治通鑑綱目巻二十三　元の世祖日本を撃つ　巻二十四　大徳三年
二月僧一山を遣て日本に使せしむ云く
大學衍義補巻一百五十五　馭夷狄　日本東海の中にありと云く
同書巻一百五十六　至元十八年日本を撃つ兵十餘萬海島に死す還る
者僅に三十人　西峯云還ることの僅に三十人の十字衍元史に曰十萬の
衆還ることを得るもの三人のみなれども之人の名を挙て曰千閭曰
莫青曰呉萬五なりと云く
聽雨紀談　日本國に真本の尚書ありとす
五倫書巻二十一　元の世祖日本を伐んと欲するとす　巻四十二　國
朝の遣使を奉して日本に往と云く

不求人全編巻十三　日本國人物の図あり
皇明世法録巻七十六七十九八十　日本のこと海防のこととのす
普陀山志巻二　日本僧恵鍔のこと　巻四　昌國志に東控二韓日本
遵生八箋巻八　袖爐云々倭人製するところのもの　漏空罩蓋
同書巻十六　文匯具　倭式鉛を以て口を鈴するもの甚佳なり
事林廣記續集巻三　倭韓栗のこと
唐詩帰巻九　王維送秘書晁監詩　巻二十四　沈頌金文學が日
東に還るを送る詩あり
明詩選巻上　董良史が詩　過橋雲石磐天台寺泊岸風帆日本船
唐類函巻一百十六　倭後漢より通ずるとす
博物典彙巻二十　四夷　日本
音韻字海巻之首　夷字音釋いろは
大明一統賦巻之上　日本國即古之倭奴云々
儷語編類巻之七　日本の僧の帰るを送る韋荘が詩あり

弇州稿選巻之五　日本國松皮紙を出すこと

巻中之八

蒼霞草　日本考なり

國朝献徴録巻十より巻一百二十に至るまでの間四十三巻倭寇のことはづれ／＼に墓誌行状等に記せり　巻一百二十巻に日本志あり

登壇必究第六より第三十九までの間六巻倭寇のこと所々に記す

同書第二十三巻　日本國図と日本愛宕山霊感地蔵王の文あり

巻下之一二　以下朝鮮撰述の書なり

東國通鑑　新羅始祖八年 漢甘露四年 倭来て辺に寇すること

同書巻之二三　倭寇のこと　巻之四 晋建元二年 春二月倭使来て新羅に遣しく婚を請ふ報せずとなく　巻之七八九 新羅紀 文武王十年唐咸亨元年八月倭國号を日本と更む自言日出る所に近しと以て名とすとし　巻十より巻五十六までの間二十七巻往々日本と往復のこと倭寇のことを所々に記せり

巻下之三

三國史記巻一より巻四十五までの間十六巻倭寇のことをのす

三韓詩亀鑑巻之下　密直郭預が感渡海七言古詩をのす詩中至元に蒙古日本を侵せしとき高麗これに与し壹岐を攻めてしく海を没しけるを所につれり　一岐 日本島名としけるを

慕齋詩集巻之一二三　日本の僧と贈答の詩多し

慕齋文集巻之三　答対馬主書　復日本國大内殿書等なり

同書巻之四　復日本國王書あり　西堂寿藺これは足利義晴のときなく

慕齋は朝鮮の金安國のことし

東文選巻之十十一十六十七　鄭夢周が使を日本に奉ずる作　崔恒が日本僧に題する詩其餘数人の作をのす　巻之六十二六十三七十八七十九九十九十二三一百一百一二三の巻に日本のことはづれ／＼にのす

晋山世稿巻之二　日本のことにあづかる文なり

東人詩話巻下　日本釋梵岭が詩二句をかけあり
三綱行實図　倭寇の時の忠臣烈婦を記す
續三綱行實図　同上
太平通載巻之七十五　近歳一名相あり使として日本に奉じて西方寺
に至ることゝ
巻下之四
経國大典巻之三　倭学　伊路波消息書格老乞大童子教雑語本
草議論通信鳩養物語庭訓往来應永記雑筆富士などあり
大典續録巻之三　畠山　京極　武衛　山名　細川　大内等殿使人
到浦のことゝ
巻之四五にも略日本のことをのせたり
重刊神應経序　識日本釋良心といふ神應経を以て来て献じ
兼て其本國　神医和介氏丹波氏の癰疽を治する八穴の法を傳ふることゝ
海東諸國記　凡例より道路日本の里数を用ゆ其一里我國の十里に
準ずることゝ　此書日本の風俗を記することつまびらかなり　次は日本の本

圖あり　日本國西海道九州図　一岐図　對馬島圖あり　次は日本
國紀を挙く天皇代序天神七代地神五代人皇始祖神武天皇
以後のことを記せり
懲毖録巻之一二三　平秀吉のことを記す　已上百二十六部其餘本朝の古
書数十部を引くこれを證す○元禄戊辰西峯散人見林自序に
○按ずるに木下元高の好青館漫筆に曰童子向に中華の書の日本を稱
する記す凡百二十餘部なり之異稱日本傳の外なり補遺といふ
らむとゝ欲して亦別に百五十餘部を記すこれ亦西峯氏の外
なりといへど未成書せす他日を俟と

馭戎慨言　四巻　本居宣長

皇國いにしへの御代よりはじめて近き文禄慶長の比豊臣氏の武威
おほやけにしほどまで皇國と漢土朝鮮とのかゝはりしことどもを
しるしたるものなりまた漢土の書にみえたるそのかうかへ
あつかひて皇國をおとしめたるをもとめて論じたる書にて

中古より漢学の世にひろごりくるにしたがひてかの國のことをのみたふとみ
いかなることも此のこゝろ得ちがひて皇國のことをしらずなりぬ
風俗などもことごとく漢土をまねびて　馭戎慨言のやうなるものも
をとりあつかへるにいたりてはいよいよなげかはし序あり此書異稱日本
傳善隣國宝記などに係せ考へて是非の説の和漢往復の書簡
もの國體を損ぜしをもあげつらへり安永七年二月本居宣長の
著述にして寛政二年四月荒木田久老序同十二月尾張鈴木朖漢字の
序あり寛政八年四月上木す

本朝改元考　一巻　山崎嘉

文武天皇の大宝元年より當代までの年号改元の年月日を考へ
あらはせしもの

本朝事跡考　一巻

林春齋林春徳両人の著すところにして朝鮮の申竹堂が所望によりて
本朝人物地理土産行事等をあらはしたるもの

日本遷都考　一巻　平本定智

往古より已来遷都の次第をあらはせる屋島吉野等を除きたるは
作者の發明なりといへり定智は林家の門人なり

七夕考　写本　一巻　跡部光海翁

本朝にてもむかしより七夕の二星を祭ることありて和漢の故事古歌を考
へあはせ未だ垂加流神道の大意をあらはす

國號考　一巻　本居宣長

皇國の号いにしへより唱へ来りしの御諸名又から國へ有りし義など
くはしく論ぜり其國号どもは　大八洲國　葦原中國　水穂國　浦
豊葦原水穂國　夜麻登　秋津島　師木島　虚空見倭國　大日本豊秋津洲
安國　細戈千足國　磯輪上秀真國　秋津洲　大養徳國
倭　和　和奴國　磯馭盧島　大倭國　日本
比能母登　野馬臺　豊秋津島等なり○此書天明七年の秋上
木す

真暦考　一巻　同上

此書の趣意ハ上代にハ暦といふものなく四季折々の色代りしさまを歎
草木のうつりゆく物のかはりを見て月の出入日月支干暦法などの
のさだまりしハ後世のことなりなど論せり

三大考　一巻　服部中庸

此書ハ本居宣長著すところの古事記伝附巻にして天地国の
なりはじめのことを論じ図をもしるせり天とハ日をいひ
地と泉とをいふ○寛政二年本居宣長跋有

玉くしげ　一巻　本居宣長

此書ハ何方の道の大むね今の世の人の知るべくたてまつるべく
うまし秋なりとてありつる中の事をしるしかへしてかけるものなりし
そのさまハ
身にしみぬおもしろさもめづらしげあれくたるよ中のくるゝ所
尾張横井千秋序有寛政元年十一月刻す

宇比山踏　一巻　同上

此書ハ初学のしるべにまなびさまをしへたるものにてこの書中に曰
官職の事ハ職員令をはじめとしてくはしくあきらむべし世の学者おほく
職原抄によりてまなべども此書ハ後世のさまなれば
まづくはしく朝廷のもろもろの事ども後世にかはれるはおのづ
からそのもとをまなびてよりそのみなもとよりあきらめ
らるべきなり官職の事をしるせる世の書いくらもあれど儀式
の書ハ貞観式弘仁の内裏式など其外江家次第世におこなはる
て用ふる書なれどこれも後の世のやうにかはれるもあれば貞
観儀式などもあはせてまなぶべし大かたの礼儀類典めでたき書
なれどもそのかた大部なればたやすくまなびがたし其外わが本朝
なかごろのものハ世にこれおほけれども中古以来のものなれば
穿鑿して古へをたづねてかんがふべしこれらはもとは世にまれなれども
いにしへあるなり此古書ハ中川延喜式

かくしるして八西宮記北山抄此二書ハ考未詳なとの学のしるヘハ
かならず律令官職儀式其外のことどもハありてかたはら朝廷の
もろもろの事をしるせるものなれバよむことなくよろしく此外六國史乃
類聚國史大日本史日本逸史釋日本紀等のものにつきてハ歌ち
のるかたしうそふてよ論じて明らかなりとかや

和学辨 二巻 平維章

本朝の古書どもの中に誤字脱字だらけのものを考へ其餘律令格式の
說を初め世紀扶桑略記日本紀略等の事につきてハ今昔物語を詳
略の二ツにわかちてものかたりしは漢土の事梵土のことなどを
まじへたり○巻首に東海平維章著とあり俗稱篠崎金吾

とりつくし

衝口發 一巻 藤貞幹 字本

皇統 言語 姓氏 國號 神璽 年号 容飾 衣服 喪葬
祭祀 拍手 和歌 詩賦 國史 制度 等廿條わけたち皇國の
いにしへの事を漢土朝鮮琉球などのふるき書によりてしるし臆断して日本
紀をよむに先此國の事ハ馬韓辰韓よりはじまりし弁韓の事
相ましはりしよりはじまるものとおもひて解し
りと說なかばあけたり○引證の書三十六部を挙ぐ天明元年辛丑七
月にしるせり

鉗狂人 一巻 本居宣長 字本

此書ハ藤貞幹の衝口發を破して書き巻首に此國の人
をいはれん近きころ衝口發といふ書のいでて人の心の
まよひてなやめ事どもかゝれたりてみずからの大御國の
ことどもをくらうまちまちに論じたてまつりしかここに皇統のことく
かくのごとくのことありてひとつに狂人の言なり
故今これを辨じて名けて鉗狂人といふ○巻末に天明五年乙巳
十二月伊勢人本居宣長しるすとありこの書の奥に水草乃上のものがたり
つけて附しなどかしこくあはれなる事どもにて皇國のことを
さとして論じたり○鉗ハ字書に音甜鐵を以て物を束ぬる

よくしらる

好古小録　二巻　藤貞幹

上巻　大宝元年勅書に用ひられし大学寮の印　駅鈴　伊予国道後湯碑　元明天皇御陵の碑　隼人の図　其餘書画八大宝元年の勅書　鴨毛屏風　空海書　橘逸勢書　菅贈太政大臣書　道風佐理行成書　陰陽寮日月図　大内裏図　絵巻物屏風等

下巻　雑考　招提寺講堂　校倉　古瓦　其餘古文書　諸器物等　附録　民部省厨量器印　銅斗　古磁研　書嚢　竹帙　牙籤　書車　燧袋　麻袋等の図をのせたり

〇此書上巻書画の部に職人尽歌合西行物語図光大師親鸞聖人等の絵伝のせ　下巻に禁秘御抄和名鈔職原抄袋草子等の古本のゑらみあり　又編年詩鈔并引く黄楊木を印材とすることを考へあらせり〇寛政六年六月正五位下橘経亮の序あり　[illegible]

其図するにいろは国々のいにしへよりめせしものにて筆の跡絵巻物等いはゆる調度のものの名のいはれまでを國史日記のうちより引證してしるしたり〇寛政六年六月正五位下橘経亮序

好古日録　一巻

秦璽　漢委奴国王印　閻翊印　古銭　石敢当　古瓦文字　石人図　淳化閣帖　古竹簡　古本　山口本　旧本家伝　活字年中行事　古暦本　片仮字暦日　花押　古尺　上世食器　上世衣服　古琴　古剣　歴世古物　歴世文書　蝶鳥図　其餘雑事をのせたり〇寛政丙辰正月藤原資同漢字の序あり　同九年四月上木す

和漢硯譜　三巻

巻之一　日本硯材　清瀧石　鳴瀧石　月輪石　鴨川石等より瑪瑙石　琥珀石　鏡石等まですべて二十八種をのせ其産所石色縁紋かたちをもくはしくしるせり

日本硯石　柿本人丸硯　壬生忠岑硯以下四十六種
巻之二　漢研　進御琴研　蔡氏研以下四十二種
巻之三　漢研石　六十八種
高氏研譜　二十種　茅氏研譜　二十三種
附録　清張山来が研林
○此書和漢の古硯を図するもの也模くせし巻首に丁未十二月柴邦彦の序　源元凱の序　寛政七年春　希聡の自序あり　寛政九年四月上木す

集古十種

銅器　印章　硯　楽器　甲冑　馬具　刀剱　弓矢
旌旗　鐘銘　碑銘　扁額　小倉色紙
已上既に刊行の分也其目録の大概如左に記す
銅器部　一巻　凡例
一凡鏡鐸匜盤係銅器者皆載此集
一凡此集随得収入是以世次年代皆不能以序
一凡物雖渉偽贋有可疑而無的證之可指摘者今且収入以資博覧

畧目録

相模國鎌倉鶴岡八幡宮蔵政子十二手箱中鏡圖
京師大佛殿什物太閤秀吉公鏡并匣図
山城國大原古知谷阿弥陀寺什物鏡図
陸奥國安積郡王宮権現神宝釆女所持鏡図
相模國禅居菴什物大鑑禅師所持鏡図
尾張國神戸村所堀出鏡図
大和國奈良道祖神々輿鏡図
伊豫國三島社什物孝謙帝御鏡図
同天智帝御鏡図
攝津國長田大神々鏡図　三図
伊勢神官檜垣丹波守所傳鏡図

越後國魚沼郡松代市所堀出鏡圖
大和國法隆寺藏鏡圖
參河國鳳來寺鑑堂藏鑑圖 十三面
相模國藤澤寺什物照手姫所持鏡圖
豐前國小倉足高山所堀出鏡圖 九面
其餘數十面總計三十餘圖

印章部 四巻 畧目録

巻之一

天皇御璽 共四 建武之宝 皇帝官印
大政官印 執政官印 神祇官印
主殿寮印 典藥寮印 左京印
民部印 宮内印 圖書寮印
大學寮印 雅樂寮印 施藥院印
勸學院印 造平安宮城職印 遣唐使印 共二

兼和年間民部省所用印

巻之二

官印 山背國印 大和國印
攝津國印 其餘諸國印 太宰府印
鎭守府印 宇治郡印 共二 添上郡印 其餘諸郡印
太和守印 大寺卿印 下野國足利学校印
内親王酒人印 右大臣藤原忠平公印 将軍義仲印
足利家印 共二 平右府信長公印 共三 豐太閤印
豐臣秀次公印 永祿年間印 共二 兼平年間加宅券所用印
清原經賢印 共三 武田信玄印 金澤文庫印

巻之三

伊勢太神宮印 北野天満宮印 雄徳山八幡宮印
仁和寺僧綱印 造東寺印 弘福寺印 共二
東寺傳法印 西寺日代印 東大寺印 共三

大安寺印　百濟寺印　法隆寺印 共二
西大寺印　比叡寺印　延暦寺印
因幡國師印　石山寺印　岡寺孝謙帝勅作印
小田原最乗寺道了權現印　高山寺印
日蓮上人印　安樂壽院印

巻之四

諏訪社印鈕　東寺印鈕　法隆寺印鈕
佛乗禪師宋朝請来印鈕 共三　伊勢内宮政印櫃
法隆寺印櫃　絡印 共三

其餘数十顆四巻總計百八十餘図

古硯部　一巻　畧目録

大和國吉野山吉水院藏後醍醐天皇御物竹文臺図
同竹硯箱図　同琨玉硯図
同國釜口普賢院曽我堂藏千宗易硯図

同銅雀臺瓦硯図　同國當麻寺藏松蔭硯并箱図
相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏源頼朝公硯箱図
山城國壬生寺藏壬生忠岑硯図　大和國東大寺藏磁硯図
京師東寺藏硯図　同弘法大師風字硯図　同藏唐李家製墨図
攝津國大坂蒹葭堂藏硯図　大和國在原寺藏在原業平硯箱図

其餘数十図總計三十餘図

樂器部　三巻　畧目録

巻之一

大和國信貴山藏二鼓図　同藏振鼓図　同藏羯鼓図　同藏面図
安藝國嚴島藏小攖笙図　同袋図　大和國法隆寺藏洞簫図
同國吉野山藏後醍醐天皇御物三嶽丸笙図　同十文字笛并高麗笛図
家藏堪能丸図　大和國法隆寺藏琴図　同國龍田社藏服鼓図
同鞨鼓其臺図　同國東大寺藏古図
山城國本能寺藏時雨箏図

卷之二
安藝國嚴島明神藏箏圖　同藏舞樂古面圖
相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏舞樂面圖　陸奥國願成就寺藏琵琶圖
大和國法隆寺藏石胴鞨鼓圖　山城國梅宮社人橋本肥後藏笏拍子圖
伊勢太神宮神宝箏柱袋圖　南都興福寺藏古面圖
山城國京氷室社藏羅陵王面圖
卷之三
大和國東大寺藏俊乗房鉦鼓圖　山城國妙覚寺藏二絃圖
陸奥國會津塔寺八幡宮藏漢竹笛圖　同州古屋何某藏四絃圖
大和國東大寺藏伎楽面圖數二十七　佛工田中内藏丞藏鬼面圖
其餘數十圖總計百三十餘圖

甲冑部　三巻　畧目録
卷之一
備前國邑久郡上寺八幡宮藏佐々木三郎盛久甲冑圖
伊豫國三島社藏源義經朝臣鎧圖　同藏甲冑圖
同藏河野通信鎧袖圖　同藏鍬形圖　源義政公甲冑圖
武藏國御嶽山藏日本武尊甲冑圖
卷之二
山城國藤森社藏頬當圖　同籠手圖　同臑當圖　同脛楯圖
同鎧唐櫃圖　大和國興福寺藏源義經朝臣甲冑圖
加賀國江沼郡須輪間村多太藏實盛甲冑圖
伊豫國三島社藏源頼朝公所奉甲冑圖　新羅三郎義光兜圖
安藝國嚴島社藏源義家朝臣甲冑圖　同藏平重盛卿甲冑圖
同藏大内義隆甲冑圖　尾張國海東郡馬島村白山社藏景清甲冑圖
卷之三
大和國吉野山勝手社源義經朝臣冑圖
下野國都賀郡小山驛祇園山天王寺藏小山下野守兜圖
武藏國荏原郡品川領高輪法藏寺藏楠正成冑圖

攝津國桂尾山勝福寺藏武藏守平知章甲冑図
同國勝尾寺藏守津宮頼綱十念兜図
和泉國北曽根村農家藏北島連甲冑図
攝津國八部郡農家鷲尾次郎兵衛家藏源義経朝臣所賜藤
威甲冑図
新田左近衛権少将兼武藏守源義宗朝臣大袖図
陸奥国石川八幡宮藏源頼光朝臣鎧図
武藏國江府邑田小山龍原寺藏加藤清正冑図
河内國観心寺藏楠正成喉輪并腹巻図
大和國信貴山本覚院藏楠正成兜并片袖図
出雲國大社藏甲冑図
其餘数十図総計五十餘図

馬具部　二巻　畧目録

巻之一
古銜図　大森彦七鞍図　武藏國御嶽山藏鏡鞍図
河内國錦部郡観心寺中院藏楠正成鞍図　源義政公香包鞍鐙図
相模國鎌倉極楽寺藏大舘次郎鞍図　新井家藏本古鞍図
甲斐國山梨郡所拠得壷鐙図　大和國奈良正倉院藏葉茨銜図
備前國上寺村八幡宮藏佐々木盛綱銜図

巻之二
大和國法隆寺藏壷鐙図　同國東大寺若宮八幡宮藏移鞍皆具図
美濃國大井驛長國寺藏根津是行鐙図　同鞍銜図
丸井某家藏豊臣秀吉公銜図　陸奥國白川郡大村所拠得轡図
備前國上寺八幡宮藏佐々木盛綱馬腹帯環図
伊勢内宮文殿藏古銜図　伊勢神庫馬具図　同白馬図
其餘數十図総計五十餘図

刀劔部　二巻　畧目録

大和國吉野郡賀名生郷和田村堀源二郎家藏後醍醐天皇御劔図

飛騨國高山國分寺藏小烏丸太刀図　平鞘太刀図
山城國鞍馬寺藏源義経朝臣太刀図
伊勢内宮藏俵藤太秀郷蜈蚣切太刀図
播磨國宍粟郡山崎町平瀬某家藏天國太刀図
相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏源頼朝卿太刀具尻鞘及蛭巻図
千葉介常胤下鞘図　筑紫彦山所掘得刀図　丹波國大江山所得刀図
源頼義朝臣太刀図　伊豫國三島社藏平重盛卿太刀図
那須家藏與市宗高太刀図　伊豫國三島社藏大森彦七所奉太刀図
同大塔宮所奉太刀図　尾張國熱田社藏兵庫鎖太刀図
源義家朝臣海老鞘巻腰刀図　相模國箱根權現社藏赤木短刀図
同藏源頼朝卿所奉太刀図　同藏嵯峨天皇御劔図
同藏古太刀図　伊豫國三島社藏高力左近大夫高長所奉太刀図
同藏平重衡卿所奉太刀図　信濃國諏訪社藏細切丸太刀図
長門國赤間関阿弥陀寺藏安徳天皇御劔図

同藏能登守教経刀図　攝津國丹生山田農栗花落理左衛門藏天國太刀図
駿河國富士浅間社藏武田信玄太刀図　足利家短刀金具図
京師本能寺藏刀劔図　近江國竹生島社藏俵藤太秀郷所奉太刀図
武藏國多摩郡御嶽山社藏宝壽丸太刀図　京師六角堂古劔図
織田信長公腰刀図　讃岐國楠某家藏楠正成腰刀図
大和國吉野山櫻本坊藏大和大納言殿寄附護摩刀図
同藏村上彦四郎鍔図　山城國本能寺藏大太刀図
其餘數十図總計九十餘図

弓矢部　一巻　畧目録
攝津國住吉社藏弓并弓囊図　出雲國大社藏弓図
尾張國熱田社藏弓図　相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏源頼朝卿弓図
同藏武田信豊繁藤弓図　出雲國大社藏矢図
加賀國江沼郡須輪間村多太社藏實盛表指鏃図
尾張國熱田八劔宮藏矢図　同藏蟇目図

近江國佐々木家藏六角義賢鎧図　攝津國住吉社藏箙図
同藏鞆図　伊豫國三島社藏浅利與市所奉箙図
同弦巻図　尾張國熱田八剱宮箙図　同矢加羅美図
伊豫國三島社藏和田小太郎所奉箙図
攝津國八部郡農鷲尾次郎兵衛家藏源義経朝臣鞆図
同鎧図　越後國一宮弥彦神社藏鎮西八郎為朝鎧図
大和國金口長岳寺藏能登守教経矢図
攝津國住吉社藏鞆図　同靭袋図
南都東大寺藏竹箙図　京師荻野某家藏秦川勝胡籙図
其餘十餘図共計三十餘図

旌旗部　三巻　畧目録

巻之一

攝津國天王寺藏貞国親王旗図　同藏貞保親王旗図
同藏平重盛卿旗図　同藏平行盛旗図　同藏清経旗図
同藏能登守教経旗図　同藏貞平親王旗図　同藏貞元親王旗図
同藏源満政旗図

巻之二

大和國吉野山吉水院藏後醍醐天皇御旗図
攝津國天王寺藏赤松則祐旗図　同藏足助次郎重範旗図
同藏佐々木四郎高綱旗図　同藏備後三郎高徳旗図

巻之三

大和國吉野郡賀名生郷和田村堀源次郎家藏後醍醐天皇所賜
御旗図　湯川某家藏大塔宮錦旗図
武藏國品川法藏寺藏楠正成旗図　京師五條八幡宮藏旗図　二様
甲斐國山梨郡荻原村雲峰寺藏武田信玄旗図
源義家朝臣旗図　伊豫國三島社藏旗図
其餘數図共計三十餘図

鐘銘部　六巻　畧目録

卷之一
山城國神護寺鐘銘　大和國奈良南圓堂銅燈臺銘
山城國道澄寺鐘銘
卷之二
相模國新長谷寺鐘銘　安房國千光山清澄寺鐘銘
相模國箱根山鐘銘　同國藤澤寺鐘銘　遠江國佐野郡長福寺鐘銘
相模國鎌倉圓覚寺鐘銘　同國東慶寺鐘銘　河内國西琳寺鐘銘
卷之三
大和國奈良眞言院鐘銘　相模國鎌倉巨福山建長寺鐘銘二首
武藏國豊島郡浅草寺鐘銘　同國同郡眞（泉）福寺鐘銘
山城國八幡神宮寺鐘銘　相模國鎌倉鶴岡八幡宮鐘銘
山城國京妙心寺鐘銘　同國山崎宝積寺鐘銘
大和國奈良般若寺鐘銘　陸奥國白川鹿島最勝寺鐘銘
卷之四

武藏國金澤郷知足山龍華寺鐘銘　同稱名寺鐘銘
同瀬戸三島鐘銘　大和國薬師寺塔堂露盤銘
陸奥國平泉中尊寺鐘銘　伊豆國走湯山東明寺鐘銘
大和國吉野勝手明神古鐘銘　同世尊寺鐘銘
卷之五
山城國太秦廣隆寺鐘銘　大和國奈良中川寺鐘銘
陸奥國平泉毛越寺鐵燈銘　同鹽竈大明神鐵燈銘
紀伊國粉河寺鐵燈鼎銘　尾張國一宮燈臺銘
武藏國多麻郡府中六所明神境内鐵佛銘
大和國薬師寺佛背銘　同國法隆寺釋迦銅佛光背銘
同薬師銅佛光背銘　相模國鎌倉所掘得経筒銘
常陸國青柳凌霄寺経筒銘　伊豆國田方郡牧野村所掘得骨壺銘
同國君澤郡増山村益山寺花盤銘　陸奥國會津庄八幡宮鰐口銘
山城國京壬生寺鰐口銘　大和國東大寺聖武帝銅板勅書

卷之六
伊豆國走湯山東明寺鐘銘　肥前國平戸觀音院鐘銘
相摸國鎌倉鶴岡八幡宮銅燈銘　大和國東大寺燈臺銘
備中國一品吉備津宮鐘銘　駿河國巨鼇山清見寺鐘銘
大和國栗原寺塔堂露盤銘　同國法隆寺銅斛銘　二枚
長持寺閼伽桶銘　安藝國伊都岐島鐘銘
其餘數十篇總計七十餘篇

碑銘部　七卷　畧目録

卷之一
大和國藥師寺佛足石碑　陸奥國多賀城碑
大和國益田池碑雷字
卷之二
陸奥國宮城郡松浦碑　同國盤手郡松浦碑
近江國草津驛西南新田村碑　武藏國野火留平林寺碑

大和國吉野山中苔清水碑　同國奈良佐保山御陵碑
大和國奈良招提寺金堂鵄尾銘
陸奥國宮城郡信田小太郎館跡名切山碑
攝津國湊川楠正成碑　山城國宇治橋斷碑
武藏國品川海晏寺北条時頼墓誌
攝津國芦屋村猿丸大夫墓誌
卷之三
上野國多胡郡眞井村碑　河内國石河郡高屋連枚人墓誌
大和國奈良十輪院境内忍海連奥食碑
河内國上太子藏聖徳太子瑪瑙石記
同國古市郡駒谷村金剛輪寺境内永手公墓誌
陸奥國宮城郡燕澤村碑　河内國石河郡春日村紀廣純女吉繼墓誌
卷之四
陸奥國松島御島碑　大和國達磨寺八面碑

伊豆國柳下郡土肥堀内村萬年山城願寺實平墓誌

卷之五

陸奥國宮城郡南宮村慈雲寺碑　武藏國牛島牛御前社碑
伊豆國和田村伊藤入道墓誌　陸奥國守山大元帥社碑
大和國葛下郡馬場村穴虫山所掘出小野伊奈卿墓誌
武藏國品川海晏寺二階堂墓誌　近江國愛智郡百済寺下乗碑
武藏國入間郡久米村將軍塚碑　伊豆國田方郡善名村碑
下総國葛西郡青砥村古城跡碑　紀伊國高野山町石縮圖

卷之六

相模國江島碑　同國鎌倉扇谷海藏寺碑
大和國宇知郡大澤村楊貴氏墓誌　下野國宇都宮清巖寺鐵石
大和國寧楽佐保山碑　肥後國石敢當碑
山城國京五條八幡宮手水鉢銘　武藏國秩父碑
上野國八幡山碑　同國桐生碑　大和國宇治川磨崖碑

卷之七

僧空海益田池碑草本眞跡
其餘數十篇總計六十餘篇

扁額部　八巻

扁額廣攬　一巻　共九巻

凡例　四則

一題署之體法起秦漢本朝名賢親承之隋唐世有能者是以宮殿扁額燦成一王典刑但中葉以降乾綱解紐宮闕荒癈諸公名蹟隨亦散亡其僅存者獨書家者流摸本耳今一據之編入其在佛閣神祠者以僻遠免兵火眞蹟往々見存亦就摸取原本編入

一原字挾步紙冊可容者皆全依原本其字體長大者倣陳繹曾八面九宮圖法縮寫收入若欲復舊觀照線方放大則可以不謬毫末矣

縮寫割線圖

畧目録

巻之一

觀智院僧正賢賀真跡百寺　後小松院宸翰京師金閣寺額究竟頂

後土御門院宸翰京師吉田社額元本八神殿　嵯峨天皇宸翰上品蓮臺寺

世尊寺大納言行成卿真蹟清水寺　同上上京辨天額雨宝

同上京師吉田社額日本最上日高日宮　後奈良院宸翰知恩教院

後柏原院宸翰嵯峨二尊院額小倉山　青蓮院宮尊祐法親王真蹟感神院新宮

花園院宸翰京師正法山妙心寺額三鳳院

淳和天皇宸翰甲斐國山梨郡東光寺村日輪法城寺額日輪法城禅寺

清水谷大納言實秋卿真蹟京師吉田社樓門額日本最上両太神宮

後花園院宸翰相模國鎌倉光明寺山門額天照山

持明院権中納言基輔卿真蹟江戸聖堂仰高門額仰高

同上入徳門額入徳門　同上聖堂額杏壇

後陽成院宸翰紀伊國高野山興山寺額興山寺

弘法大師真蹟大和國法隆寺塔頭西園院蔵一切経蔵

伏見院宸翰京師花園妙心寺経蔵額毘盧蔵

巻之二

霊元院宸翰江戸東叡山中堂額瑠璃殿　弘法大師真蹟應天門

同上會昌門　世尊寺大納言行成卿真蹟清水寺

同上淨花院　同上法華三昧堂　同上釈迦堂　同上淨妙寺　同上霊鷲山

同上京師西山天安寺額法金剛院　参議佐理卿真蹟鷲音院

同上大隅國八幡宮額敵國降伏　小野道風朝臣真蹟霊山華厳院

同上攝津國天王寺額釈迦如来ヽヽ　世尊寺定成朝臣真蹟圓照

青蓮院尊純法親王真蹟相模國鎌倉鶴岡若宮権現額若宮大権現

龍池院二品尊朝法親王真蹟讃岐國大水主社額正一位大水主大明神

弘法大師真蹟大和國金峯山第四鳥居額妙覺門

巻之三

小野道風朝臣真蹟参河國瀧山寺仁王門額 瀧山寺
同上播磨國極楽山浄土寺額 浄土堂　同上嵯峨青龍寺釋迦堂樓門額 愛宕山
同上山城國乙訓郡西岡向日社額 正一位向日大明神
同上同國山崎八王子社額 天神八王子　同上筑前國太宰府觀世音寺額 觀世音寺
同上尾張國熱田社東門額 春敲門　同上大和國奈良長楽寺額 長楽寺
同上越後國柏崎永徳寺額 永徳寺　同上讃岐國白峰頓證寺額 頓證寺
同上大和國金峯山第三鳥居額 等覺門
世尊寺大納言行成卿真蹟 正一位高野大明神　裏書寛弘六年正月二十八日書之
同上山城國石清水八幡宮額 雅宮八幡
世尊寺正三位經朝卿真蹟武蔵國多磨郡谷保村天神額 天満宮　世尊寺從三位行能卿真蹟石山寺額 石山寺
世尊寺正三位行季卿真蹟山城國梅津地蔵堂額 引接寺
弘法大師真蹟京師東寺什物 八幡宮
世尊寺從二位經尹卿真蹟武蔵國瀬戸大山積社額 正一位大山積神宮
後鳥羽院宸翰筑前國博多聖福寺額 扶桑最初禅窟

傳教大師真蹟 南無山王廿一社　後小松院宸翰相模國圓覺寺額 興聖禪
後土御門院宸翰京師大徳寺方丈雲門菴額 雲光
弘法大師真蹟大和國金峯山第一鳥居額 發心門

巻之四

神祇伯從二位卜部兼雄卿真蹟播磨國中市郡天神鳥居額 天満宮
藤木甲斐守敦直真蹟京桂宮御領内下桂村御靈宮額 御靈宮
中御門前大納言宣胤卿真蹟近江國愛智郡大社額 正一位大社豊満大明神
拾遺宰相入道教長卿真蹟 金峯山　弘法大師真蹟河内國觀心寺額 觀心寺
船橋經賢入道常覚真蹟河内國古市白鳥社額 白鳥大明神
高野山沙門悔焉真蹟 天照皇大神宮　瀧本坊昭乗真蹟 月華高
妙法院二品堯然法親王真蹟 山王大權現　弘法大師真蹟信濃國善光寺額 善光寺
曼珠院二品良尚法親王真蹟播磨國印南郡曽根村天神額 天満宮
弘法大師真蹟京師東山靈山國阿堂額 靈鷲山
聖護院宮道晃法親王真蹟山城國愛宕郡日吉坂南新熊野社額 新熊野

野大權現
仁和寺覺深法親王真蹟 武藏國豊嶌郡王子社額 唯一王子宮
崇保院公寛法親王真蹟 江戸下谷正法院中島居額 正一位稲荷大明神
蓮華光院大僧正道恕真蹟 同上拜殿額 稲荷大明神
筆者不詳 大和國長谷寺鳥居額 功徳成就盛之
弘法大師真蹟 大和國大峯泥川龍泉寺額 龍泉寺
大職冠鎌足公真蹟 高林寺　菅公真蹟 越後國松山農家藏 太夫
近衛大相國家熈公真蹟 江戸小石川牛天神鳥居額 天満宮
堀川左大臣俊房公真蹟 山城國宇治郡平等院樓門額 平等院

卷之五

光明皇后宸翰 參河國鳳来寺額　後水尾院宸翰 江戸東叡山寛永寺額
花園院宸翰 相模國鎌倉圓覚寺山門額 圓覚興聖禅寺
醍醐天皇宸翰 丹後國天橋之智恩寺額
聖武天皇宸翰 尾張國一宮額 真清田大神
參議佐理卿真蹟 筑後國一宮鳥居額 高良玉垂宮

石川杢亮頼直真蹟 武藏國橘郡川崎平間寺大師堂額 平間寺
京極黄門定家卿真蹟 大和國吉野郡川上荘多古村秋光山心月院藏 時雨亭
大覺寺宮寛深大僧正真蹟 但馬國妙見山帝釋寺額　後柏原院宸翰 京師嵯峨二尊院額
弘法大師真蹟 下野國日光山瀧尾社額 女體中宮
持明院中納言基雄卿真蹟 陸奥國鹽竈社額 左宮 別宮 右宮
後光嚴院宸翰 相模國鎌倉圓覺寺佛殿額 大光明宝殿

卷之六

持明院權中納言基雄卿真蹟 播磨國高砂社額
祐崇上人真蹟 相模國鎌倉光明寺額 勅願所
宸翰不詳 但馬國一宮鳥居額 正一位勲十二等粟鹿大明神
小野道風朝臣真蹟 丹後國天橋立籠社額 正一位籠之大明神
智覚禅師真蹟 相模國新井閻魔堂額 琰王殿
參議佐理卿真蹟 伊豫國三島社額 日本總鎮守大山積大明神

小野道風朝臣真蹟丹波國井原石龕寺額 大谷寺
後奈良院宸翰京師智恩院本堂額 大谷寺
九條准三后尚實公真蹟遠江國秋葉山鳥居額 秋葉大權現
隨宜樂院一品公遵法親王真蹟 天淵 裏書天明五年
後西院宸翰京師泉涌寺藏 霊明 小野道風朝臣真蹟 神 正一位勲八等高野大
弘法大師宸蹟大和國法華寺村海龍王寺額
後奈良院宸翰安藝國嚴島社鳥居額 伊都岐島大明神
張即之真蹟京師泉涌寺額 裏書七行
玄宗皇帝宸翰 補陀海山圓通宝閣 裏書六行
持明院攝大納言基時卿真蹟相模國江島岩本院額
釋自休真蹟安藝國嚴島經藏額 轉法輪

巻之七

弘法大師真蹟 真言院　同上 宜陽門
筆者不詳 建春門　同上 承明門
弘法大師真蹟 長樂門　同上 承香殿
筆者不詳 仁寿殿　同上 春興殿　同上 内衛門
同上 紫宸殿　同上 宜秋門　同上 永安門
堀川左大臣俊房公真蹟 明義門　筆者不詳 左掖門
同上 建禮門　弘法大師真蹟 常樂門　筆者不詳 弘徽殿
同上 温明殿　同上 綾綺殿　同上 校書殿
同上 清涼殿　同上 後涼殿　弘法大師真蹟 貞觀殿
霊元院宸翰京師西加茂霊源寺額　弘法大師真蹟 菩提門
藤木甲斐守敦直真蹟 不老門　弘法大師真蹟 南嶽門
佛光禪師真蹟相模國鎌倉建長寺開山塔外門額 嵩山
張即之真蹟同圓覺寺浴室額　同上方丈額
夢窓國師真蹟同上祈祷殿西面額 祈祷　修正
土御門院宸翰相模國江島辨天宮額 大辨才天女
雲巖真蹟同國鎌倉建長寺開山塔中門額 西来菴

宸翰不詳同上佛殿額 祈禱
竹西真蹟同建長寺東門額 海東法窟 裏書 崇禎元年十一月日竹西書
筆者同上同西門額 天下禅林 裏書同上
筆者不詳同山門額 建長興國禅寺 或云宸翰或云宋子曇再書也
蘭溪禅師真蹟同常樂寺文殊堂額 秋虹
筆者不詳同圓覚寺祖塔門額 萬年山
同上同建長寺總門額 巨福山 或云趙子昂又云寧一山
無準和尚真蹟同圓覚寺禅堂額 選佛場
佛光禅師真蹟同常樂寺文額 圓鑑
從二位源氏滿卿真蹟同圓覚寺祖塔額 常照
宸翰不詳山城國長谷村解脱寺額 八鹽山解脱寺 此額今在三井寺云云
參議佐理卿真蹟京師北岩倉大雲寺觀音堂額 大雲寺
宸翰不詳安藝國誓願寺本堂額 或云天智帝宸翰
後水尾院宸翰山城國幡枝圓通寺藏 大悲
宸翰同上 圓通
宸翰不詳陸奥國白川正雲山金勝寺 祈禱修正両雨額
聖護院道澄准后真蹟 稱名院
後光嚴院宸翰丹波國神尾山金輪寺額

卷之八

昭高院道晃法親王真蹟京師祇園社鳥居額 感神院
宝鏡寺宮真蹟長門國阿武郡萩法光院金毗羅堂額 金毗羅大權現
後水尾院宸翰京師相國寺開山塔額 圓明
仁和寺覺深法親王真蹟陸奥國笠島道祖神長所額 正一位道祖神
最上乘院一品公啓法親王真蹟下野國日光山男體權現額 男體大權現
神道長正二位卜部季兼卿真蹟武藏國久良郡金澤瀬戸三島明神額
清和天皇宸翰京師粟田口御日山太神宮額 日向宮
亀山院宸翰下總國香取郡香取新福寺額 香取新福寺
弘法大師真蹟伊豫國古三津村儀光寺額 真隆山
李三錫真蹟武藏國中鄕多田藥師額 玉島山 裏書 朝鮮國雪月堂
清和天皇宸翰攝津國勝尾寺額

神祇伯従二位卜部兼雄卿真蹟陸奥國鹽竈明神額　正一位鹽竈大明神
白一子真蹟遠江國中泉村八幡宮額
了堂真蹟陸奥國松島御島雲居禅室額　把不住軒
大明院一品公辨法親王真蹟下野國日光山深砂王額　深砂王
月舟真蹟陸奥國白川郡関山満願寺額
後西院宸翰京師北野天満宮中門額　天満宮
觀智院僧正賢賀真蹟隠岐國島前焼火山雲上寺額　焼火山
近衛准后信尹公真蹟武藏國隅田川木母寺額
黄檗南川和尚真蹟下野國都賀郡乙女村泉龍寺西面額
表　御瀧山　淳元上人真蹟　裏　御瀧山
二階堂出羽守行氏真蹟武藏國品川海晏寺額
後冷泉院宸翰陸奥國木幡山治陸寺額
青蓮院尊證法親王真蹟京師鞍馬寺額
後陽成院宸翰周防國吉敷郡宇野金村周慶寺額

仁和寺覺深法親王真蹟陸奥國笠島道祖神鳥居額　正一位道祖神
曼珠院二品良尚法親王真蹟江戸浅草寺總門額　金龍山
大明院一品公辨法親王真蹟同根津權現樓門額　根津大權現
後白河院宸翰伊豫國松山菅生山太寶寺額　菅生山
其餘數十枚共討三百二十餘枚

定家卿真蹟小倉色紙部　一巻　目録
こひすてふわかなハまたき　此色紙及古代もちゆ
あさちふのをのゝしのはら　同上
さひしさにやとをたちいてゝなかむれハ
こぬ人をまつほのうらの
忘らるゝ身をハおもはすちかひてし人のいのちのをしくもあるかな
世中よみちこそなけれ
やへむくらしけれるやとの
誰をかもしる人にせん
残缺

これやこのゆくもかへるもわかれり　東本願寺家人松本主殿蔵
たえぬこのおもひのほとし
さすかに身なとたのまて
まことはいまつ月なかり
みよしのゝ山の秋風
あはれてのはのくにかけなきをしりけるも　三井次郎右衛門蔵
うれけく人なき川世の　三井之助蔵
ゆきのはなちる春人
なくらなましかのりちて　三井八郎兵衛蔵
あさきあけのつきおもえて
石しきやかすかのをとの
あきかせもいまつきんは
もみちのゆくすゑは
さきのとまりしかさきかしを

いそしつのかりほのまこの
花のちるは人めはなれ
わくらたよえかへりさとの
はるかすむひろのやの
田子のうらはちるうくれて
ねむりけふを明の月しく
え世をやまとしまのはまの
はまのをつかさけしれて
うみなみあさまのかにかく
まれにまるはりはのをの　後藤庄三郎蔵

鴻池善右衛門蔵

總計三十三枚

奥書あるこの色紙ハ方代家々の重宝としてかく伝へしもの
なれどれより優劣(ユウレツ)真偽(シンギ)を論ずるものは取捨(シユシヤ)すべき
まゝはかずた温故(ヲンコ)のたすけとなくしてまとめつひしく収入

すの一

花押薮　七巻　丸山可澄

凡例にいはく此書上天子より下連歌師にいたるまで類をわかち部を立
そのうへ年代を以て次第をなす或ハ一家同部の者ハ年代に拘らず
鱗次しくこれを出し以て観覧に便す　凡此書姓名の上旁に其
家號を註す下に其父の名及其官位卒年を註す以て考證に便す
○凡此書に載るところの花押皆其真跡を臨すはしハ傳写なりと
いへども其原なく来歴なきハ疑似に渉るものなり間に一本を
剞すものあれバ判書といへども其輯するところ皆中古将士の花押なり今真
跡を以てこれを質するに甚状皆異なり蓋軽薄の徒工巧偽作
して以て俗眼を眩かすのみ今ことごとく取ず○凡此書に載るとこ
ろ花押をハおほく其代を出して註す間出所を註せざるものハこれ海
内家々に于今ハ戸に蓄るものなり○凡釋家ハ其官の有無を論
ぜず年代を以て次第をなす法親王のごときハ則釋家なりといへども

衆族に混同すべからず故に親王の末に附して操しては親王と
いふ○巻首漢文の自序ハ夫文書者事之左験云々して花押ハこれ文
書の左験なり可澄　君命を奉じ古今の花押を輯むること七
巻とす名づけて花押藪といふ凡古今の文書多くハ花押をもて
名氏にかへたり此書毎段其姓名を標して其官位を註すこれ
豈花押の左験にあらずや元禄之年歳次庚午六月穀旦常州水
戸府丸山可澄序
巻第一　天子　後深草帝より後水尾帝に至る　二十人
親王　惟康親王より尊邦親王に至る　十二人　法親王　守覚法
親王より道晃法親王に至る　二十一人　執柄　藤原良経より
藤原康道に至る　二十人　大臣　平清盛より藤原教平に至る
三十四人　贈大臣　源尊氏より藤原晴豊に至る　八人
巻第二　大納言　藤原行成より藤原兼賢に至る　四十一人
贈大納言　藤原為之　源廣忠　二人　中納言　大江匡房より

源頼房まで　二十九人　贈中納言　藤原長政　一人
藤原佐理より源忠昌まで　十三人　二位三位　源直義より
源忠吉に至る　十四人
巻第三　四位　源義家より大江尚政まで　百二十一人
巻第四　五位　源義國より平堅盛まで　百四十五人
巻第五　五位　源元常より藤原政一まで　百三十三人
巻第六　無官位　平實平より平一成まで　五十七人
巻第七　釋家　良忍より日忠まで　九十人
連歌師　宗祇より満材まで　九人

續花押藪　七巻　同上

巻首自序に云凡天下之事此に感ずるときハすなはち彼に應ずる事顕晦の数にかゝはらず期せずといへども感應の理ハ必ずあるものなり可澄獨に義公の命を奉じて花押藪を撰する時に江帥匡房の押字を傳へ示すものなし然れども他の證なし真贋辨ずべからずいはんや今を距ること六百餘禩なんぞ後人の偽造ならざらんやおもふに大江帥ハ一代の偉人なりし其押字をたとへて疑べきを以てこれを棄ることハすなはちもつとも惜むべしとすらば以て愛を雞肋に割ことあたはずしてしばらく之を前編に收む近ごろ續編を纂むるに泊て延久二年の官符を購得たりけれバすなはち江帥及小槻師經連署の牒なり玉匣蓋を得て疑惑氷のごとくに釋ぬるのみならず前編已に行成佐理の二點を收むといへども道風を獲ず常に三點の一を欠ことを憾む今たまたま求めたるに既に江帥を疑ひ師經を獲たり三點を合せんと欲しとせしかれども道風をえたり蓋精誠の感ずるところ葉公龍を致すの比か於戲古代の花押何ぞ此に止らんや閒古押字をたずぬるも姓名家系考ふところなきより闕て存せず可澄老て且疾に嬰しむしかるの多きを貪て歳と玩び日を惕んや謹で義公の遺意に遵ていさゝか微力を竭すのみ書成て剞劂に授じて以て其槩を述ぶ

寳永五年歳次戊子九月穀旦常州水戸府丸山可澄序

巻第一　天子　後醍醐天皇　後光厳帝　後西院帝　三人
親王　幸仁親王　一人　法親王　覚圓法親王より道祐
法親王に至る　十三人　執柄　藤原良實より藤原信尋
に至る　六人　大臣　藤原實行より藤原公規に至る　五人
贈大臣　源義量　一人　大納言　源通氏より源光貞に至る
十人　中納言　藤原資頼より源綱教に至る　七人　参議
藤原長房より藤原忠郷に至る　三人　二位三位　源頼家
より清原枝賢に至る　四人
巻第二　四位　小野道風より菅原宗矩に至る　百三十三人
巻第三　五位　源忠義より平貞衡に至る　百四十八人
巻第四　五位　藤原教隆より藤原正利に至る　百二十一人
巻第五　五位　源忠知より源頼郷に至る　百十八人
巻第六　士庶　藤原敘夫より光悦に至る　八十六人

巻第七　釋家　頼仲より日信に至る　五十七人　連歌師
昌琢　一人

寳永八年三月上木

古押譜　六巻　七本　松崎祐之

巻首漢字の自序にいふ天下許多の人史に載せて傳ふ善人の幸にして不善人の不幸なり天下許多の人賊として才ありて知し善人の不幸少しく不善人の幸なり後學縦横上下して其本を擇其微を彰もせんと欲す特にこれを箝しこれに契しこれに僣しこれを擬し心を用ゆること千萬なりといへども其髣髴を観視することいたさず京師ハ天府の國にして舊刹古祠ハ典物の藪するところ國家乃崇兵燹の避故に歴代の遺宝豎告命制諭令號贈酬の文皆湊るえ老源紀伊州牧君事ハ視の暇古を好みて輙すに就る日祐之をして四方に歴觀し古圖籍を披ゆしむ積累年久しく總素箇に満つ既にして古今を鑑るもの八史なり史を徴するもの八文書なり文書

を徴するものハ押なり其底手無揚しく編次成ハ則亦攷古の一端なりんと越て雖く切於起し歳代歴く書成 但夫姓名官銜譜系年序正疑相錯紙駁相襲るものとしく史ヿ言し人之取く敢て意於ろれ遠ざるところに涵ず嘗て一貴族之聞日く先輩の筆記ろれ偏傍點畫於忽ぐすべうしずられ史於讀妙訣なりと蓋極めく古書の獲がてい往蹟の尚ふべきをりふ今其押於観く其人於想ひ其名於聞く其実於繹めうきこ偏傍點畫の比よ于うしうきハ則此亦以く史於徴すへ符契となすべく以く古よ遡る階梯となすべくして彼幸不幸者の端由て見つべきう依くこれ於貴族者よ啓せハきうん給之ヿあるよ領すべし時よ正徳乙未歳冬至日洛陽松崎祐之江府芝濱の邸舎よ書す

新編古押譜篇目

巻之一上 天子 亀山院 後小松院 二人 親王 榮仁親王 一人 源氏 定具より土岐政房ヿ至ヿ 八十四人

巻之一下 巌松頼宥より後藤直風ヿ至ヿ 九十六人 附押六員

姓名或ハ爵號或ハ官署明發有て世系家牒等いまだ勘へざるものの遺も亦惜べし故よ毎氏の下よ附收し以く後学の纂補を俟下されよ備へ

巻之二 平氏 清盛より岡本重政ヿ至ヿ 五十二人 附押四員

巻之三 藤原氏 成範より片倉景綱ヿ至ヿ 九十四人 附押六員

巻之四 橘氏 楠正儀より山中長俊ヿ至ヿ 六人 高階氏 泰経より大谷吉継ヿ至ヿ 六人 菅原氏 前田利長 坂秀政 二人 大江氏 匡房より毛利秀頼ヿ至ヿ 六人 附押一員 清原氏 清元定 清貞敏 二人 紀氏 浦上祐之より堀田正信ヿ至ヿ 四人 中原氏 親能より摂津之親よ至ヿ 三人 附押二員 三善氏 飯尾之種より布施公雄ヿ至ヿ 十六人 丹治氏 丹治宗行 青木一重 二人 越智氏 稲葉貞通 一柳直盛 二人 大中臣氏 奥田貞長 奥田家次 二人

中臣氏　藤堂家忠　一人　賀茂氏　氏久　一人　大神氏
羽田正親　一人　滋野氏　直田昌幸　一人　宮道氏　蜷川
親孝　一人　日下部氏　朝倉教景より八木正信に至て　七人
三宅氏　浮田直家　一人　豊臣氏　木下秀吉より木下重
堅に至て　五人　秦氏　秦久弘　長曽我部元親　二人
多々良氏　大内弘世より　山口正弘に至て　八人
巻之五　諸氏　須賀清秀より　大塚家續に至て　百十一人
巻之六雑纂　得名并官署者　左衛門尉家頼より　民部少輔
秀清に至　十人　得名者　親宣より秀雄に至　二十五人
得別號者　行圓より如雪に至　十人　得家號官署者
乙部勘解由より種村薩摩守に至　三人　得官署者
丹波守より右兵衛尉に至　二十八人　附押十四員　釋氏
恵鎮　等縁　二人　正徳丙申六月刻

古今茶人花押藪　一巻

此書作者が詳にせず古今の茶人東山殿より千宗守に至るまで八十人
の花押をあらはしそのく小傳を附す又珠光より三谷丹下に至るまで
五十四人ハ花押のみを考へる者と標しくろて小傳のしるしあらはせり巻
末に抗茶記を附す延享三年素濤假字の序あり同年五月刻

萬寶全書　十三巻　菊本嘉保

巻之一　本朝画印傳上　名畫上代より僧宗仙に至る百三十五人の傳
并に印文をあらはす　巻之二　同中　雪舟より桃林に至る百七十人
巻之三　同下　專門家狩野正信より雪山に至　七十二人　雑傳　尊信
より李欽に至　六十四人　狩野家畢世書画法　繪具題名
元禄癸酉季冬菊本幸甫齋跋
巻之四　唐繪畫印傳全　唐繪戴嵩より鄭澤に至　百七十八人
巻之五　和漢墨跡印畫全　隆蘭溪より黙蕃に至る　八十八人
本朝古筆諸流目録全　大師流より傳内流に至　二十八家
古来流行御手鑑目録全　切百三十五　短冊六百十六　慶安四年

古筆菴奥書あり右者寛永之頃之代付也とぞ
巻之六　和漢名物茶入肩衝目録上　故家名器圖　四十七品
瀬戸物唐物諸手新竈肩衝口兀手より挙底手に至　六十三種
巻之七　同下　唐物の茄子より茶俑屋焼に至　五十五種
續編　思川手より鬼四郎焼に至　廿六種　糸切の圖　土薬
竈所　茶入挽家の図并挽物茶入　奥書あり元禄七甲戌年孟春
吉辰浪華ノ野生綱干氏某輯録
巻之八　和漢諸道具見知抄全　古今焼物諸國出所　唐物渡の
次第　古器名物類卅八品条目　奥書あり右和漢道具の一書八方
一往〻粗存せる者これはありといへどもいまだことごとく備らず今幸にして
浪華の所生綱干氏某世に秘するところの全本を得るに依てこれを強
記してこれが求めに附會し、くはしく刪略して補ひ節目図解をと全備
しく梓して鋟るものならん元禄七甲戌孟春吉辰
巻之九　和漢古今宝銭図全　古今和銭　二十七品　三才図會小

窓別記等所載銭　九品　古銭図　二百餘品
巻之十　古今銘盡合類大全上　番鍛冶次第より諸鍛冶系図に至
十三條　鍛冶諸國總目録　國分諸鍛冶秘談山城物より大和物に至
巻之十一　同中　諸鍛冶國目録　國分銘盡相州物より和泉物に至
巻之十二　同下　國分銘盡紀州物より若狭物に至　雑部　二銘
國不知二銘　先書系図秘談抄奥書　秘傳抄奥書　目利書
奥書　及付心形像奥書　已上四部書共に慶長拾六亥三月十二
日の奥書あり
巻之十三　彫物目利彩金抄全　後藤氏系図　彫物代付目録
彫物見分様の事　紋盡の事　諸國鍔の事　柄鞘鮫の事
甲泥鏝の事　享保三年六月刻

古今名物類聚　初編　七巻　陶斎尚古老人

初編中興茶入部　五巻　大名物茶入部　二巻　共七巻とす
凡例にいはく名物と称するは慈照相公茶道数奇を好せたまひ東山の別

業に茶會行はれ古今の名畫妙墨珍器宝壺のたぐひをあつめなをひ
なる當時の數寄者能阿弥に作せあまたこれがしるしをものせら
れたるが此器の名と價とを定めたまひ次々信長秀吉の
二公もまた此道を好せたまひ利休宗及等に作せしめ名を命じ價
をも定めしめられ後世これを稱して名物と云ふは
小堀遠州公古器を愛したまひ藤四郎以下は室町焼などの
も古瀬戸唐物もきはめて名あるものもおほく世に用ひられ其珍惜
みたまひし道具の中にもすぐれたる物を撰てよき名を命ぜられ
けりされば今の世にもてはやする物は今これを中興名物と稱するなり
されど古代の名物をも大名物と別つ○大名物はおほく公の
御物となりて今は大かたの御秘蔵にあればたやすく世の
人のえうべきにあらず此書はまづ大名物のことをさきとし
古今の名器をもしるし其器の作者によりてそれぞれの作人を定め
なすひとつの圖記を加へて求めしる人の便とせしが次編をまた大名物とは

おほく中興名物の今世に用ゆる名物とわかちしるし代物○
凡此書に圖記するところ見ゆる物は銘のうへに○印をつけて擬することのすゑ
は諸家の藏書圖記を用ひて撰合しそれぞれの物を擬し擬ることのすみ
いふもの諸書の圖なきものの圖あるも正しからずこ
そのはたそれぞれに好まれしまじく其作者の手前はなほなく
見るは圖にの正しからぬはぶ見ゆべき所ひかゆる事も多くしるく補ふ
○挽家尭箱書付添翰添懸物等もみな図して謄写するにしてしるし挽家並
らも正しからぬはなにがにも仮名をとりて模写挽家の書付
も夫模なりてごるはたいへんのかたちのかたちを出す地
個没摘八副書のきものをしくりて○此書の次編八大名物茶
碗香合 織物 名物雑記 四上四編とし 校合の令しつかりし梓
行すべし 天明丁未孟春
巻之一 唐物 巻之二 古瀬戸
巻之三 藤四郎 藤四郎春慶 巻之四 金華山
春慶

巻之五　破風　巻之六　大名物　唐物
巻之七　古瀬戸
同　二編　五巻　同上
巻之一　茶入　後窯　國焼　巻之二　天目　茶碗
巻之三　樂焼茶碗　巻之四　雜記　茶杓　花入　茶箱　壷
巻之五　同　水指　釜　硯
同　三編　拾遺部　四巻　同上
巻之一　茶入　藤四郎　金華山　破風
巻之二　同　唐物　古瀬戸　春慶
巻之三　掛物　歌之物　小倉色紙　墨跡
巻之四　香爐　甚　盆　香合　瀧本坊七種名物
已上三部寛政元年刻
同　四編　名物切部　二巻　同上
巻之一　緞子　金襴　巻之二　間道　雜截

寛政三年辛亥冬刻
古錦綺譜　写本　一巻
緞子　金襴　銀襴　間道　紗金　印金　風通　海氣等をのせ類をもちて地組模様をつまびらかにしるし價を附す巻末に
江田世恭の印金考にて
和漢書畫一覧　一巻
凡例に云書畫一覧原刻明和八年に公布す今原刻の訛闕を補正し
新獲の二字を冠して新に梓にするは古今諸名家の履歴
得るく詳ならざるものも多く或は其地方にあつめしも他邦に聞えずして
遺脱するものもあるべし且年所は得るも撰定全備する日にいたる
まじきは恐れ多く先此上木は趣するものは采覧の君子の刪潤訂正を
俟ことなり〇原刻　本邦の書家は三筆三跡を首とし漢は二王と録せり
また画は都て雪舟古法眼を脱せるもの撰次其所を得ずその誤固陋するに
ゆえず今蒐收する所大抵東山殿時代の前後より昭代の當今に及ぶ

其人鬼録に上るものハ廣く求めて采收し漢ハ趙宋より胡清に至るを了但本邦に專らして漢が略せる所彼ハ書画譜等の書備はる事を以てなり又投化及び舶来の人ハ本邦諸名公のなかに附すれバ也に見聞に随て録すれど遺脱ハ有べし其術なり○此書書画を以て題する和歌者流儒門茶人俳諧師僧流が收録するハ其遺墨が賞すればなし○録中標するは名字稱号の義例なく世の呼なりつるものが以てせしより又名が録して字を漏し号をもつて世に稱と闕或ハ卒去年月の考よりさハあらし詳ならざるハ姑く闕之 天明七年三月刻

雅遊漫録 七巻 大枝流芳

巻之一 器物總論 書 書厨 筆 硯 附名物古硯図 墨

紙 朱錠 水滴 壓尺

巻之二 壓書 刀子 錐子 筆床 筆架 硯屏 糊斗 附若板

印章 印色池 鏤鑱 貝光 法帖 几案 書燈

筆洗 秘閣 紙箋 鳥絲欄 經攪 懶架 四覽

混波須 琹 書簾 歌袋 鏡子

巻之三 避秦 方便囊 詩囊 千里鏡 倢利 逍遙座

行厨 杖 旅行雑具 香茶酒具 花尊 石景盤

菖蒲盆 烏有先生集 沒字碑 魚磨子 廿一秘閣

如意 麈尾 扇 附扇墜 料絲屏 方枕 菊枕 足

㨾軸 畫叉 打枝 砧枕 焚掛 水石供

巻之四 錦繍譜小引 同繍紋図 同註解 同價品高下

巻之五 琴 附譜 箏 和琴 琵琶 笛 笙 篳篥

三鼓 太鼓 鶏鼓 鉦鼓 洞簫 尺八 詩歌 一字字 畫図

南京笛 附譜

巻之四 巧結 正式 二十七操 相生結 真結 貝桶 雌雄二 諸結

片結 左右二 叶結 鬼頭結 上巻結 東結 掛緒結 真宝結

艸宝結 琴袋結 六葉結 草結 長刀結 長緒結

烏頭結 花結 幕串結 鷹犬緒 四手結 翁結 麻緒結

懸緒

巻之七　投壺　貝合　歌貝　弾碁　韻塞　文字鎖
闘茶　闘草

○已上の諸伎和漢の書を引今案を附して詳しく其式を志し且
おもとのしるし図を加へ侍す○此書の作者大枝流芳隠然翁と
号す浪華の人其居を香嚴と號し青湾と云風流好事を以て世に名あり
て著すところ此書の外に青湾茶話貝盡浦の錦及ひ香の書数部
あり○宝暦乙亥十月大江都庭鐘漢字の序を附す同十三年癸未九
月上木す

貝盡浦の錦　二巻　同上

上巻　諸説　和歌浦真図　歌仙貝遺漏百餘品　住吉浦潮干図
前歌仙貝三十六品評　和名馬竹野浦真図　後歌仙貝三十六品評
源氏介配當目録　新撰六歌仙介
下巻　百介図　追補介図　前歌仙介歌合図　後歌仙介歌合図

貝盡品に九貝によせて指南　相貝経
○此書舊名介譜寛延二年三月にあり流芳か自序によく同四年正
月上木す

薫聚類抄　二巻　寂蓮法師　写本

此書寂蓮法師のあつめ給ひしところにて古代の薫物の方数百方を
のせられ製法なともくはしく甚つまひらかなり傳来とあるもの
友人江田世恭より借閲す古本にハ聚の字を集の字に作れり

六くさの記　写本　一巻

ねの小松院の御序にたきものの方をかきたまへる○のたくひまた
むくさかう　梅花　荷葉　菊花　落葉　侍従　黒方　侍従ハひとつ侍従とよし
女房たちあはせなとのありけるによりて山田の尼をもとめ
八侍従といふもの世にもいつくにもてはやされけれは袖
の香も見ゆるかたちひたり黒方ハたきものにけしひとつて八玄の
玄よりよくしたつけておくろ方とよれまきよしけれはのん

いやうくへ黒方としといへりいやうはあしあずろの字をとく
もちいられ例あればくろの字をかりて作る黒方のうくさ
ハ箱雪のはきむきしあはせしとてつくる

五月雨の記　一巻

此書ハ文明十一年五月十二日東山泉殿にて六番香合同十年十一月十六日ハ六種薫物合等の判詞并に香包の紅様折形等をあつめたり其ハ六種薫物の方法のす此六種ハ夏衣　仙人　漢舟　松風　菊花　梅葉なり○序にも折しも五月雨の比ハかなしいけのちかあやまむ[illegible]けるかなしもいとすみやかにかきもいれすこけ[illegible]ひとつ[illegible]しかしいひすてなくも[illegible]よりて五月雨の記しるせりと此序の作者いづれのかたしも名ありず扶桑拾葉集に伏見宮邦高親王とあるもあやまれり○此書写本なりきこいつくすへく実同いづも泉州堺谷忠斎奥書の中にハ壺井氏の秘なかりしをうつし大枝流芳のもとにハ大口氏の本にて写すし

ちかへり

五月雨の記考　写本　一巻　江田世恭

此書ハ後西院叡覧のため東山泉殿の諸家の名并其家の考へし所用の書ハ親長記　揚鳴暁筆　耳底記　常山文集　扶桑拾葉集等なり

雲井の春　写本　一巻

蹴鞠の書なり鞠の故実なとしるし作法封縮の図鞠見物のため袋東のあつかひなとありけり

きあしげきの記　写本　一巻

蹴鞠の記なり進遠院実隆公の作とよ

白鷹の記　写本　一巻

二条良基公の書の文なり扶桑拾葉集にも收めたり

嵯峨野物語　写本　一巻

鷹の故実などをかけり序ハ二条良基公の作としるされ扶桑

拾葉集に載られあり

犬追物語　一巻

此書ハ正保四年薩州侯武州にて始て犬追物を興行せしときハ次第を林春斎の筆記せしめたまへるものなり

本朝画伝　四巻　狩野永納

本朝上古より已来画名高き人々の伝を漢文にてあらはし巻末に掛物裱装の寸法故実等をも図し漢文にしるせり巻首に永納の自序あり

本朝書籍目録　写本　一巻　大外記業忠

俗に御室書籍目録と称す大外記業忠これを纂すといふ○巻首の目録に日本書籍惣目録とありて其部立ハ

神事　帝紀　公事　政要　格式　氏族　地理　類聚
字類　詩家　和歌　和漢　管絃　医書　陰陽　人々伝
官位　雑々　雑抄　仮名　已上二十一篇なり

○奥書云以仁和寺宮本書写之　普広院殿御尋之時注文云々○又云此抄入道大納言実冬卿為御所借賜之本也　永仁二年八月四日以某本書写之師名在判○一本此書の巻末に諸家名記一巻を附す是ハ記録の目録にして李部王記より厳記にいたるまで凡七十二部をかゝげおのおの其人の官位姓名をあらはす

日本書籍考　一巻　林道春

日本紀古事記旧事紀より近代の雑記にいたるまで百二十部の作者巻数ならびに其書の大意をあらはす羅浮子のあらはしゝ奥書あり

経典題説　一巻　同上

経書の名を挙て其書の大意を記す和書のあらざれども日本書籍考と合刻するをもつてこゝに挙

和板書籍考　十巻　五本　幸島宗意

巻之一　神書　巻之二　儒書　巻之三　武書
巻之四　史伝雑記　巻之五　医書　巻之六　諸子百家

巻之七　詩文尺牘　巻之八　和歌、巻之九　和字諸書
巻之十　字書法帖
○此書ハすゝしころ和漢の書籍慶長年中より元禄年中に至るまで本
邦にて刊行するもの数百部をのせて作者巻数大意并片仮字にてあらハせ
り元禄十五年壬午三月上木す

辨疑書目録　三巻　中村富平

巻之上　同音書目　同名書目　両名書目　古今書目　略名書目
読餘書目
巻之中　摘字書目　足利書目　落巻書目　落紙書目　本朝作
者書目　有名無出書目
巻之下　名数書目　類書書目　書写書目
○凡例に云此辨疑書目録ハ著すところ書名疑似の間多くハ混淆錯乱
しく辨別せざらんがためなり因て博く和漢の典籍を索捜して是れ
題号の同異混乱するを辨ずべきところの八条をあげて是れを辨ず只よ
書籍の児輩にいたるまでこれに因て人の求に應じて過すくなからしめん
ことを欲するのミ又凡書名を編次することハ代々をもつて前後せず
内外をもつて條列せず唯其類にて觀覧にたよりならしむ又巻首に
小出す同音書目ハたとへバ五絃碁経の類の如き同音異義或ハ五位圖
五音圖のごとき音相近くして混じやすきものゝ又文字全く同じ
きものを因て同名書目とハ立てこれを収む其中にもいハ二ミ字
加損して別ちやすきものハ谷響集と寂照堂谷響集との
如きこれなり而も今同名書中に入らず是れ世人いハ八田各称して両
書混備するの類すくなからず次に両名書目ハ一本二名或
ハ二名兼称するものを集む聚分韻略を重韻と呼の類これ
なり又古今書銘の変改せるを知らずんバいつしか太子傳備考の類
き今改めて太子傳鼓吹といへるがごときハ人をして惑ひ少からぬゆゑ
す故に古今書目の一條を立てゝ此等の書名を列ぬ又云
新板書目録に本名をかくいまゝに板行せざるものをあげ人これを知らしめんがためにす

はなはだく書店に於て求めんと欲すれども得ずいかりしより自他の煩ひ
なす故に今其一條を記くるの書目のみ　又ハ植字本足利本
落巻本落紙本書写本等を全くハこれ予が詳ならざるところは
て出るものハ脱誤多しくおよび其他の書目も諸何を失考差謬かるべき
ものあれバ同志の人これ漏たるを補ひ誤れるを正しなば幸甚し
しん〇此書片假字を以て注釋す宝永六年十一月富平漢字の
自序あり同七年庚寅上木す

書籍名数　　二巻　　中村治重

巻之上　自一部至四部　巻之中　自五部至廿部　巻之下
自廿一部至二百部

〇此書和漢書籍の標題数字を係たるものを纂たるものにて名数を
あつむ平安の書肆臨泉堂中村百川治重が著すところなり〇天明辛丑
初夏蘊古堂主人漢字の序安永甲子冬澤田東洞漢字の跋あり天
明辛丑の秋上木す

合類書籍目録大全　　十二巻

本朝にて書籍を板に鏤むる其始めは夢窓國師が仏書詩
集等を板に刻せられて其外にハ弟子妙葩が跋ありて又高師直が板行せし
佛書にハすれぞちの書が有る又角倉与市太秦にて倚に史記及謡の本を
開板せしむ近世の刻板ハ慶長の末に庭訓節用集などあしく有しが寛永
六年の比より多くなりしとぞや此合類目録にハ夢窓國師時代より明和の
頃にいたるまでの刊本かな類をわかちて遍くこれをのせとりて巻ねたる者と附す

子集　國史　神書　有職書　儒書　經書　諸子
丑集　文集　書翰書　詩集　詩話　聯句書
寅集　歴史　傳記　故事書　雑書　字書　韻書　印譜
卯集　醫書　外科書　鍼灸書
辰集　諸宗經　末書類　諸宗折経　僧傳　天台宗書　日蓮宗書
巳集　倶舎宗書　律宗書　華厳宗書　法相宗書　真言宗書
午集　禅宗書　語録類　摘字板語録類

未集　浄土宗書　一向宗書　佛書雑類　假名法語類
申集　歌書　物語類　連歌書　俳諧書　狂歌書
酉集　筆道書　石刻類　往来手本類　女筆手本類
戌集　天文暦占相書類　算法書　教訓書　女書　醫方書　茶道書
立花書　香道書　盤上書　料理書　雛形書　随筆書　小説書
亥集　地理書　圖類　謡曲糸竹書　舞書草子類　画譜　兵書　軍書

國朝書目　三巻　藤原貞幹

巻之上　正史　注并帝紀　編年　雑史　御撰書并日次御記
日次記　國字日記　紀行　政事　文書　禮儀　凶事　官位
巻之中　氏族　人傳　僧傳　天文　地理　殿舎　圖　鋪設
衣服　飲食　勸誡　故實　類聚　書目　字書　往来
陶冶　画圖　管絃　醫薬　鷹鶻　薫香　神祇上　神社舊文
神祇下　神祇雑書　佛書　佛刹舊文　雑書
巻之下　文集　總集　詩集　總集　闘詩　詩歌　詩文別集

詩文雑書　和歌　勅撰集注附　撰集注　私撰集　詩歌
千首　七百首　三百首　御製百首　五十首　二十首
二十首　十五首　十首　百廿八首　百廿首　六十四首　四十七首
三十三首　歌合　詩歌合　歌合記　不知年月歌合　菊合己下附
所々和歌　法樂　和歌集　和歌書　連歌　漢和附　物語并注

已上の書目巻數作者或ハあらしいハ闕○凡例ニ云○なにしく記せすその八本朝書籍目録に載るところ●ないしく記せするの八本朝書籍目録別録に載るところ△なにしく記せするの八今かつところ①❶△を以く記せするの八一書二部を載るもの　國史及政事禮儀ハ年世をに以て次序なせす其餘ハ國字四十七音をに以く類列す○天明丁未八月東京辻孔暇漢文の跋あり寛政三年五月刻

和漢群書作者目録　四巻　尾崎雅嘉

此書ハ古今書籍の作者なにつ見えかれ人々の著述の書目ないしく其次ゝ志る千作者の時代ハ皇國ハ元正天皇乃養老年中より寛政年中

に至るまで一千餘年が間漢土ハ漢魏より今の清朝の乾隆年中まで
およそ二千餘年が間の人々の著述の書を挙
巻之一 巻之二 皇國撰述書
上古部 養老神亀の頃より正治建仁の頃に至る
中古部 元久建永の頃より貞治應和の頃に至る
近代部 明徳應永の頃より天正文禄の頃に至る
當時部 慶長元和の頃より寛政年中に至る
巻之三 巻之四 漢土撰述書
上古部 漢文帝の時より隋煬帝の大業年中に至る
中古部 唐太宗の貞觀の頃より元文宗の至正の頃に至る
近代部 明の太祖の洪武の頃より思宗の崇禎の頃に至る
當時部 清の世祖の順治の頃より弘暦の乾隆年中に至る
○上にしるす所の歴代ことごとく作者を配當し[illegible]其人[illegible]別號を
あらはし著述の書の標題巻数をあげ[illegible]中にし唐本とのせてしるしこれ

標題のわきには圏點を附す○巻首には目録を以て作者數百人の
姓名を挙ぐ其中に神学家 儒学家 佛学家 國学家 歌学
家 連歌家 醫学家 物産家 天文家 兵学家 暦学家
雑学家 詩文家 書畫家 印刻家 小説家 俳諧家 等ことごと
く備はれり其書體の大概を左にしるす

皇國近代部の中
林道春
羅山渉獵集 百巻　羅山文集 六十巻
夕顔巻夜話 十二巻　神社考 二巻　七書鈔 四十巻　土佐日記附注 二巻
其餘数十部總計百五十餘部
物茂卿
論語徴 十巻　明律國字解 三十七巻　鈴録 二十巻
満文考 一巻　楽制篇 一巻　南留別志 五巻
總計四十餘部

山崎敬義

文會筆録 二十九巻　垂加文集 八巻　垂加文集續 五巻
大學啓蒙集 七巻　日本書紀註 十五巻　神代風葉集 九巻
總計五十餘部

釋契冲

萬葉代匠記 三十巻　古今餘材抄 二十巻　類字名所補翼抄 八巻
古語拾遺抄 二巻　漫吟集 二十巻　河社 五巻
總計二十餘部

北村季吟

湖月抄 六十巻　萬葉拾穂抄 三十巻　八代集抄 百八巻五十本
山乃井 五巻　續山の井 七巻　誹諧合 六巻
總計三十餘部

賀茂眞淵

萬葉考 二十巻　冠辭考 五巻　勢語古意 七巻
うひまなび 五巻　うひまなび 一巻　縣居歌集 一巻
總計三十餘部

漢土近代ノ部の中

王世貞

弇州四部稿正集 百四七巻　同續集 二百七巻　同別集 百巻
奕問 一巻　宛委餘編 十六巻　短長 一巻
史乘考語 十一巻　文章九命 一巻　觚不觚録 一巻
總計二十餘部

陳繼儒

寶顔堂祕笈 三十六巻　廣祕笈 八十五巻　普祕笈 十七巻
枕談 一巻　書畫金湯 一巻　羣碎録 一巻
香案牘 一巻　長者言 一巻　陳眉公十集 六十二巻
總計三十餘部

漢土當時部

康熙帝
佩文齋韻府 二百本　廣群芳譜 三十二巻　淵鑑類函 四百五十巻
全唐詩 九百巻　康熙字典 四十巻　欽定四経 百五巻
三礼義疏 百七十八巻　欽定四書文 二十巻　十五省通志 七百七十巻
總計二十餘部
李漁
笠翁一家言 六巻　閑情偶寄 六本　連城璧 十二巻
連城璧後編 四巻　十二樓 十二巻　芥子園画傳 十二巻
總計二十餘部
此例の外に和漢ともに一人一書の著述又闕名の書ハ巻末に別に目
録して類をもてこれを収む

世俗浅深秘抄 写本 二巻
上巻　上皇御幸時殿上人必不可依位階事 以下百四十六條
下巻　朝覲行幸上皇御袍色事 上下百三十六條
此外菩提院入道関白乃諺等を載
奥書ニ云右世俗浅深秘抄者以藤兼房卿自筆本不違一字書
写令一校畢　宝永第六暦仲春　兵部卿親王 京極一品宮

海人藻芥 写本 一巻　僧正宣守
此書ハ中御門中納言宣方卿の御子恵命院僧正宣守乃作にして
雑々の故実などをしるしたり○年山打聞に強飯姫飯の事をいふ
に此書を引て曰公家御膳飯者強飯也執柄家等如此姫飯ハ全
略儀也但人に依好悪用之強飯時ハ飯湯也而近代姫飯時ても
ゆをのませする召不叶理也云々

閑居友 写本 二巻
本朝書籍目録に此書を慈鎮の作とす按ずるに年山打聞に
曰奥州のふるまいちに閑居の友とい書も慈鎮の作といえは披きみれ
ハ入宋のことの見えたれは松尾證月房慶政上人作となれは此僧ぞ
隆への餞別の歌なとも入宋ばされ又明恵上人とも交りし人

明恵作ハ又末の集ニ入て了僧也道心者ニて長嘯子こゝろこしもかれハさして知れもしと詠出しも閑居の友より出けんとこ

語園　二巻　一條兼良公

漢土乃故事を諸書より採出してくハしく譯したり巻末に桃華老人撰とあり桃華老人ハ兼良公乃別号なり
寛永四年刻

新語園　十巻　了意

兼良公乃語園にならひ漢土の故事を片假字にてあらハせり

本朝語園　十巻

此書作者いまだつまびらかならずされど兼良公の語園になぞらへて本朝の故事を諸書より抄出しこれを俗耳に入やすく譯せられし也巻頭に部類の名を記しておのおの其部をわかてり
巻之一　天地　時令　帝王　官姓　巻之二　人臣　孝子
巻之三　和歌　巻之四　詩文　才智
巻之五　法令　書籍　書畫　雜藝
巻之六　武勇　逆臣　強力　巻之七　陰陽　占相
管絃　雑事　隠逸　巻之八　好色　無常　託宣
巻之九　飛仙　釋文　巻之十　天地　神祇　神感
祭祀　崇咎　怪異　妖霊　獸蟲　草木　器物
毎條の下に兼良公の語園をひきて引書の名をあらハせり○宝永三年正月孤山居士の序あり同年二月上木す

簠簋　二巻

一名金烏玉兎集といふ安部晴明の作といひ傳てれど真偽詳ならず陰陽家の書にして宅相のことなどを記しあり此書の末書十餘部あり

皇和通暦　三巻　中根元桂

多田義俊がいはく日本古来暦学くはしからず故に干支も何ぞ遠き古よりは末代の学者むかしの事を考へてつくれる今の暦をもとし

正しく記する故に古本と干支ちがへるありされども此
録と合せて用ゆべきものならず中根氏作の皇和通暦より此三巻
印板にありて古来の人ハ記録をもちて干支をはかり山槐記など作
る日本の古史を考へしめしより皇和通暦を以てくらべてしるべし

暦林問答集　三巻　賀茂在方

天文日時旺相吉凶等の事を記せり在方ハ應永年中の作なり
在方ハ賀茂保憲が末孫にして安部晴明が師也といへり

塵劫記　一巻

此書ハ書籍目録に吉田七兵衛作とのせり按ずるに申斎の反古攫
にいはく和漢合運塵劫記ハ山城嵯峨の住吉田光由の作なりとあり

古来葬喪記　写本　二巻

多田義俊がしるす古来葬喪記ハかの書二巻ありて是天武天皇
の時代よりはじまる作者不知貞観式によりて延喜式の中
にもある八葬喪記をもらしてのせて四巻の内二巻なしへしと云

残りて江州生田社に相伝のとしかるに四禮雜記よりハ元僧葬
祭の儀式をのするに葬喪記生田の社にありけるにうつして
門人杉崎氏によりて一冊とし別に一本駿河吉原の或人の蔵本にあり
かくいふ○按ずるに本居宣長橘経亮などいへる人葬喪記と
いふ書のありしもしらずよし只その書をばその世にしるしたる人のあり
より作れるとのありかにかくなしさらにそのさとをしらずいふへし
云々

掌中暦　写本　四巻

此書ハ仁和寺書目にありて作者しるさず種々のこと書あつめ
本朝高名の能筆嵯峨天皇より後光嚴院にいたるまで二十九人を挙
光明皇后古今女筆比類なし　菅家　聖跡と称すなどいへるを
のせたり

関城書　写本　一巻　北畠親房卿

親房卿関の城より結城親朝に贈られし書翰也○奥書にいはく右一書ハ准后御

親房卿白川結城親朝に贈られしところ也 自筆の写しなり 其忠義の
実此にて以てしるべきものなり 又其書の裏書 興國元年已卯よ
り同じき五年癸未に至る五年の間 関東宮方の合戦略その
事跡を記せられしも実録といふべきなり ○一本此奥書の次に北
畠家の系図をかゝげ次に延元々年九月宗良親王なしびよそ良親
王の御船遠江國白羽の湊につき給ひし時 宗良親王のよませたまへる
よりはじめて弘和元年十二月入道親王 宗良 新葉和歌集を撰
しく奏覧ありやがて勅撰になずらへられしまでをたなひらかにそのさ
せられし所のすべて其文の奥書にいふ 應永二十四年丁未初春 栄
門聡誉判 又宝永二乙酉十二月 平野信景の奥書にいふ 右一書何の
書なるを知らず 蠹蟲 旧記の残篇かとおもへども 附會の遺言に
あらず故に謹でこれを写し以て家乗に備ふるもの也 ○櫻雲
記に曰 興國二年 北京康永二年 北畠親房関の城の援兵を請ふといへども今に
至て果さず武家方日に増く急に攻城殆危し こゝに至て救の兵

を議んと欲し白川結城大蔵少輔親朝へ送て曰云〻

七武論 一巻 林春齋

弘文院林氏の作にて 假に七子乃名を設けて古将師清盛頼朝
尊氏信長秀吉今代湯武の武を用ひらし備をいひしをせしま
羅山の賛を附す

仲國秘傳集 写本 八巻 一本

此書ハ才づく馬乃あつかひやし馬の病をなほしくすり薬方などのるを
しるせり

百問答 写本 十八巻 一本

巻首に安國寺心百問答としるせり安國と見心と馬の病のる
問答す 問答なり巻末に仲國の判あり

翁問答 二巻 六本

江州の隠士中井與右衛門の作なり宗意の書籍考にいふ中井氏死
後二三年を経て慶安三年の頃中井氏の門人校正して板行す

校正本の序にハ中井氏豫州諸士の為に作られしよし編者の自序にハひとりの老翁と體究よりて学者との向合の書なりとみえ翁の向合と号するよしいへり永禄年中江州佐々木氏の家臣三上大学秀氏翁向合の作者の君へ献ずるよしいへりともあれ中井氏其書の題号を用ひ新意をくはへてあらはさるゝにこそ中井氏ハ王陽明の新学を講明せし儒者なり其事本朝孝子傳にのせられたり

點例　一巻　貝原篤信

経史の書をよむに點付なくしてかなはざるその例を今の例しるしおきたまへり

和讀要領　三巻　太宰純

初学のともがら漢土の書をよむ捷径をしめさんとて朱引の法のいやしきを正し和點のけぢめ古詩十九首をあげてこれを明せり

本朝學原　一巻　松下見林

春其主の自序なり

和漢名数　一巻

本朝に漢土の学向の傳はりしよりこのかた呉音漢音のよみ和訓の主意等のくはしきまでを論ぜし此書の注釋浪華抄五巻なり

天文地理等の部類をわかちて一二三より百千にいたるまで名数にかゝるものをも和漢にわたりてこれをあつむ巻末に聖堂奉献の書籍の目録をかゝげ外題の筆者をしるす

増補和漢名数　二巻　貝原篤信

元禄二年の春篤信の自序にいはく王應麟が小学紺珠張美和が群書拾唾の例にならひて本邦の典故人物事跡を併せ録しくはしく名数にかゝりしことのすべてあつむと

續和漢名数　三巻　同上

天文　節序　地理　人紀　人事　神祇　歴世　形體
器服　経籍　官職　數量　醫家　佛家　動植

さきの名数に遺漏せるところを拾ひて序中にしるせり門類をとゝろ

〻のおほくし　元禄五年正月竹洞野節の序あり　同八年四月上木す

新撰菟玖波集　二十巻十本　宗祇法師

巻之一より巻之六に至るまで　四季連歌　巻之七　神祇
巻之八　釈教　巻之九十　恋上下　巻之十一より巻之十六に至るまで
雑　巻之十七　羇旅　巻之十八　賀　巻之十九　連句
連歌　雑句　巻之二十　発句
仮名真名の両序二条良基公の作也○奥書云菟玖波集可被准
勅撰之由有御存知之由　天気所候也云々　延文二年後七月十一日
左中弁時光　謹上　刑部卿殿　追申　依武家奏聞如此御
沙汰也云々○巻末に作者数十人の爵里を附す○或書云桜井基佐
は洛陽の人剃髪して水仙と号す連歌をよくせり宗祇宗長同時の
人なり宗祇新菟玖波集を撰せしに基佐の句を入られず
これを憤りて中たしくなりて宗祇の句を嘲哢することを
書しとぞ

逢見筑波銭便入　不論上手与下手
右かくのごとくの句を書つけしもの和歌のことは達者なれども
○此書はもと集と名づくることは人王十二代景行天皇の御子
日本武尊東夷をうちたまひて甲斐の国にて宿りたまひて酒
折といふところにて供御をまいらする日のくれしに火焼にし
てまゐりけるを
「にひばりつくはをすぎていくよかねつる　とよみ給ひければ火ともし
ける人かゝなべて夜にはこゝの夜日には十日をとつけたりこれ連歌のはじ
めとしこれよりして後世に連歌のみちをつくばのみちといふの
ものなり○さて菟玖波集一巻とあり因て此書を新撰と称す

犬筑波集　一巻　山崎宗鑑

宗祇法師の筑波集に擬して俳諧の連歌をあつめたり

新犬筑波集　十巻　北村季吟

宗祇の筑波集の書体によりて宗鑑の犬筑波になしつくりたりけね

く俳諧の連歌をあつむ季吟の自序あり

筑波問答 写本　一巻　二条良基公

奥書にいはく此一帖者自問自答後福光園院摂政御作也云々
御奥書者應安第五十二月也云々○良基公の自序あり扶桑
拾葉集にものせられたり

連歌新式　一巻 二本

後光厳院應安年中二條良基公救済周阿と相議し連歌古
来の式を刪潤せしむる追加も良基公の作なり新式今案ハ後花
園院享徳年中に一條禅閤兼良公宗砌と心を同くし新式
なしびの両度の追加にいれたるを増補せしめたる後柏原
院の文亀年中に夢菴肖柏逍遙院殿に談合して宗砌より
宗祇にいたるまでの諸名匠の説をひろげ雑歌の式をさだめて新
式完備すといふ

魚言抄　二巻 三本　木食上人應其

此書連歌式目の濫觴いろはの詞四季の詞季によらざる詞等を
あつめたり木食上人應其慶長のはじめの作也應其慶長三
年に行年六十二也天正元年より十二年木食して寺社を修造
すること八十所高野山に住すること二十五年なりとぞ○此書一本角倉
氏の蔵板にして光悦の筆跡をもつて刻す嵯峨本と称するものなり
○木食上人の跋にいふ此上下巻ハ天正七年よりつゞりはじめけれども誤
同十四年孟冬此比式目案を紹巴法師の披見に入しやすきの文を引
て再三校合をとげ煩重をけづり用捨の旨をとくあらはしたりなほ風
雅ハ木食草衣の器にあらずといふべけれども十余年の蘊奥のすこしうす
らし　南山乞食沙門○慶長三年大覚寺宮空性親王の奥書云
此魚言抄之作意者雖奥書在之不慮被成叡覧御感不斜故
写留之任勅定染筆者也○法眼紹巴奥書云此魚言抄之外題者
被染勅筆再大覚寺殿二品親王奥書也一覧之次上人依所望記之畢
慶長四年神無月上旬○又奥書云以木食興山上人自筆之本奉

校合於高野山刊之墨付以上三百四十五丁　慶長十五庚戌年七月日
○已上嵯峨本といふこれなり又この本上下四巻あり

戀子生抄　一巻　遊佐好生

戀子八字書に一亂西子也と傳せり此書巻首に吳彦吳邢が附すと
いつしく一度によみなよのよそにもしみやされぬるものとれよの
うちのかろくらりとるをる撰すえ禄十五年作者の遊佐次郎左
衛門好生のいはしるすむしく和漢の例を引くこれを證す好生の
自殺せえ奥州の邊土に入れたるし戀子生するものあまたありて又母親族
もそかたき恥しいくいかなる人きこえれば聞て六畜獣のごとく
おもひ禽獣よりハまなよ何ぞ劣るからむかれども人ハ一人のいのちもあるん
のみならず此よけしからずよりきくるに父母の人々もかなしきにたえ
なれも一日もよく此書をなし板にほりて世にあらはさしめんことを
ねがひ侍れども金財ともしければ力をおよばずして今年五年をさ
經ぬ今近江のいのちから所領よりえ子細しるせるもの也
いつもすみやかにあえてあらはし和漢へとつのたるもの世にしるして其の傳を
ある人侍るに板行して朋友にすすめあつかれども是等にて仁術なるしひ
ろくことをひとつなりしてうれ工夫にあらぬ　享保二年九月十五日
○按ずるに遊佐好生木齋と号す山崎闇齋の門人なり室鳩巣神道
を議する書を木齋に贈る木齋答書を作てこれを辨ず其を神儒
問答と号して世に傳ふ

農業全書　十一巻

筑州後學宮崎安貞編録　貝原楽軒刪補○楽軒ハ篤信の兄なり
巻之一　農事總論　巻之二　五穀類　巻之三　菜類
巻之四　同上　巻之五　山野菜類　巻之六　三草類
巻之七　四木類　巻之八　果木類　巻之九　諸木類
巻之十　生類養法　巻之十一　附録
○元禄丙子の年貝原篤信の序○同年貝原好古の序○同年仲冬
宮崎安貞の假字序等あり○巻首に佐々宗淳の尺牘次に凡例あり

マ○此書著述の時篤信いまだ弱にてまだ稿を脱せられざりし
を宮崎安貞よりかへし農書をくはしく書ゆへ、これ
が為篤信の兄楽軒まさかる所行の稿本を删補して農書に加へり
よりて篤信附録一巻を作て加ふ

菜譜　三巻　貝原篤信

上巻　序　総論　園菜上　十七種　蘿蔔より番椒に至る
中巻　園菜下　二十六種　萵苣より鶏冠花苗に至る　蓏菜　十二種　茄より
絲瓜に至る
下巻　用根菜類　九種　牛蒡より薑に至る　穀類　十種　豇豆より胡麻
に至る　野菜　十二種　山薬より蘘荷に至　水菜　十種　慈姑より蒲蓿に至
海菜　十八種　稚布より於期に至る　菌類　十五種　香蕈より石耳に至る
木類　八種　枸杞より橘皮に至る
○此書うつすところの菜類すべて食品に充べきものゝみをしるしぬ、宝永元
年春との日篤信仮字の自序あり、正徳四年上木す

地錦抄　二十巻
増補地錦抄　八巻
巻之一　牡丹　芍薬　巻之二　椿　茶山花　巻之三　つゝじ
さつき　梅　桃　海棠　桜　巻之四　楓　巻之五　藤　桂
柑類　松　竹笹　冬木　實色付類　巻之六　草花春部
同夏部　百合草　水草　巻之七　草花秋部　菊類
葉見事なる草　冬草　巻之八　草木を植る土の品々　土地見様
植木遠国持様　同植替時分　植作様いろは分
○宝永寅孟春三之角軒花隣序　宝永七年刻
廣益地錦抄　八巻
巻之一　花木類　二十八種色付　花形の図　椿二十二種花形図
茶山花三十種　花形の図　巻之二　草花類　二十八種　花形図
色付　巻之三　後出歌仙紅葉　三十六種　葉形繪図
巻之四　薬草類　五十六種　花葉の図　色付　巻之五　同五十七種

花葉の図 色付 巻之六 同三十四種 花形図并色付 巻之七
同上 四十五種 花形図并色付 巻之八 花木類 草花類
三十九種 花形色付 ○享保己亥花月 武陽染井野夫自序同年刻
地錦抄附録 四巻
巻之一 草花類四十六種 花形図 色付 巻之二 同五十二種
花形の図 いろは松本草 四十八種 花形色付 巻之三 花木類
十八種 花形図 色付 草木異国より渡りし年記 巻之四
楓類 歌仙追加 二十八種 葉形の図色付 已上共計二十五巻
東都染井の農夫伊兵衛著并に自画

櫻品 一巻 松岡玄達

怡顔斎松岡玄達の[illegible]芳田純永見聞するところを
補ふ 彼岸櫻より不断櫻に至るまで櫻の品類六十九種をあげ[illegible]
花葉の形色開落の時候等をしるし[illegible]その図を附
す○凡例にいふ日本六十餘州に移栽するものは山城大和河内
和泉摂津の五ヶ国にて多し今此書に載る品類のほか名所の
櫻は後編に残す[illegible]古今一品にして[illegible]名木の櫻[illegible]
[illegible]鎌倉の桐ヶ谷津國伊勢寺の櫻これら諸家に[illegible]
廣まりて一品となり世人これを賞す故に[illegible]世にあるを
もちて[illegible]除く津國金龍寺洛東地主櫻西山西行
櫻或ハ鞍馬の滝櫻の[illegible]外地名により古歌によりて名を
[illegible]家櫻[illegible]櫻雲井櫻これら[illegible]挙て[illegible]
[illegible]附す○凡例の前に那波道圓の櫻譜の漢字の
序あり○次に林道春の随筆の説 山崎闇斎の櫻辨 假字 芳田純永
の櫻花辞 同 を附す○巻首に純永の假字序 甲賀敬元の漢字の序
玄達の漢字の自序等あり○巻尾に宝暦丁丑夏五月男松典漢字の
跋あり○自序にいふ洛陽の牡丹西蜀の海棠日本の櫻花単に花と称
して[illegible]人[illegible]牡丹[illegible]海棠[illegible]人
の[illegible]貴重せし[illegible]古人仿屋刺を以て漢土の櫻桃を

梅

ることの八蓋すでに誤まり櫻桃ハ是郁李の属にしてさくらとハ絶て別
なり殊にあらず我邦のさくらハすなはち垂絲海棠なることと前輩
櫻花を品評するもの皆二物の異なることを知らずみだりに荊公景濂が
詩など引て以てこれを證す何ぞ攷索の疎謬なるや夫王宋の二氏ハ皆
我邦のさくらを知らずただ人の語傳に因て其名を聞みだりに寄題す
るのミ何ぞ以て證とするにたらんやもししひて詩によらバ山櫻抱石
映松枝といふものすなはちこれ櫻桃の別種すでにさくらにあらず遠きの
聚せずして以て山中の椿ともするハ誤なり又いはゆる糸櫻を以て
垂絲海棠に充るも亦偏なり垂絲ハこれさくらの總称にてしだり糸
櫻と指ていはずこれが譜中すでにこれを詳にすれバ復ここに贅せずと
○宝暦八年正月上木す

品　二巻　同上

怡顔斎松岡玄達著　門人　甲賀敬元尚之　今枝栄済子済　男典
子勅　仝校　巻之上　白梅類　早梅より海棠梅まで　二十九種

巻之下　紅梅類　鴛鴦梅より縮緬紅梅まで　二十五種
雑色類　黄梅より墨梅に至六種　冐梅類　有名未識類
有梅名非品類　○巻首に甲賀敬元漢字の序あり巻尾に宝暦
八年八月男典漢字の跋あり宝暦十年庚辰八月上木す○按ずるに
怡顔斎著書の中これに類するもの蘭品二巻　介品二巻　廣参
品一巻あり共に刊行す

春

草　二巻　伊勢貞丈

此書ハこれをもて武家の礼法を定めたるものなりし俗間にあや
まりおほきをただすがために記す甚つまびらかなり秋草とも云伊勢
流にてハ秘家のものとしてアるよしを教ゆるハ室町殿の古礼を
祖述すといふ

巻之上　弓矢の始　弓の本地の事　神代弓矢の事　重籐弓の事　ぬた
ごめ矢の事　弓矢寸尺の事　弓の名所の事　蟇目の事　ぬためのこと
水破兵破の事　調度懸の事　等第一條より第五十條に至る

巻之下　うつぼの事　柳籙の事　鞆の事　靫の事　弦袋の事
野矢の事　的の始の事　まきわらまとの事　三的の事　笠掛の事
犬追物始の事　犬追物偽書の事　おもてにしるす両家分別の事　末
第五十一條より第百條に至る　追加にしるしあらためたてつの事

夏　草　写本　一巻　同上

歩射部　十二條　騎射部　十三條　追加一條

秋　草　写本　三巻　同上

巻之上　武家禮法部　七條　人家称呼部　十四條　人體部
廿三條　役名部　十一條
巻之中　官位部　九條　衣服部　四十條　刀劔部　九條
家作部　五條
巻之下　酒食部　十四條　道具部　九條　進物部　八條
祝儀部　九條　凶事部　四條　雑事部　六條
○雑事部まで武家の故実の書世にほどこしたまへり　これは近世の人の妄作

たる偽書なり皆古今にわたるものなり　扶桑見聞私記　藤九郎盛長誌
閲集　犬追物秘記これらも偽作妄説なり　又桂秋斎が書にいはく武門
故実百箇條同作　駁馬故実の類武門の事どもにして妄りにして
たるものとして書に飛鳥井雅綱の奥書ありて偽書し同名にてひら
かなにて書たるものあり　これは實記なり又室町記といふもの　これも真名にて
て書たりこれも実録なり近世偽書多くなりたり古書多くみたる眼
ふるしすれども偽あるたづねもし博く古書を覧るべきなし古代
の中にても其時代くくの風俗にしたがひて其時代くくの文作あり偽書を
作る人はこれを知らずして今の風俗今の詞今の文作を以てかき
いれば年号人名引書の時代前後の取違ひありこれをしらずして
偽作はあしきものなりやすし偽書を作るほどの人は必ず智恵浅き
ものなりしかるに今の世はすでにかやうのものはなはだ多しされば
なかいまじめ侍りしもの○奥書まで右一冊は今世武家の常に用
ひられたるものなり故実を考へよくしく採らるべし一説によれば

なりは秋の日に書はじめたれバかく秋草と名付られけり 安永二

年丁酉九月廿日 伊勢貞丈花押

冬々草 写本 一巻 同上

空穂考 飾剱考 甲冑名考 洗革鎧考 弓材考 鞍鐙七

道具考 武士学文問答等十二條○此四部ハ合せて四季草と称す

菅像辨 写本 一巻 同上

此書巻首の文に云北野の天神の自画の像とて世に多く流布するハ□装束

をつけたる絵の体面相いかめしく怒のさまをなしたれば

よく黒袍を着せしめ肩臂のはりたるに稜たち其外おほしめしたるやうに

て強装束しみゆ貞丈按するに右のことく画きたるにはあらず自

画にはあらずはの人の画きたるなるの画像を貴くせんがために菅丞

相の自画といひ傳へたるものなるべし今左にあらず趣を考へてその自

画にあらざる事をしるせり

菅丞相のかく我像を画きたまふ事はなきと見へたり

天神の面相を憤怒のさまに画きたるは誤なり

天神の装束を強装束に画くはあしきなり 菅公の像袍のさしぬき

袍のそでのなり 袍の袖長のなり 裾の長さのなり 冠のなり 平緒の

太刀のなり 表袴のなり 笏のなり 沓のなり 菅丞相面体のなり

渡唐天神の像のなり 菅家の像天神の像とは異なり

安永九年庚子十月廿六日 灯下に書畢ぬ 伊勢平蔵貞丈述しるせり

本朝事始 写本 二巻 一本

巻首に 萍給事法官信西撰とあれどもそれは漢字にてしるす

巻之上 皇居 温明殿 神宮 寺 院 堂 庫蔵 鳥居

學校 折桂法 蹴鞠 圍碁 象戯 巫祝 封域 二十二社

内侍所番神方角之主位 職事進勤之法 揚名聞國之官

巻之下 冠 烏帽子 禮服 禮冠 衣袍 狩衣 舞楽

狭流楽 儡子 楽器 和琴 大篳篥 笛 振拍子 榊人

櫻人 甲冑 甲 楯 鉏 鍬 暦

奥書にいはく本朝事始二巻信西入道之家記也尊其書法倣江平之二
家尤袖珍之秘記　建武二年乙亥正月下浣日　中散大夫橘季茂書
写　又云本朝事始二巻依梶井御門主之本傳写焉右有職之一助
也　天正三年十月廿五日　従四位上中原師冨　○按するに貝原
好古の和事始にいはく本邦にハ入書目は老の日本事始といへるあり
のせたり今世民間に少納言入道信西の作なりといひ伝へてこれをうつ
冊子十葉ばかりにすぎずいはゆる無稽の説なり後人の偽作なるべし述
されこれ則此ものはいつかなり

将

将碁駒之記　写本　一巻　水無瀬兼成

将棊馬の銘の事筆法に堪たる人これはもとより水無瀬兼成は田中子
なし高倉永家の子親具は養子とすは兼成実子にて氏成と
号すらは後に親具家督は辞し剃髪して一斎と号す子能
書の名にて豊臣秀次公に斎おしてく将棊馬の銘紙にしむる
水無瀬家馬の銘は書すと云なりといふ

詩

詩仙堂志　四巻　三橘成烈

城州一乗寺村にて石川丈山翁の遺跡の詩仙堂にその堂に蔵せし
ところの器物の図詩仙の額の図像ならびに丈山翁楷の小川のそ
ゑび扁額の拓碑銘等を摸写してこれを刻す○寛政庚戌
孟夏文章博士菅原為徳序○同九年七月柴邦彦序にて○又明
和七年仲春冷泉為村のよませたる五首の和歌は巻首にのせ
たり寛政九年上木す

圓

圓珠経　写本　二巻

本邦にて伝ひたる論語の注なり論語は余は陸徳明より
にハ鄭玄が疏に曰仲弓子游等撰定す論は論なり此書以て世務を経
綸すべきなりの故に論なりといふ圓転してきはまりなし故に
輪なりといふ万理を蘊含す故に理なりといひ篇章序あり故に次也と
いふこれによりて名づけたるなり○平維章がいはく余は陸徳上下二巻
は何日安の集解にしたがふもかの明経博士の註にて小口書

も圓珠経としるし三百年以前の書なれバいとめづらしきもの
なりしかし明経道の人々ハ論語を圓珠経といひならはせしなり
此書或人の家にありて伝へしが ○按ずるに本朝文粋巻之九 夏日右
親衛源将軍に陪して初めて論語を読むといふ一字を題とす
源順が文にいはく康保三年夏右親衛源将軍招翰林藤学士初
読魯論語 時人以為不恥下問能守宣王之遺訓焉 何則俗
人未必賢 未知以為論語者幼学之書也 不悟於晩学不知其先
聖微言圓通如明珠之義矣 云々 この文をみるに八百年およそ御代
と云珠経なと称せしなるべし ○又按ずるに令義解巻第三に
曰凡経周易尚書周禮儀禮礼記毛詩春秋左氏伝各為一経 孝
経論語学者兼習之 又曰凡教授正業周易鄭玄王弼注 尚
書孔安国鄭玄注 三禮毛詩鄭玄注 左伝服虔杜預注 孝経
孔安国鄭玄注 論語鄭玄何晏注 云々 此令の文をもつて 経書の古
注どものはやく本朝にわたりしことを今にてもしるべし 漢土

ことに宋以来新注のみ世に行はれ経の本来の義をうしなへめ
てありしに北畠玄恵法印なりし一條禅閣兼良公の父素往来に
云へる玄恵法印下野獨清軒健叟と号す 後醍醐帝の時の人なり
まづ南朝より以前は何事も古注をもちひてよみしりしかの
かも多く八巻軸なり 金澤文庫の内に左傳の巻本三十巻ありしを
中原師光が跋あり 東見記に見えたり

命世才　六巻

趙註孟子の古本なり 史記に命世之宏才なりといへるによりてかくこれ
ごく外題をつけたり 此本いまだ板本ならずしてしるべくもあらずかつ
けり 孟子の本朝に伝はりしは何の比よりかありしか 字
治悪左府頼長公の台記に永治元年に孟子十四巻をよみしひに孟子
音義二巻を学ばしたりとあり 永治元年ハ今をさる事六百年余りと
○老人雑話に老人が若年の時洛中に四書の素読をしゆる人なし 公家の
中に其よみありし三部ありしも孟子に至ては知る人なしとき

ちかく行はるゝを見し事実ハさだかならず 此説人より出ハ江村専斎
のはなし 永禄八年に生れ寛文四年に百歳にて卒したる人なれバ
かの時にハ大かたハ天正の比なれバ しかもむかしより論語孟子等の書
を多くハ用ひつるにもあらざりしハ これにて知るべし さて読書する
よろしく不秘の人も赤深行令世才なり 標題をも出して学ぶにハあらで
しかもの事也しハ又足利なの東坡詩集の外題に穫内翰としるし
白氏文集に白紙とも書しなども見え 又詩經の毛傳を毛イ傳と称し
鄭箋を鄭ケ傳と称せしハ中昔の公卿の謬なり 道春の口語にイハ傳
の字の偏ケハ箋の字の冠なりといへり

群書類従目録

群書類従　五百三十巻　六百三十六本

江都の塙検校保己一これをはじめて蔵刻とす 此書漢土の叢書の類にして 皇國古今小冊の書一千二百七十三種をあつめ合せたる ハ八分ちかく六百三十五冊とし目録一巻を附す 其類をわかつ左のごとし

神祇部 七十種　帝王部 三十六種　補任部 二十七種　系譜部 二十種　傳部 二十一種
官職部 八種　律令部 六種　公事部 五十五種　装束部 二十二種　文筆部 三十四種
消息部 二十一種　和歌部 四百十種　連歌部 九種　物語部 二十種　日記部 八種
紀行部 三十九種　管絃部 二十二種　蹴鞠部 八種　鷹部 十種　遊戯部 十七種
飲食部 十三種　合戦部 六十二種　武家部 七十七種　釋家部 七十九種　雑部 百七十八種

巻第一より巻第二十八に至る　神祇部　二十八巻

皇太神宮儀式帳　止由氣宮儀式帳　太神宮諸雑事記　神宮雑例集
太神宮例文　内宮長暦送官符　外宮嘉禄山口祭記　貞和御飾記

内宮假殿遷宮記　治承公卿勅使記　宝應公卿勅使參宮次第　神鳳抄
古老口實傳　詔刀師沙汰文　高宮假殿遷宮記　小朝熊神鏡沙汰文
八幡愚童訓　石清水宮畧縁起　宮寺縁事抄　明徳放生會記
宗清法印立願文　後伏見院御願書　賀茂皇太神宮記　賀茂雜記
賀茂祭繪詞　後伏見院御願書　春日驗記　春日社記
春日小社記　春日神木入洛記　榊葉日記　大三輪神三社鎮座次第
大和神社注進状　廣瀬社縁起　日吉社神道秘密記　日吉神輿入洛記
北野古縁起　同假字縁起　両聖記　菅神授衣記
天満宮託宣記　菅家御傳記　最鎮記文　梅城録
廿二社本縁　廿二社注式　豊秋津島卜定記　大日本國一宮社名記
神名帳頭注　尾張國神名帳　伊豆國神階帳　上野國神名帳
藤森社縁起　熱田宮寛平縁起　荏柄天神縁起　宇都宮大明神奇瑞記
竹生島縁起　走湯山縁起　箱根山縁起　松浦宮本縁
造殿儀式　八幡御幸次第　平野行幸次第　神馬引付

太神宮参詣記　八幡社参記　春日社参記　日本紀竟宴和歌
太神宮二所神祇百首　雲州樋河上天淵記
巻第二十九至巻第四十三　帝王部　十五巻
神皇正統記　續神皇正統記　椿葉記　皇代記
皇年代畧記　践祚部類抄　天祚礼祀職掌録　本朝世紀 残篇
庭槐抄　皇帝紀抄　六代勝事記　五代帝王物語
日吉叡山行幸記　元徳舞御覧記　書寫山行幸記　花御所行幸記
北山殿行幸記　同宴名記　室町殿行幸記　同
永徳以下行幸勘例　聚楽第行幸記　天正廿年行幸行列　御幸始部類記
後光厳院御幸始記　天治高野行幸記　天承両院熊野御詣記　寛元加茂御幸記
建長加茂御幸記　文應石清水臨幸記　弘長両院石清水宮御参籠記
弘安石清水御幸記　延慶八幡御幸記　文永亀山殿御幸記　貞和天龍寺臨幸私記
應永御幸記
巻第四十四至巻第五十九　補任部　十六巻

齋宮記　齋院記　攝関補任次第　辨官補任
職事補任　藏人補任　樂所補任　將軍執権次第
足利家官位記　関東評定傳　若狭守護職次第　同令當名頭主次第
類聚大補任　豐受宮祢宜補任　熊野山別當次第　鶴岡社務職次第
同御殿司職次第　同執行職次第　同學頭職次第　同執事職次第
僧綱補任　僧官補任　護持僧次第　東大寺別當次第
天台座主記　東寺長者補任　仁和寺諸院家記

巻第六十至巻第六十三　系譜部　四巻

皇胤紹運録　諸門跡譜　坊官系図　中臣氏系図
大中臣氏系図　菅原氏系図　大江氏系図　橘氏系図
紀氏系図　小野氏系図　高階氏系図　清原氏系図
中原氏系図　小槻氏系図　和氣氏系図　丹波氏系図
安部氏系図　加茂氏系図　豐原氏系図　巨勢氏系図

巻第六十四至巻第六十九　傳部　六巻

上宮聖徳法王帝説　太子傳補闕記　大職冠傳　武智麻呂傳
和氣清麻呂傳　田村丸傳記　白箸翁傳　女院小傳
三十六人歌仙傳　中古歌仙傳　日本往生極樂記　續本朝往生傳
仁和寺御傳　名匠畧傳　鑑真大東征傳　相應和尚傳
慈惠大僧正傳　道場法師傳　性空上人傳　婆羅門僧正碑文
興正菩薩傳

巻第七十至巻第七十四　官職部　五巻

官職秘抄　職原抄　百寮訓要抄　百寮和歌
官職難儀　女房官品　任官勘例　任太政大臣記

巻第七十五至巻第七十八　律令部　四巻

律　律裏書　金玉掌中抄　裁判至要抄
疏 残編
法曹至要抄　令後成恩寺殿御抄

巻第七十九至巻第百十一　公事部　三十五巻

内裏式　新儀式　本朝月令　雲図抄

九條殿年中行事　小野宮年中行事　建武年中行事　年中行事秘抄
年中行事歌合　神祇官年中行事　東宮年中行事　三節會次第
釋奠次第　建久五節記　綾小路俊量卿記　朔旦冬至部類記
後鳥羽院御践作次第　後三條院御即位記　正親町院御即位記
永仁御即位用途記　文安御即位調度図　御禊行幸節下次第　延慶御禊行幸記
大嘗會御禊部類　康治大嘗會記　正安大嘗會記　永和大嘗會記
永享大嘗會記　大嘗會延引勘例　長元大嘗會御屏風本文
御譲位部類記　寛元御譲位記　永徳御譲位記　天皇御元服部類記
天皇冠礼部類記　主上御元服上壽作法抄　立坊部類記
東宮御書始部類記　上卿故実　作法故実　四節八座抄
参議要抄　羽林要秘抄　新任辨官抄　結政初参記
貫首秘抄　蓬莱抄　夕拝至要抄　柱史抄
内局柱礎抄　清獬眼抄　除秘抄　蟬冕翼抄
保元四年大間　江家次第抄

巻第百十二至巻第百二十一　装束部　十巻

雅亮装束抄　助無智秘抄　餝抄　後照念院殿装束抄
唯心院殿装束抄　逍遥院殿装束抄　次将装束抄　三條家装束抄
鳫衣抄　布衣記　永緺装束抄　装束雑事抄
物具装束抄　衛府具抄　深窓秘抄　撰塵装束抄
袷帷子着用時節　装束寸法抄　装束裁縫秘抄　女官餝抄
御禊行幸服色部類　諸鞍日記

巻第百二十二至巻第百三十七　文筆部　十六巻

懐風藻　凌雲集　文華秀麗集　経國集残篇
扶桑集残篇　本朝麗藻　無題詩集　都氏文集残篇
田氏家集　菅家後集　江吏部集　法性寺殿御集
雑言奉和　粟田左府尚歯會詩　賦光源氏物語詩　天徳闘詩行事略記
應和善秀才宅詩合　永承侍臣詩合　天喜殿上詩合　資実長兼百番詩合
泥之草　續千字文　冨士山記　康和三年孤媚記

銅雀研記　匡房卿暮年記　遊女記　傀儡記
浦島子傳　續浦島子傳　玉造小町壮衰書　新猿楽記
作文大體　童蒙誦韻
巻第百三十八至巻第百四十五　消息部　八巻
雲州消息　貴嶺問答　十二月往来　新十二月往来
異制庭訓往来　遊学往来　尺素往来　釋氏往来
山密往来　後花園院御消息　西行上人消息　定家卿消息 亦毎月抄
越部禪尼消息　東野州消息　東素山消息　消息耳底抄
書札禮　今川了俊書札抄　大舘常興書札抄　書札作法
女房筆法
巻第百四十六至巻第三百二　和歌部　百五十七巻
拾遺和歌抄　後葉和歌抄　續詞花和歌集　玄玉和歌集
現存和歌六帖　秋風抄　雲葉和歌集　新和歌集
續門葉和歌集　續現葉和歌集　臨永和歌集　藤葉和歌集

玄々集　今撰和歌集　柳風和歌集　新撰和歌集
金玉集　三十六人撰　後六々撰　新三十六人撰
為家卿千首　師兼卿千首　宗良親王千首　為尹卿千首
文明御着到千首　白川殿七百首　亀山殿七百首　堀河院御時百首 亦太郎百首
永久四年百首 亦次郎百首　久安百首　正治院百首　建保名所百首
弘長元年百首 亦七玉集　丹後守為忠家百首　木工權頭為忠家百首　句題百首 亦五二〻集
朗詠百首　後成卿五社百首　國冬朝臣祈雨百首　為兼卿鹿百首
後成恩寺殿南都百首　道助法親王家五十首　新古今集竟宴和歌　續古今集竟宴和歌
文治女御入内御屏風和歌　昭慶門院御屏風和歌
最勝四天王院名所障子和歌　大江千里句題和歌　紀師匠家曲水宴和歌
宗尊親王三百首　為理卿七夕七十首　在民部卿家歌合　寛平中宮歌合
延喜亭子院歌合　同陽成院歌合　同亭子院有心無心歌合
天徳内裏歌合　天延掾川中納言家歌合　同条大納言家歌合　長元大納言家歌合
同賀陽院水閣歌合　長暦源大納言家歌合　長久弘徽殿女御歌合　永承祐子内親王家歌合

天喜皇后宮春秋歌合
同呂保殿歌合
應德若狹守通宗朝臣女子達歌合
天仁山家五番歌合
同内大臣家歌合
同南宮歌合
永暦清輔朝臣家歌合
同住吉社歌合
安元右大臣家歌合
建久若宮社歌合
建仁老若歌合
同鳥羽城南寺影供歌合
同八幡宮若宮撰歌合
同別雷社歌合

治暦定綱朝臣家歌合
延久氣多宮歌合
長治源廣綱家歌合
保安関白内大臣家歌合
同住吉社歌合
永万重家朝臣家歌合
同建春門院北面歌合
治承加茂社歌合
同民部卿家歌合
同新宮撰歌合
同水無瀬釣殿歌合
元久北野宮歌合
建暦歌合

同禖子内親王家歌合
承保攝津守有綱家歌合
寛治高陽院歌合
永久六條宰相家歌合
大治花林院歌合
長承中宮亮顕輔家歌合
仁安経盛朝臣家歌合
承安廣田社歌合
同廿二番歌合
正治御室撰歌合
同影供歌合
同恋十五首歌合
建永卿相侍臣歌合
同十三夜歌合

同親王家歌合
承暦内裏歌合
永長東塔東谷歌合
元永内大臣家歌合
同西宮歌合
久安家成卿家歌合
嘉應實國卿家歌合
同新羅社歌合
同右大臣家歌合
同仙洞十人歌合
同院撰歌合
同櫻宮歌合
同加茂御祖社歌合
同仙洞歌合

建保禁裏歌合
同六月十一日歌合
同四月廿日歌合
同十一月四日歌合
貞永攝政家歌合
宝治院歌合
建治攝政家歌合
正安伊勢新名所歌合
嘉元永福門院歌合
天授五百番歌合
康正内裏歌合
同廿一番歌合
同殿中十五番歌合
同秋十五番歌合

同八月廿六日歌合
同百番歌合
同八月十五夜歌合
同二月十一日歌合
同名所月歌合
建長影供歌合
正應卅番歌合
同當座歌合
同十八番歌合
應永内裏歌合
文明親長卿家歌合
同九月盡歌合
文亀卅六番歌合
文禄後陽成院歌合

同九月盡歌合
同八月廿二日歌合
同前関白家歌合
同月十二日歌合
嘉禎遠島御歌合
文永八月十五夜歌合
永仁八月十五夜歌合
乾元仙洞歌合
元亨外宮北御門歌合
宝徳仙洞歌合
同江戸歌合
同将軍家歌合
大永蜷川親孝家歌合
近江御息所歌合

同四十五番歌合
同月廿四日歌合
同四十番歌合
寛喜石清水若宮歌合
寛元河合社歌合
同亀山殿歌合
同當座卅番歌合
同五月四日歌合
貞治新玉津島歌合
同百番歌合
同七月七日七首歌合
同十五番歌合
永禄八月十五夜三首歌合
源順馬毛名歌合

一條大納言家歌合
西國受領歌合
経平大貳家歌合
源大納言師房卿家歌合

播磨守兼房家歌合
禖子内親王家庚申夜歌合
同櫻柳歌合
同夏歌合

山家三番歌合
國信卿家歌合
雲居寺結縁經後宴歌合
為兼卿家歌合

頓阿判卅番歌合
公武歌合
武家歌合
正廣判地下歌合

前十五番歌合
後十五番歌合
時代不同歌合
新時代不同歌合

定家隆五十番歌合
建長閑窓歌合
弘長卅六人歌合
女房卅六人歌合

御裳濯河歌合
宮河歌合
慈鎮和尚自歌合
知家卿自歌合

後京極殿御自歌合
後鳥羽院御自歌合
定家卿自歌合
家隆卿自歌合

隆祐朝臣自歌合
永福門院御自歌合
慈照院殿御自歌合
尭孝法印自歌合

道堅法師自歌合
豊原統秋自歌合
十市遠忠自歌合
細川高國朝臣自歌合

元久詩歌合
建保詩歌合
建治現存卅六人詩歌合
康永詩歌合

守邉詩歌合
文安詩歌合
文明詩歌合
同將軍家詩歌合

寛平菊合
上東門院菊合
朱雀院女郎花合
康保内裏前栽合

東三條院撫子合
後冷泉院根合
郁芳門院根合
仲実朝臣女子根合

圓融院扇合
堀川院艶書合
正子内親王絵合
五番何曽合

三番何曽合
顕昭陳状
蓮性陳状
土御門院御集

後崇光院御集 称沙玉集
元良親王御集
宗尊親王御集 称瓊玉集
宗良親王御集 称李花集

西宮左大臣御集
鎌倉右大臣御集
常徳院御集
人麿卿集

家持卿集
兼輔卿集
敦忠卿集
朝忠卿集

師氏卿集
朝光卿集
公任卿集
定頼卿集

俊忠卿集
雅兼卿集
成通卿集
実國卿集

資賢卿集
長方卿集
為重卿集
為廣卿集 称清玉集

為和卿集
言継卿集
雅経卿集 称明日香井集
雅有卿集 称隣女集

輔親卿集
行宗卿集
顕季卿集
顕輔卿集

頼政卿集
紀貫之集
在原業平朝臣集
藤原敏行朝臣集

源宗于朝臣集
源公忠朝臣集
大中臣頼基朝臣集
猿丸大夫集

紀友則集
坂上是則集
藤原清正集
藤原元真集

源信明朝臣集
藤原義孝集
藤原仲文集
源順集

大中臣能宣朝臣集　清原元輔集　平兼盛集　藤原実方朝臣集
藤原高光集　藤原相如集　源重之集　藤原長能集
源兼澄集　源道濟集　橘為仲朝臣集　藤原顕綱朝臣集
源頼實集　津守國基集　源俊頼朝臣集 称散木集　藤原為忠朝臣集
菅原在良朝臣集　藤原基俊集　藤原清輔朝臣集　源師光集
源有房朝臣集　平忠度朝臣集　惟宗廣言集　鴨長明集
藤原隆信朝臣集　藤原隆祐朝臣集　藤原光経集　源髙範集
平常縁集　源資持集 称慕京集　源直朝集 称桂林集　山邊赤人集
凡河内躬恒集　藤原興風集　壬生忠岑集　壬生忠見集
曽根好忠集 称曽丹集　櫻井基佐集　覺性法親王御集 称出観集　守覺法親王御集
遍昭僧正集　源賢法師集　夢窓國師集　慶運法印集
堯孝法印集　素性法師集　恵慶法師集　安法々師集
登蓮法師集　俊恵法師集 称林葉集　寂然法師集　寂蓮法師集
兼好法師集　元可法師集　宗祇法師集　嘉喜門院御集

齋宮女御集　經信卿母集　俊成卿女集　小野小町集
檜垣嫗集　木院侍従集　小馬命婦集　馬内侍集
伊勢集　中務集　賀茂保憲女集　小大君集
清少納言集　紫式部集　和泉式部集　相模集 称玉藻州
赤染衛門集　伊勢大輔集　康資王母集　辨乳母集
出羽辨集　祐子内親王家紀伊集　二條大皇太后宮大貳集
待賢門院堀川集　二條院讃岐集　小侍従集　建礼門院右京大夫集
中殿御會部類記　晴御會部類記　貞治六年中殿御會記 称雲井花
柿本朝臣人丸勘文　柿本影供記　柿本講式　柿本寺人丸像彩色勧進帳
菅家萬葉集　古今和歌集目録　顕昭古今集序註　古今集童蒙抄
僻案抄　三代集間事　拾遺抄註　難後拾遺
散木集　藏玉和歌集　悦目抄　後鳥羽院御口傳
夜鶴抄 一名阿佛口傳　愚問賢註　近来風體抄　和歌九品
歌仙落書　續歌仙落書　俊成卿正治奏状　定為法印申文

為兼為世両卿訴陳状　長明無名抄　井蛙眼目　今川了俊和歌所不審條々
了俊辨要抄　落書露顕　徴書記物語　東野州聞書
兼載雑談　西公談抄　桐火桶　三五記
愚秘抄
巻第三百三至巻第三百六　連歌部　四巻
菟久波問答　吾妻問答　さゝめごと　老乃久理言
老のすさみ　若草山　連歌本式　連歌新式
漢和法式
巻第三百七至巻第三百十九　物語部　十三巻
伊勢物語　朱雀院塗籠御本　大和物語　竹取翁物語
住吉物語　秋夜長物語　鳥部山物語　松穂物語
無名草子　物語百番歌合　源氏狭衣歌合　物語十二番女合
源氏心久良邊　伊勢物語知見抄　源氏物語奥入　紫明抄
原中最秘抄　弘安源氏論義　仙源抄　源語秘訣

雨夜談抄
巻第三百二十至巻第三百二十六　日記部　七巻
和泉式部日記　紫式部日記　讃岐典侍日記　辨内侍日記
中務内侍日記　堯孝日記　玄与日記　宗長手記
巻第三百二十七至巻第三百四十　紀行部　十四巻
土佐日記　盧主　更科日記　高倉院厳島御幸記
後鳥羽院熊野御幸記　源光行海道記　道範阿闍梨南海流浪記
源親行紀行　轉寝記　十六夜日記　都乃津登
小島乃口須佐美　宝篋院殿住吉詣記　道行ぶり　鹿苑院殿厳島詣記
奈具佐免草　伊勢紀行　冨士紀行　覧冨士記
冨士御覧記　冨士歴覧記　善光寺紀行　藤川記
正廣日記　平安紀行　宗祇筑紫道記　北國紀行
廻國雑記　逍遥院殿高野参詣記　称名院殿吉野詣記　玄旨法印九州道記
長嘯子九州道記　尊海僧正紀行　北条氏康武蔵野紀行　玄旨法印東國陣道記

蒲生氏郷紀行　宗長東路乃津と　紹巴冨士見記　東國紀行
巻第三百四十一至巻第三百五十二　管絃部　十二巻
管絃音義　九重十操記　龍鳴抄　懐竹抄
胡琴教録　舞樂要録　雑秘別録　舞曲口傳
夜鶴庭訓抄　残夜抄　綵竹口傳　木師抄
秦箏血脉　琵琶血脉　琵琶合　八音抄
東遊歌　風俗歌　神樂歌註秘抄　催馬樂註秘抄
新撰朗詠集　梁塵秘抄口傳集
巻第三百五十三至巻第三百五十五　蹴鞠部　三巻
承元御鞠記　貞治二年御鞠記　享徳二年晴御鞠記　後鳥羽院御記
成道御口傳　蹴鞠略記　蹴鞠肝要抄　遊庭秘抄
巻第三百五十六至巻第三百五十七　鷹部　二巻
新修鷹経　嵯峨野物語　白鷹記　養鷹記
後京極殿鷹三百首　定家卿鷹三百首　慈鎮和尚鷹百首　定家卿鷹百首

西園寺殿鷹百首　根津松鷗軒記
巻第三百五十八至巻第三百六十三　遊戯部　六巻
薫集類抄　後伏見院宸翰薫物方　無久佐濃多称
五月雨日記　志野宗信家名香合　名香目録　圍碁口傳
圍碁式　仙傳抄　君臺觀左右帳記　御飾記
作庭記　洛陽田樂記　文安田樂能記　糺河原勧進猿樂日記
同勧進申樂記　桒田口猿樂記
巻第三百六十四至巻第三百六十八　飲食部　五巻
厨事類記　世俗立要集残缺　四條流庖丁書　武家調味故實
大草家料理書　庖丁聞書　大草相傳聞書　喫茶養生記
喫茶往来　酒茶論　亭子院給酒記　酒食論
北野大茶湯記
巻第三百六十九至巻第三百九十九　合戦部　三十巻
将門記　純友追討記　陸奥話記　後三年合戦記

承久記　梅松論　伯耆巻　明徳記
應永記 一名大内義弘退治記　嘉吉記　長禄寛正記
文正記　應仁記　應仁略記　應仁別記
永禄記　豊鑑　細川両家記 一名二川分流記
大和記　勢州四家記　鎌倉大草紙　関東兵乱記
結城戦場物語　永享記　豆相記　河越記
深谷記　鵠臺前記　鵠臺後記　房總治乱記
鹿島治乱記　江濃記　江北記　舟田乱記
箕輪記　蘆名記　蒲生氏郷記　伊達成実記
柴田退治記　富樫記　小松記　荒山合戦記
末森記　赤松記　赤松再興記　別所長治記
大内義隆記　中國治乱記　阿州将畧記　三好別記
十河物語　豫章記　大友興廃記 一名九州治乱記
難太平記　上月記　荒木略記　親房卿関城書

吉野事書案　阿蘇惟澄申状　菊池武朝申状　上杉輝虎注進状
豊臣太閤御事書　沙弥洞然長状
巻第四百至巻第四百二十四　武家部　二十五巻
貞永式目　貞永式目追加　建武式目　建武式目追加
侍所沙汰篇　政所壁書　大内家壁書　北條早雲廿一箇條
武田信玄百箇條　朝倉敏景十七箇條　長曽我部元親百箇條　鹿苑院殿御元服記
普廣院殿御元服記　光源院殿御元服記　常徳院殿御乗馬始記
宝篋院殿将軍宣下記　普廣院殿任大臣節會次第
同御拝賀次第　同大将御拝賀雑事　鹿苑院殿御直衣始記
長禄二年已後申次記　殿中申次記　年中定例記　正月御事始記
成氏朝臣年中行事　飯尾宅御成記　畠山亭御成記　祇園會御見物御成記
伊勢亭御成記　三好亭御成記　朝倉亭御成記　前田亭御成記
文禄四年御成記　諸大名衆御成申入記　供立日記　御供故実
走衆故実　大内問答　奉公覚悟記　了俊大雙紙

宗五大雙紙　簾中舊記　上﨟名事
嫁迎記　方量物　射礼私記　嫁入記
流鏑馬次第　笠掛記　鹿足記　犬的體拜記
騎射秘抄　八廻日記　出法師落書　犬追物目安
家中竹馬記　土岐家聞書　矢開記　高忠聞書
空穂次第　随兵日記　随兵次第　狩詞記
築城記　御産所日記　産所記　軍陣聞書
文明十一年記　六波羅下知　攝津親秀譲状　建治三年記
御随身三上記　諸家紋帳　義貞記　齋藤親基日記
馬具寸法記　武具要説

巻第四百二十五至巻第四百四十五　釋家部　二十一巻

釋家初例抄　釋家官班記　太神宮御相傳袈裟記　石清水不断念佛縁起
加茂櫻會縁起　春日社三十講最初御願文　圓融院御授戒記
後宇多院御灌頂記　承久三年七佛藥師御修法記　後嵯峨院宸筆御八講記
同假字記　延徳御八講記　わかみやの遷代　雲井乃御法
さゝ川の御法　奥山乃御法　後光嚴院三十三回聖忌記
後土御門院十三回聖忌記　陽禄門院三十三回御忌記
仁和寺諸堂記　廣隆寺来由記　清水寺縁起　醍醐寺縁起
安樂光院記　楞伽寺記　勧修寺縁起　般舟三昧院記
南禅寺記　資聖禅寺造営記　東福紀年録　萬壽禅寺記
鹿王院記　尊勝寺供養記　法勝寺供養記　無量壽院供養記
法成寺金堂供養記　同藥師堂供養記　東北院供養記　應徳東寺塔供養記
建武元年東寺塔供養記　相國寺供養記　同塔供養記
大安寺伽藍縁起并流記資財帳　同寛平縁起　藥師寺縁起
東大寺大佛記　同造立供養記　同金銅記文　興福寺縁起
多武峰縁起　同略記　長谷寺縁起　當麻寺縁起
觀心寺縁起実録帳　山门堂社記　叡岳要記　九院佛閣抄
延暦中堂供養記　天元同供養記　永正同供養記　弘安大講堂供養記

木下川薬師佛縁起　日光山中禅寺私記　讃岐國白峯寺縁起　筑前國聖福寺佛殿記
永正十八年高野山焼失記　近江國金勝寺官符　佛牙舎利記　[illegible]王院如意宝珠記
二荒山千部會縁起　日光山三月會縁起　慈恵大僧正遺告　阿弥陀院宝物帳
観世音寺資財帳　左記　右記　鶴岡執行珍祐法印記
發心和歌集　法文百首和歌

巻第四百四十六至巻第五百三十　雑部八十四巻

古語拾遺　日本霊異記　新撰姓氏録　大鏡裏書
康平記　宇槐雑抄　達幸故実抄　天慶二年記
永久元年記　醍醐寺雑事記　仁和寺日次記　文保三年記
元弘元年鈎璽渡御記　光明寺残篇　関城書裏書
建武記　鳩嶺雑事記　祇園執行日記　醍醐雑抄
後奈良院御記　御湯殿上日記　保暦間記　花営三代記
如是院年代記　編記　革命勘文　諸道勘文残缺
長寛勘文　法曹類林残缺　濫觴抄　代始和抄

禁秘御抄一名建暦御記　禁扱秘抄　名目抄　世俗浅深秘抄
類聚雑要抄　桃華蘂葉　弘安礼節　二判問答
三内口訣　大饗略次第　大饗御装束間事　大饗雑事
嘉禎二年六月大饗次第　建長六年十二月大饗次第
十七箇條憲法　建暦二年新制廿一箇條　清行朝臣意見十二箇條
文時卿封事三箇條　寛平御遺誡　九條殿遺誡　澁柿
竹馬抄　小夜の寝覚　文明一統記　樵談治要
乳母の文　乳母艸紙　身の形見　慈元抄
清少納言枕草紙異本　隆房卿艶詞　長明方丈記　頓阿十楽菴記
肖柏夢菴記　同三愛記　宗長宇都山記　称名院右府三塔巡礼記
同石山月見記　東光院殿嵯峨記　尊朝法親王唐崎松記　玄旨法印夢想記
さゝ衣　多武峰少将物語　鳴門中将物語　時秋物語
今物語　野守鏡　吉野拾遺　江談抄
続古事談　東斎随筆　大槐秘抄　[illegible]の日記

真俗交談記　驥驢嘶餘　門室有職抄　海人藻芥
験牛繪詞　國牛十図　伊行朝臣夜鶴抄　一葉抄一名筆體抄
入木抄　仁和寺書籍目録　信西藏書目録　文和仙洞御書目録
點圖部類　大和假名反切義解　桂林遺芳抄　新撰字鏡
中正子　出雲風土記　豊後風土記　對馬國貢銀記
多氣窓堂　駿河風土記　安東郡專當沙汰文
康正二年造内裏段銭國役引付　東北院職人歌合　鶴岡放生會職人歌合
三十六番職人歌合　七十一番職人歌合　十二類歌合　調度歌合
永正狂歌合　常盤嫗物語　精進魚類物語　柿本氏系図
後奈良院御撰何曽　公武大體略記　世諺問答　暦林問答
紹運要略　立坊次第　女后名字抄一名貴女抄　女院記
謚號雜記一名船永知古　暦名土代　御評定着座次第　永享以来御番帳
文安年中御番帳　永禄六年諸役人附　長享元年江州御動座在陣衆着到
東大寺奴婢籍帳　常樂記　近江國番場宿蓮華寺過去帳

相模國鎌倉松岡過去帳　常陸國六段田村六地藏寺過去帳
同國田島村和光院過去帳　類聚雜例　高倉院昇遐記
四條院御葬禮記　亀山院御葬礼記　伏見院御中陰記　後光厳院御佛事記
後小松院崩御記　山乃霞　山賤記　後奈良院御拾骨記
新待賢門院七々忌御願文　鹿苑院殿薨葬記　同追善記
鹿苑院殿をいためる辞　常徳院殿薨逝記　萬松院殿穴太記
總見院殿追善記　朝乃雲　宇奈比松　宗祇終焉記
吉事次第　吉事畧儀　贈官位宣旨記　諸陵雜事
文保記　永正記　觸穢考　婚記
女御々産部類記　中宮御産部類記　治承二年中宮御産記　春華門院御百日記
延慶四年新院姫宮御行始記　北山女院御入内記　安元御賀記
俊成卿九十賀記　称名院右府七十賀記　清輔朝臣尚歯會記

已上一千二百七十七部

○按ずるに本邦古来書典乃大部なるものハ滋野貞主の秘府略千巻

つくろ書ありて除あらしゝ藤原敦基の柱下類林も百六十巻藤原通
憲の法曹類林二百三十巻等ありて其書いま卑しく世に伝れる
國史のうち淳和天皇の天長八年東宮學士滋野貞主諸儒と古今の
書物撰集す類を以て相従ふ一千巻なり秘府略と名付しかども
今塙氏集もる所の書すでに一千二百七十餘部に及べり彼天長よ
りはや千歳の今に至て此盛挙ありしそれ切に偉なりずや先
此書に名付たる類従の二字ちなみにすらるはひろく彼秘府略に
しのべるなりやこれぞ續羣書類従彙輯のこゝろざしにて
てふさびす今の書物あつもりるは已に一千部のかずにも過にたり其
門人某氏にのべたり

羣書一覽拾遺　嗣出

享和二年歳在壬戌夏六月
浪速新街西口小濱町
書林多田定學堂
海部屋勘兵衛蔵版

和書門
類
八九四九號
一二三函
七架
六冊

内閣文庫
和書
類
八九四九號
六冊
二大一函
一九架